

— 茨城県土浦市 —

史跡 土浦城跡Ⅱ

— 茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う埋蔵文化財第2次・第3次発掘調査報告書 —

2004

土 浦 市
土浦市教育委員会
土浦城跡第三次調査会

—— 茨城県土浦市 ——

史跡 土浦城跡Ⅱ

—茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う埋蔵文化財第2次・第3次発掘調査報告書—

2004

土 浦 市
土浦市教育委員会
土浦城跡第三次調査会



第3次調査第3トレンチ遺物及び葺石状遺構検出状況

序

土浦市は霞ヶ浦の西端、新治台地と筑波稲敷台地の間を流れる桜川の下流に位置する、水と緑に恵まれた豊かな都市です。

この桜川低地の中央に位置する土浦城跡は、室町時代に築城され江戸時代に整備されたと伝えられているもので、いわば土浦の発展の礎になった城跡です。江戸時代の土浦城は、現在の市街地を含む広範囲な地域でしたが、時代の変遷の中でたくさんの近世の建物や遺構が失われてしまいました。しかし現在でも本丸及び二ノ丸の大半は茨城県指定史跡として残されており、憩いの場「亀城公園」としても市民に大変親しまれています。また、市内を歩いてみると江戸時代の町割の名残などが街中に点在していることに驚かされます。

このたび、土浦城址整備事業の一環として、平成12年度に引き続き土浦城跡の本丸土塁の発掘調査を実施いたしました。その結果、土浦城の歴史に関わる様々な新しい発見をすることができました。これらの調査資料を土浦城跡の整備に活用していくことはもちろん、今後の常総地域の歴史の解明にも役立てて行きたいと思っております。

最後になりますが、今回の調査にご協力・ご指導いただきました関係各位に感謝申し上げます。ごあいさついたします。

土浦市教育委員会
教育長 富永 善文

例 言

1. 本書は、土浦城跡第二次調査会（平成14年度）・土浦城跡第三次調査会（平成15年度）が実施した、土浦市中央1丁目1番所在の土浦城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市の依頼を受けて、土浦城址整備事業に伴う資料収集を目的とした学術調査として実施したものである。
3. 土浦城跡の発掘調査は、第2次調査は2003（平成15）年1月28日より同年2月7日まで現地の発掘作業を実施し、同年2月18日より2月28日まで出土品整理・報告書執筆作業を実施した。第3次調査は2003（平成15）年7月29日より同年8月30日まで現地の発掘作業を実施し、同年9月1日より2004（平成16）年2月29日まで出土品整理・報告書執筆作業を実施した。
4. 発掘調査は、第2次調査は窪田恵一（土浦城跡第二次調査会調査員）が担当した。第3次調査は石川 功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員）が担当し、窪田が補佐した。整理作業については石川・窪田が担当し、福田礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員）が補佐した。総括・編集は石川が行った。
5. 発掘調査、出土品整理及び報告書の作成については、次の諸氏、諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。（50音順・敬称略）
青木光行、石橋 充、猪俣忠男、茨城県教育委員会、茨城ビデオバック、岩崎宏之、上野修生、白田設計(株)、宇留野主税、大塚 博、小野寿美子、神戸信俊、工藤茂博、斉田克史、斎藤 新、佐藤正好、嶋田圭吾、田中哲雄、塚本福衛、土浦市都市整備部公園緑地課、土浦市文化財愛護の会、土浦市文化財保護審議会、土浦城址整備委員会、不二造園（株）、保立俊一、山本博利、横田 茂、吉澤 悟、渡辺広勝
6. 本書の執筆分担は次のとおりである。
石山 淳一 第1章
窪田 恵一 第2章第1節、第4章
石川 功 第2章第2節、第5章、第6章、第7章、第8章
窪田・石川 第3章
なお第2章第1節については、内容に変更点がないため『史跡 土浦城跡』（2002年発行）の文章を再録した。また第2章第2節も『史跡 土浦城跡』に集録したものをもとに加筆・修正して使用した。第7章については渡辺広勝（テラ・インフォメーション・エンジニアリング）の調査データをもとに石川が編集した。
7. 本書の写真は現場写真を石川・窪田が担当し、遺物写真は嶋田圭吾が担当した。
8. 本報告書にかかる出土品及び記録図面・写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場考古資料館に保管してある。なお、記録や遺物の整理・保管に際しては土浦城跡第2次調査にはO2TT-3、第3次調査にはO3TT-3次の略号を与えている。

凡 例

1. 本書について、遺構・土層に使用した記号は次のとおりである。
(遺構) SAH：塀 SAD：土塁 SB：建物跡 P：柱穴・Pit S：石材（近現代）
(土層) K：攪乱

上記以外は適宜注釈を付して任意の表示を行った。

2. 土層観察と遺物における色調の同定は『新版標準土色帖』（小川正忠、竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
3. 本書の遺構・遺物の指示は次のとおりである。
 - (1) 水糸レベルは海拔高度を示す。
 - (2) 遺物番号は本文・表・写真図版とも一致する。
 - (3) 出土遺物一覧表における瓦等の部位の名称及び計測箇所は次頁のとおりである。
 - (4) 遺構の縮尺は基本的に1/50である。それ以外については個々のスケールを参考のこと。
 - (5) 遺物の縮尺は原則として瓦は1/4、土師質土器・陶磁器・金属製品その他は1/2とした。
 - (6) 遺物観察表中の（ ）は実測（現存）値、[]は推定値を示す。
 - (7) 遺物観察表における胎土中の表記は肉眼観察の結果確認できた鉱物等のみを記入したものである。混入の割合についても観察者の主観的なものである。同様に土層注記における土層中の混入物の割合や粘性、締まりについても観察者の肉眼観察による主観的なものである。
 - (8) 本報告書中に使用している用語のうち「土壇」は建物（東櫓）が建てられている部分の盛土全体を指し、「櫓台」は土壇のうち土塁天場より上部で建物（東櫓）が直接建てられていた部分を示している。

調査会組織

土浦城跡第二次調査会（平成14年度調査）

会 長	須田 直之	土浦市文化財保護審議会 会長
副 会 長	石毛 一美	土浦市教育委員会 教育次長
理 事	大塚 博	土浦市文化財保護審議会 委員
理 事	飯沼 正勝	土浦市都市整備部 参事兼建築指導課長
理事（事務局担当）		
	岩沢 茂	土浦市教育委員会 文化課長
監 事	桜井 正広	土浦市教育委員会 教育総務課長
監 事	山本 順一	土浦市監査事務局 長補佐
事務局 長	宇津野利雄	上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長
事務局次長	三須 洋一	上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長 館長補佐
事務局員	堀部 猛	土浦市教育委員会 文化課主幹
事務局員	比毛 君男	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
事務局員	黒澤 春彦	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹（担当）
兼出納員		

調査組織

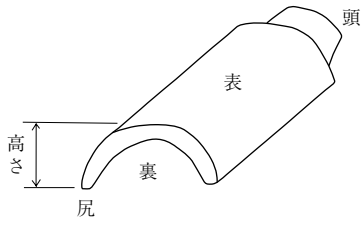
主任調査員	窪田 恵一
発掘作業員	大坪美知子、露久保三郎、友部政夫
事 務 員	鈴木ひと美

土浦城跡第三次調査会（平成15年度調査）

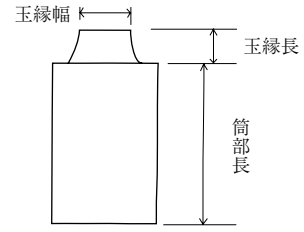
会 長	須田 直之	土浦市文化財保護審議会 会長
副 会 長	石毛 一美	土浦市教育委員会 教育次長
理 事	大塚 博	土浦市文化財保護審議会 委員
理 事	来栖 忠雄	土浦市都市整備部 参事兼建築指導課長
理事（事務局担当）		
	広瀬 昌則	土浦市教育委員会 文化課長
監 事	堀越 昭二	土浦市博物館協議会 委員
監 事	大内 誠二	土浦市監査事務局 長補佐
事務局 長	宇津野利雄	上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長
事務局次長	三須 洋一	上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長 館長補佐
事務局員	石山 淳一	土浦市教育委員会 文化課課長補佐兼文化財係長
事務局員	関口 満	上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹
事務局員	石川 功	上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長（担当）
兼出納員		

調査組織

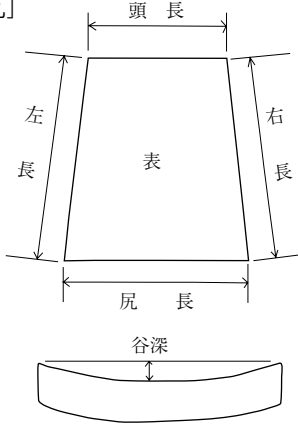
主任調査員	石川 功
調 査 員	窪田 恵一
（整理）調査員	福田礼子
発掘作業員	飯村二美、今泉雄次、倉田栄、小河原百合子、志間信子、鈴木茂子、長谷川はるみ、本間ひさ
整理作業員	新井栄子、大坪美知子、小松崎廣子、坂寄さち、志間信子、長嶺道子、長谷川はるみ、浜田久美子
事 務 員	鈴木ひと美



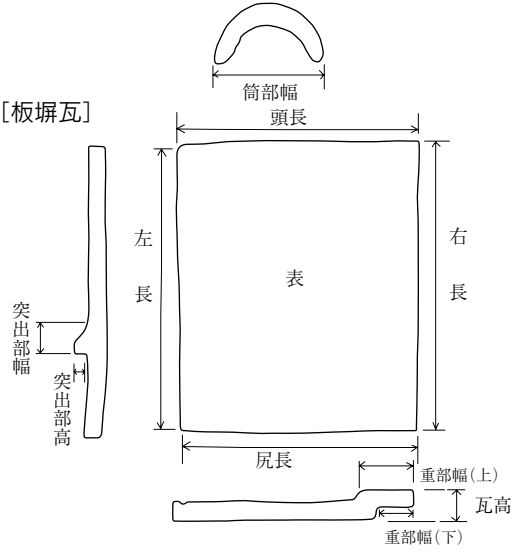
[丸瓦]



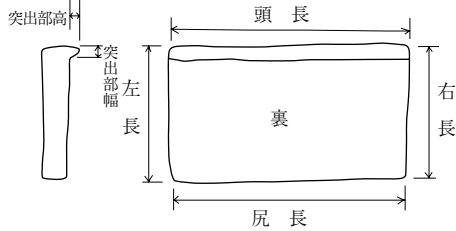
[平瓦]



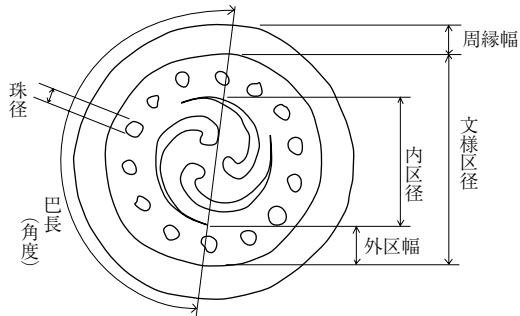
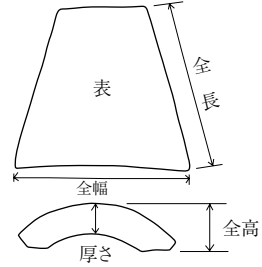
[板塀瓦]



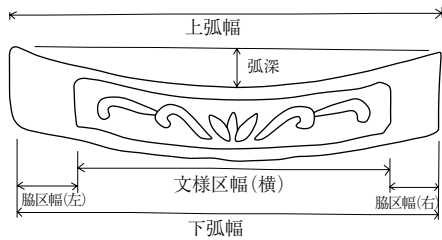
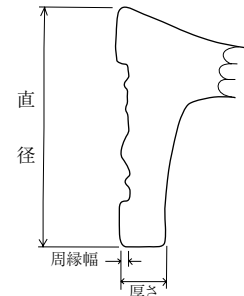
[板塀熨斗瓦]



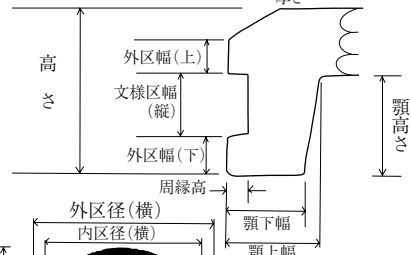
[輪違瓦]



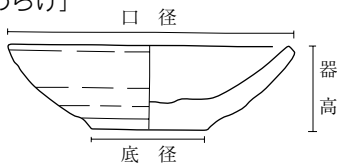
[軒丸瓦]



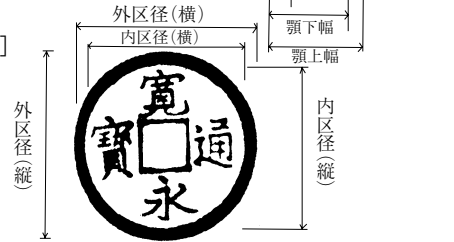
[軒平瓦]



[かわらけ]



[古銭]



各種瓦・かわらけ・銭貨の部位の名称 (計測箇所)

史跡 土浦城跡Ⅱ

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 土浦城の地理的環境と沿革	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	4
1. 原始・古代・中世初期	4
2. 土浦城の沿革	7
(1) 近世以前の土浦城	7
(2) 近世の土浦城	8
(3) 近代・現代の土浦城	11
(4) 土浦城関係の発掘調査記録	13
第3章 調査の概要	15
第1節 調査区の設定と調査方法	15
第2節 調査の概要	16
第4章 土浦城跡第2次調査	19
第1節 調査の経過	19
第2節 検出された遺構と遺物	19
第5章 土浦城跡第3次調査	22
第1節 調査の経過	22
第2節 検出された遺構と遺物	23
1. 第1トレンチ	23
2. 第2トレンチ	27
3. 第3トレンチ	30
4. 第4トレンチ	41
5. 第5トレンチ	51
6. 表採資料	54
第6章 考察	60
第1節 遺構	60
1. 想定される堀について	60
2. 「葺石」について	62
3. 砂利敷面について	64

第2節 遺物	66
1. 軒丸瓦について	66
2. 軒平瓦について	72
第7章 付編	78
第8章 調査のまとめ	79
参考文献	
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 土浦城跡周辺の地形図	3
第3図 周辺の遺跡	6
第4図 土浦城跡・発掘調査箇所と主要施設（門）の位置	10
第5図 昭和48年改修工事以前の二ノ丸	11
第6図 亀城公園全体図（原図：1985年作成）	17
第7図 本丸東側土塁全体図	18
第8図 第2次調査 平面図・土層断面図	21
第9図 第1トレンチ 平面図・遺物出土状況図・土層断面図	24
第10図 第1トレンチ 出土遺物（1）	25
第11図 第1トレンチ 出土遺物（2）	26
第12図 第2トレンチ 平面図・遺物出土状況図・土層断面図	28
第13図 第2トレンチ 出土遺物（1）	29
第14図 第2トレンチ 出土遺物（2）	30
第15図 第2トレンチ 出土遺物（3）	31
第16図 第3トレンチ 葺石状遺構 平面図・断面図	32
第17図 第3トレンチ 平面図・遺物出土状況図・土層断面図	33
第18図 第3トレンチ 出土遺物（1）	36
第19図 第3トレンチ 出土遺物（2）	37
第20図 第3トレンチ 出土遺物（3）	38
第21図 第3トレンチ 出土遺物（4）	39
第22図 第3トレンチ 出土遺物（5）	40
第23図 第3トレンチ 出土遺物（6）	41
第24図 第4トレンチ 平面図・遺物出土状況図・土層断面図（1）	43
第25図 第4トレンチ 土層断面図（2）	45
第26図 第4トレンチ 出土遺物（1）	46

第27図	第4トレンチ	出土遺物(2)	47
第28図	第4トレンチ	出土遺物(3)	48
第29図	第4トレンチ	出土遺物(4)	49
第30図	第4トレンチ	出土遺物(5)	50
第31図	第5トレンチ	平面図・遺物出土状況図・土層断面図	52
第32図	第5トレンチ	出土遺物	53
第33図	表採資料		54
第34図	推定される堀の位置		61
第35図	推定される葺石状遺構と建造物の関係		63
第36図	砂利敷遺構と東櫓の関係		65
第37図	櫓門使用軒丸瓦		67
第38図	土浦城跡出土軒丸瓦		68
第39図	櫓門使用軒平瓦		73
第40図	土浦城跡出土軒平瓦		74
第41図	土浦城跡出土軒平瓦の編年(案)		75

挿表目次

第1表	周辺の遺跡	5
第2表	近世土浦城の整備記録	9
第3表	近・現代の土浦城跡(亀城公園)の整備記録	12
第4表	土浦城跡第3次調査各調査区出土瓦の傾向	54
第5表	瓦類観察表(1)	55
第6表	瓦類観察表(2)	56
第7表	瓦類観察表(3)	57
第8表	瓦類観察表(4)	58
第9表	その他の遺物観察表	59
第10表	土浦城跡使用・出土軒丸瓦一覧表	69
第11表	土浦城跡使用・出土軒丸瓦の傾向	71

写真図版目次

図版1	第2次調査堀跡(SAH)検出状況(北西より)
	堀跡(SAH)検出状況(北東より)
	砂利敷遺構検出状況(南西より)
図版2	堀跡(SAH)近接(南西より)
	堀跡(SAH)土層断面(南西より)
	瓦廃棄土坑 検出状況(南東より)
図版3	東櫓周辺古写真(南東より)

- 第3次調査 第1トレンチ調査前現況（南より）
第1トレンチ遺物出土状況（南より）
- 図版4：第1トレンチ土層断面（上部）（東より）
第1トレンチ土層断面（下部）（東より）
第1トレンチ全景（南より）
- 図版5：第3次調査 第2トレンチ調査前現況（南東より）
第2トレンチ土層断面（北東より）
第2トレンチ全景（南東より）
- 図版6：第3次調査 第3トレンチ調査前現況（南東より）
第3トレンチ遺物及び葺石状遺構検出状況（北東より）
第3トレンチ遺物及び葺石状遺構検出状況（北西より）
- 図版7：第3トレンチ遺物出土状況（北東より）
第3トレンチ葺石遺構出土状況（北より）
第3トレンチ葺石状遺構検出状況（北西より）
- 図版8：第3次調査 第4トレンチ調査前現況（北西より）
第4トレンチ遺物出土状況（南より）
第4トレンチ全景（南より）
- 図版9：第4トレンチ地業跡検出状況（南西より）
第4トレンチ遺物出土状況（南より）
第4トレンチ全景（北より）
- 図版10：第3次調査 第5トレンチ調査前現況（南西より）
第5トレンチ堀跡（SAH）検出状況（東より）
第5トレンチ全景（南より）
- 図版11：第3次調査第1トレンチ出土遺物
- 図版12：第3次調査第2トレンチ出土遺物
- 図版13：第3次調査第2・3トレンチ出土遺物
- 図版14：第3次調査第3トレンチ出土遺物
- 図版15：第3次調査第3トレンチ出土遺物
- 図版16：第3次調査第4トレンチ出土遺物
- 図版17：第3次調査第4トレンチ出土遺物
- 図版18：第3次調査第4トレンチ出土遺物
- 図版19：第3次調査第5トレンチ出土遺物、表採資料

第1章 調査に至る経緯

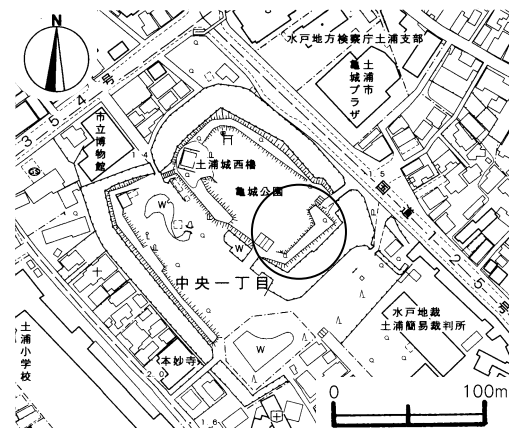
土浦城跡は昭和初期に本丸・二の丸が城址公園となり、1952(昭和27)年11月18日に「土浦城跡及び櫓門」として県指定史跡第1号に指定されている。以降、土浦市民の憩いの場として現在まで土浦のシンボルとして大いに親しまれているところである。昭和50年代以降、物質的な豊かさから精神的な豊かさを求める時代へと変化し、それまでの画一的なまちづくりから、郷土の風土や歴史の魅力を踏まえた特徴あるまちづくりが求められるようになり、土浦城再建の声が沸き上がったのである。その声は1984(昭和59)年の「土浦城址整備検討委員会」の発足へとつながり、さらに1986(昭和61)年12月に「土浦城址整備委員会」へと発展している。そして、その答申のもと土浦城関係の各種建造物の調査や修理が計画・実施されている。復元の資金づくりにあっては「お城づくりをすすめる会」(1988(昭和63)年4月)が設立され、その活動により市民各界各層から多くの寄付金が集められ、西櫓・東櫓の復元工事費用に充てられたのは記憶に新しい。

また1986(昭和61)・87(昭和62)年度には櫓門の解体修理、1987年度には郁文館の正門解体保存修理も城址整備事業の一環として行われた。復元事業としては、西櫓が1989(平成元)年11月に着工され、1991(平成3)年8月に再建された。引き続き東櫓は1996(平成8)年9月に着工され、1998(平成10)年10月に竣工している。

そして1999(平成11)年度、次の城址整備事業として土浦城の塀復元を目指し種々検討を重ねたが、資料に乏しく不明な部分については他の関係調査の結果により補う必要があった。そのため文献資料や痕跡調査、発掘調査による検証など多角的な収集分析が不可欠となり、2000(平成12)年5月、歴史・建築合同専門委員会を開催し検討した結果、同年6月に歴史・建築・考古の6名からなるワーキンググループを組織化し、資料の専門的な収集・調査・検討を行うこととなった。このうち発掘調査については、塀の土台となる土塁を面的に調査して塀の位置・形状や形態を確認するための学術調査が計画された。

そこで、2000(平成12)年11月から2001(平成13)年1月に本丸東側の土塁を対象に城内施設及び土塁の構築状況を確認するため発掘調査を実施した。その結果土塁上から塀基礎と考えられる石敷遺構や土塁の葺石状遺構が検出されたほか、土塁構築方法についての新知見が得られ、詳細は『史跡 土浦城跡』2002に纏められている。ただし東櫓と塀の接続部や土塁南東角から櫓門までの間の塀基礎は未確認であり、また葺石状遺構の性格についても不明な点が多いことから、再度の学術調査が必要となった。

そのため、まず第1次調査で未調査であった東櫓南側の石敷遺構の確認を目的として第2次調査を実施することとなり、2002(平成14)年12月19日付土教委発第1044号にて土浦城跡の現状変更許可申請を行い、同年12月26日付文指令第32号にて現状変更許可を得たため、2003(平成15)年1月20日に土浦城跡第二次調査会を組織し同年1月から2月に発掘調査を実施した。また第3次調査については、土塁南東角から櫓門間の塀基礎遺構の確認、



第1図 調査区位置図

及び第1次・第2次調査で確認された土塁外表施設である葺石状遺構の把握を目的として、平成15年5月29日付土教委発第640号にて同様に現状変更許可申請を行い、同年6月4日付文指令第16号にて現状変更許可を得たため、6月24日に土浦城跡第三次調査会を組織し、2003(平成15)年7月から8月の間、発掘調査を行うこととした。なお第3次調査の費用の一部は、茨城県の緊急雇用対策事業の補助事業として採択を受けたものである。

第2章 土浦城の地理的環境と沿革

第1節 地理的環境

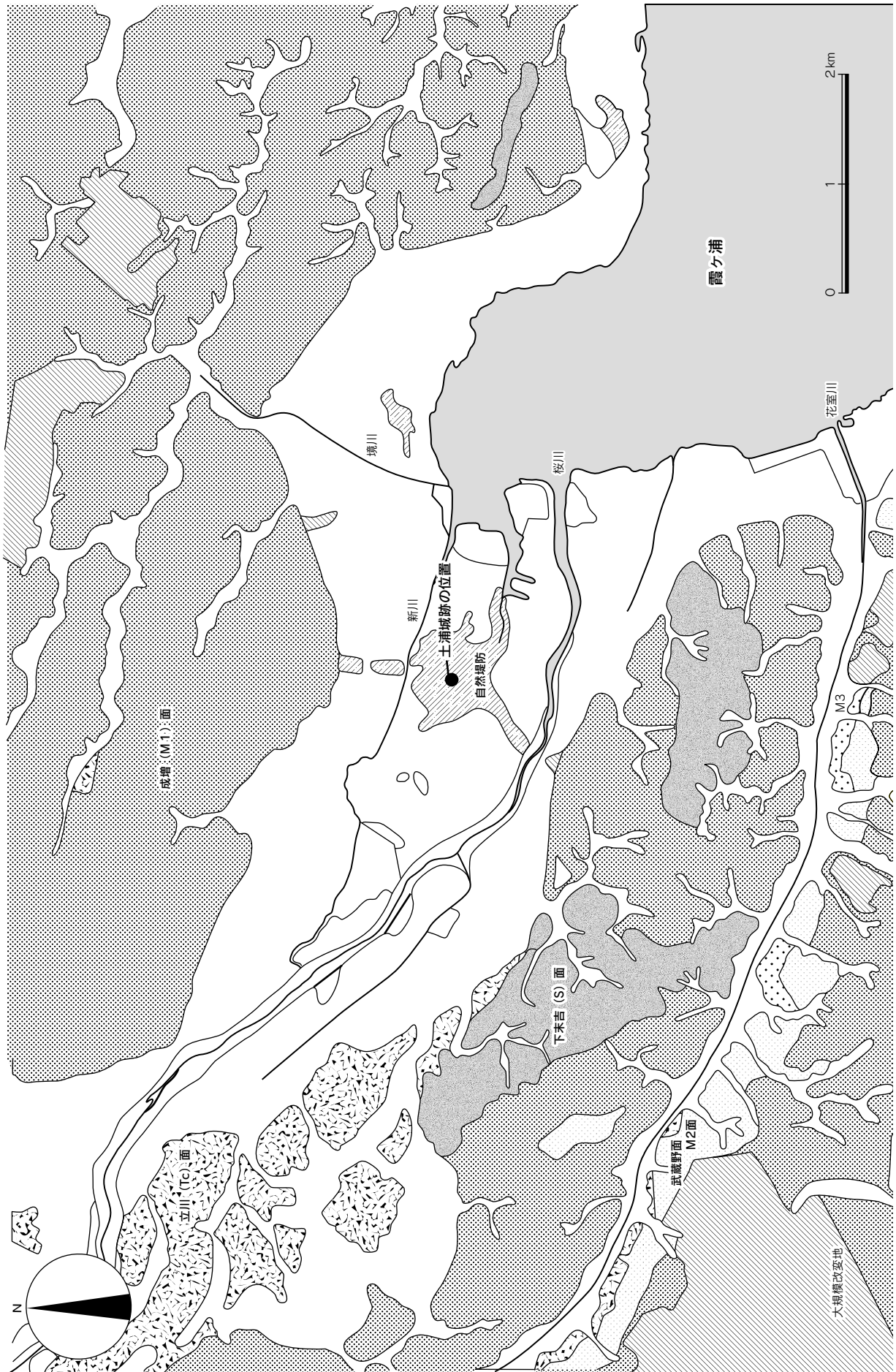
土浦城跡はJR常磐線土浦駅から北西1kmに位置する。周辺には土浦警察署、土浦消防署、検察庁土浦支部など国・県の行政機構施設が集中している。さらに旧国道6号線であった125号や354号線に挟まれた交通の要所でもある。

地形環境では、筑波山塊南側に広がる新治台地と筑波稲敷台地に区分されている更新世台地を、南北に大きく二分する桜川低地内に形成された自然堤防地形の上に立地する。桜川では古鬼怒川が現在より2万年前頃、関東造盆地構造による地盤沈降で西に流路移動を起こしたことと、更新世最寒冷期による海水面の標高低下が契機となって桜川低地の下刻が生じた。更新世終末期から完新世移行期以降の温暖化現象によって、海水面が上昇し桜川開析谷が内海化を起こしていく。現在の霞ヶ浦は最大水深7.3m、平均水深3.4mと水深が浅い湖水であるが、厚いシルト層の下には桜川の下刻作用で形成された埋没谷が隠れている。霞ヶ浦町歩崎沖では基底礫層までの深度が50mほどでかなり急峻な谷であった。そうした谷地形が、海水準の上昇で土浦入りと高浜入りには大量のシルトが堆積した。

土浦城の構築された自然堤防地形は、桜川低地を霞ヶ浦と桜川低地を区分するように、まるで桜川を塞ぐ状態に形成されている。自然堤防の中心は土浦城が構築され、南北に細長く砂嘴状に伸びている。北側は真鍋町を抜けて、土浦一高の台地下に接続する。南側は大町から南に伸び桜川によって一部が分断されているが、銭亀橋付近から常福寺下に接続する。この南北の砂嘴地形は、江戸時代に整備された水戸街道がその上を走っていた。この砂嘴地点で低地幅2.2kmを測るが、この南北には都合いい堤防地形はなく、ここより上流下流とも低地幅が広くなりまさにこの場所が桜川の最良の渡河地点であったことが理解できるのである。

土浦城跡付近では地表面下5m付近に礫層が存在することがボーリング調査によって確認されているが、この礫層形成時期はいまだ明らかになっていない。この礫層が古鬼怒川時代の土浦礫層なのか、桜川の基底礫層なのか詳細が不明なのである。しかし、この礫層が土浦礫層である可能性が考えられる資料が、周辺の台地上の遺跡から示されている。桜川左岸台地にある常名町の神明遺跡と同川右岸台地上高津貝塚では、縄文時代中期から後期の集落が調査されたが、そこでは石英斑岩や安山岩類を石器や焼き礫の素材として持ち込まれていた。これらの礫は円礫の形状で検出され、角礫ではない。

土浦礫層は古鬼怒川が堆積した石英斑岩が多く含まれる礫層で、基底礫層は花崗岩質礫が主要石材の礫層であり礫種が明確に異なっている。石斧等大型な石器製作や焼き礫に使用する目的の礫を獲得するのに採掘してまでとは考えにくく、当時露出していた礫層あるいは礫床から採取していたと考え



第2図 土浦城跡周辺の地形図

られ、この自然堤防で確認されている礫層が土浦礫層起源の可能性が高いと考えられるのである。

この自然堤防の形成時期についての検討は、いつ頃から人間活動の場所であったのかを認識する基礎的な検討作業である。そして土浦城の構築時期の検討作業にも繋がる問題点である。今回の調査ではその問題点に明確な回答を出せなかったが、この点は今後の調査に期待せざるを得ない。

第2節 歴史的環境

1. 原始・古代・中世初期

土浦城跡周辺の地形を大別すると、前述の地理的環境のとおり土浦城跡が存在する桜川低地部分と南北の台地部から形成されている。桜川低地部分においては、矢作や飯田といった微高地部分、宍塚や常名の台地下の河岸段丘を除けば、現在のところ原始・古代の遺跡はほとんど発見されておらず、この時代の主要な居住域は台地上であったと想定される。

まず旧石器時代の遺跡であるが、現在土浦市域において57ヶ所の遺跡が確認されている。2003(平成15)年の常名町山川古墳群の発掘調査では、武蔵野台地編年第Ⅸ層段階・約30,000年前のものと考えられる石器群や炉跡が発見され、土浦市内で発見されている旧石器の中でも、最も古い一群のひとつであると考えられる(註1)。

次の縄文時代の遺跡については、霞ヶ浦や桜川などを望む台地上の各所から発見されている。遺跡の年代としては中期のものは比較的多いが、後・晩期のものは少ない。この時代の代表的な遺跡としては上高津・宍塚町に広がる国指定史跡上高津貝塚がある。この貝塚は指定地面積4.4ヘクタールの縄文時代後期～晩期の大規模貝塚で、霞ヶ浦沿岸では有数の規模を誇るものである。1995(平成7)年には『上高津貝塚ふるさと歴史の広場』として貝塚および考古資料館約5ヘクタールが整備され、埋蔵文化財保存・活用の拠点となっている。

弥生時代の遺跡については現在のところ発見例が少なく、特に中期以前の遺跡についてはほとんど発見されていない。この近辺では木田余町宝積遺跡、宍塚町宍塚遺跡などでは後期の集落跡が発見されており、広大な桜川低地よりも小規模な谷津を利用した水田耕作が営まれていたと推定される。なお前回調査時の出土遺物の中にも弥生土器片かと思われるものもあるが、現在までのところ土浦城跡周辺で弥生時代の遺構が発見されたことはないので、搬入土に混入していたものであろう。

古墳時代については、前期古墳としては手野町王塚・后塚古墳、常名町常名天神山古墳があり、後期古墳としては下高津町高津天神山古墳群や宍塚町宍塚古墳群、終末期古墳としては木田余町東台古墳群などがあり、集落跡としては木田余台(粉買場・御霊・東台・宝積遺跡)や常名台(神明・北西原・弁才天・西谷津遺跡)の遺跡群などで大規模な集落跡が確認・調査されている。これらの遺跡はいずれも霞ヶ浦や桜川を望む台地上に立地しているが、一方、常名町八幡下遺跡のような台地下の河岸段丘や、矢作町矢作稻荷神社古墳や宍塚町竜王山古墳、飯田・矢作・宍塚寺前遺跡など、台地下の微高地にも遺跡が見られるようになってくるのもこの時代の特徴である。

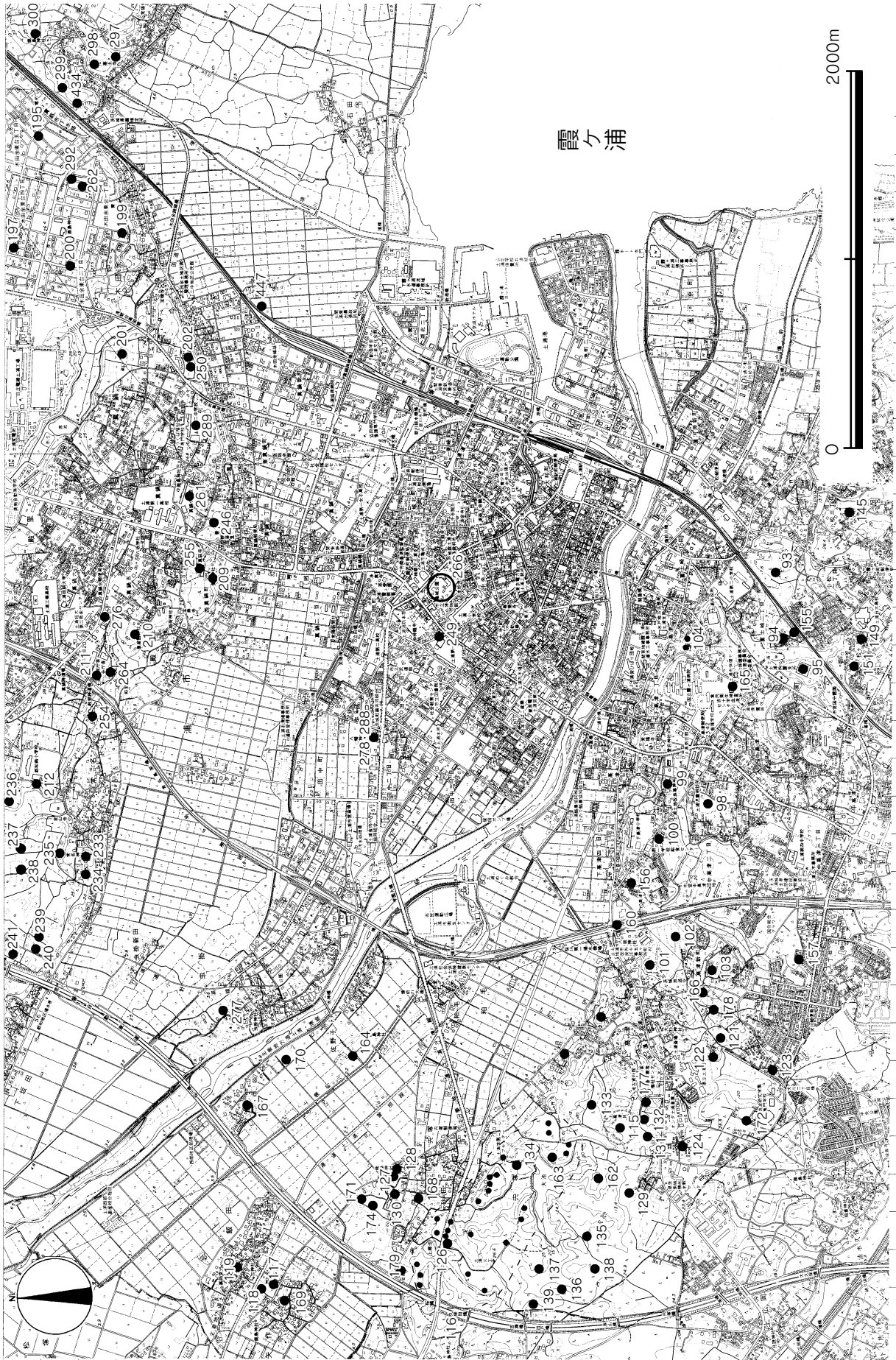
奈良・平安時代の桜川河口部は郡境にあたり、桜川を境にして北が茨城郡、南が信太郡に属していたほか、矢作などは河内郡に組み込まれていたと考えられている。郡衙などは置かれていなかったが、国府に向かう官道については高津側から桜川低地を横断したとする考え方もあり(註2)、また霞ヶ浦

を利用した物資集散地である「津」と思われる遺跡も田村・沖宿遺跡群で発見されている。近隣のこの時代の調査事例としては常名台(弁才天・西谷津遺跡)、木田余台(初買場・宝積遺跡)、大字上高津寄居・うぐいす平遺跡などがある。また前述の八幡下遺跡などの河岸段丘でも住居跡が発見されているほか、飯田・矢作遺跡などの微高地などでも遺物が採集されており、古墳時代に引き続き人々の居住域の拡大が進んだものと思われる。

なお最後に、土浦城存在以前のこの周辺の中世遺跡について概述したい。この周辺の中世遺跡は上高津周辺の台地部や、宍塚・矢作・飯田などの微高地のほか、虫掛・佐野子・田中八幡などの自然堤防上に確認されている。その中でも特筆されるものとしてまず大字宍塚の般若寺跡がある。般若寺は現在も存在するが、鎌倉時代においてはつくば市三村山極楽寺跡とともにこの地域の西大寺系律宗の拠点として栄えた寺院である。現在でも建治元(1275)年銘の梵鐘(国指定文化財)や、実道坊源海の回忌供養塔と考えられる石造五輪塔(県指定文化財)などが存在するほか、『般若寺五重塔瓦也』と逆字陽刻のある瓦なども出土しており、往時の繁栄を忍ばせている。なお五輪塔については佐野子宮前遺跡にも室町時代頃のものと考えられる大型の五輪塔(市指定)もあり、周辺の墓石群とともに惣墓を思わせる風景を見せている。また大字上高津高井城跡は興国2(歴応4・1341)年に南北朝の争乱に伴い高師冬が攻めた『高井城』とも言われるが、現在城跡の大半が失われており詳細は不明である。

市町村 遺跡番号	遺跡名	遺跡の年代							市町村 遺跡番号	遺跡名	遺跡の年代									
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世			
93	小松								170	川面										
94	池の台	●							171	上郷後										
95	国分		●						172	出シ山所在塚										
98	中高津西原				●	●			174	上郷後古墳										
99	弁天社東				●	●			176	根本										
100	下高津小学校				●	●			177	諏訪窪		●								
101	寄居	●	●					●	178	上高津八幡										
102	うぐいす平	●		●					179	不動後										
103	新町		●					●	195	宝積	●	●	●							
104	高津天神山古墳群				●	●			197	宮崎										
115	上高津貝塚	●			●	●			199	御霊	●	●								
116	宍塚古墳群				●	●			200	初買場	●	●								
117	矢作稻荷神社古墳				●	●			201	八坂前	●	●								
118	矢作ドンドン塚古墳				●	●			202	浅間塚古墳										
119	飯田				●	●		●	209	西真鍋	●	●								
121	宮脇A					●			210	殿里	●	●								
122	宮脇B		●					●	211	八幡台	●	●								
123	宮脇庚申塚								212	天神脇	●	●								
124	出シ山		●	●		●			233	常名天神山古墳										
125	幕下女騎古墳				●	●			234	瓢箪塚古墳										
126	宍塚	●	●	●				●	235	山川古墳群										
127	般若寺跡				●	●		●	236	弁才天	●	●								
128	竜王山古墳				●	●			237	神明	●	●								
129	栗崎		●		●	●			238	北西原	●	●								
130	宍塚小学校内古墳				●	●			239	羽黒後	●	●								
131	貝塚南		●		●	●			240	坂の上	●	●								
132	日光入		●		●	●			241	小坂の上	●	●								
133	蛭田		●	●	●	●			246	どんどん塚									●?	
134	向山			●					249	藩校郁文館の門										
135	グミノキ		●	●	●	●			250	浅間塚西										
136	糞屋久保A				●	●			254	八幡下										
137	糞屋久保B		●		●	●			255	真鍋愛宕神社古墳										
138	糞屋久保C		●	●	●	●			261	大宮前										
139	馬場先		●	●	●	●		●	262	東台古墳群										
145	房谷				●	●			264	殿里古墳										
149	六十原		●						266	土浦城跡										●
151	六十原A	●							276	殿里台古墳										
155	小松貝塚		●						277	虫掛二又									●	●
156	天王山古墳群				●	●			278	田中八幡									●	●
157	中高津古墳							●?	288	田中八幡所在塚										●
160	高井城跡							●	289	東真鍋八坂前		●								
162	五斗蒔		●		●	●			292	東台	●	●								
163	勢至久保		●	●					297	王塚古墳		●								
164	佐野子宮前				●	●		●	298	后塚古墳										
165	大久保				●	●			299	立		●	●							
166	新町貝塚					●		●	300	五斗落	●	●	●							
167	佐野子新田					●		●	434	手野城跡										●
168	宍塚寺前					●		●	447	木田余城跡										●
169	矢作				●	●		●												

第1表 周辺の遺跡



第3図 周辺の遺跡

2. 土浦城の沿革

(1) 近世以前の土浦城

土浦城は一説には平安時代に平将門によって築かれたとも言われるが、伝説にすぎない。遺跡の立地を見ると古代以前は台地及び微高地上しか遺跡が確認できず、中世以降は佐野子・虫掛・田中八幡など低地部の自然堤防上にもいくつかの遺跡が確認されるようである。現在土浦城跡周辺の旧市内で確認される古碑としては東崎町鷲宮の弘治3(1557)年銘の地藏塔(註3)が最も古いことから考えても、土浦城跡周辺の三角州に人が住み始めたのは鎌倉ないし室町時代頃のことと推定され、その開発領主の館として土浦城の前身が築かれたのではないかと推定される。

ところで、文献上に見られる「土浦」の初出は、『東寺百合文書』中にある元徳元(1329)年の結解状と呼ばれる年貢納入状況報告書で、年貢の銭納を示す文書である。また永享7(1435)年に、鹿島神宮の修理費用を調達するための賦課台帳として作成された『常陸国富有人注文』には、信太庄「土浦郷 若泉三郎」という富有者の名が残されている(註4)。この頃の常陸国南部の支配体制としては、鎌倉時代常陸国守護であった旧御家人の小田氏が最も大きな勢力であったが、元中3(至徳3、1386)年に小山若犬丸の乱に関係して失脚し、代わって山内上杉氏系の土岐氏が代官として信太庄を支配した頃にあたる。上杉氏は足利氏の姻族で強大な勢力を誇ったが、上杉禅秀の乱などの鎌倉府との紛争などから次第に影響力が衰退し、信太庄は次第に実質土岐氏の領土となっていった。土浦の位置は地理的には信太庄の北端で、小田氏領である南野庄との境に当たる軍事的要地であるとともに、富有者も存在する霞ヶ浦に面した経済的要地であったとも考えられる。なお信太庄と南野庄の境界は桜川であったと考えられるため、この頃の桜川の本流は土浦城よりも北側であったと想定される点が興味深い(註5)。

土浦城については、永正13(1516)年に小田氏の配下である菅谷勝貞が若泉(今泉?)五郎右衛門から攻めとったとされる記述がある。これが『土浦城』の名の初出である。若泉五郎右衛門は前述の若泉三郎の末裔と考えられることから、土浦城は以後土岐氏の領土から小田氏の領土の一部となったと思われる。菅谷氏は15世紀後半頃に小田氏に使えたと思われるが、川越合戦にも菅谷隠岐守が参陣するなど以来小田家の有力武将として活躍している。その後菅谷氏は政貞、範政と土浦城を基盤とし、重臣として小田家を盛りたてたものの、次第に没落していく小田氏を支えることはできなかった。土浦城は弘治2(1556)年以来、小田城落城後の詰の城としてしばしば利用され、結城氏や佐竹氏など小田氏に対抗する勢力と対峙するとともに、小田城奪還のための出撃地ともなったが、最終的には天正18(1590)年小田原北条氏討伐に伴い徳川家康に接收され、小田氏および菅谷氏による土浦城の支配は終わりを告げることとなった。ところでこの時代の土浦城の施設や規模はどのようなものであったのであろうか。状況的には本丸およびその周辺を城域とする、周辺を沼や川に囲まれた近世と比べれば小規模なものであったろうと推定される(註6)が、現在のところこの時期の遺構は発見されておらず詳細は不明である。

なおこの時代の近隣の遺跡としては、代表的なものに木田余城跡と手野城跡がある。木田余城跡は木田余町の水田中の自然堤防上に存在した城で、築城年代は不明だが、小田氏の重臣であった信太氏の居城であった。永禄13(1570)年内紛により信太氏が誘殺された後は、小田城を失った小田氏治の居城となった。天正6(1578)年佐竹氏に攻められて落城し、再利用できないように徹底的に破却されたと伝えられている。現在遺跡の大部分はJR常磐線の鉄道線路敷地及び蓮田になっているが、城跡の

はずれに信太範宗一族の墓と伝えられる五輪塔(市指定)が残されている。手野城跡は木田余城に比較的近い、手野町の台地西端の舌状部に存在する城跡で、現在でも空堀などが残されている。小田氏の家臣中根氏の居城と言われるが史料は少なく、事跡については不明である(註7)。なお近年の研究で、これらの城跡に近い木田余町で1ヶ所、手野町で最低3ヶ所ほど15世紀末から16世紀のものと考えられる埋蔵銭が発見されていることが明らかとなった。これらと城などとの関係は不明であるが、当時のこの地域の流通経済状況を探る貴重な資料である。この他城跡については常名新田に「常名城」の伝承もあるが、現在遺跡としては確認できない(註8)。その他の中世関係の遺跡としては、寺島誠齋氏が記録した「のうさい寺」(入西寺・能濟寺)がある(註9)。この寺跡は土浦二高北方あるいは田中地内の虫掛飛地が遺称地といわれているもので、明治40年頃布目のある巴文瓦や唐草瓦、人骨などが出土したと伝えられている。出土品から中世寺院の可能性も考えられるが、現在場所が確認できず、また出土品も不明である。

(2) 近世の土浦城

天正18年、小田原北条氏の滅亡以降関東の大部分は徳川氏の領土となった。常陸国の大半は佐竹氏の領土となったが、土浦城およびその周辺は徳川家康の庶子である結城秀康の所領となった。秀康の居城は結城城であるため、この時代の土浦城は代官支配となったようである。この時代の事跡としては「結城検地」が有名であるが、城郭の修築などの記録は残されていない。

慶長5(1600)年の関ヶ原の合戦後、結城秀康は越前北の庄に転封となり、土浦城は(藤井)松平信一の所領となった。この松平信一から子の信吉の時期が、城内および城下町などの近世土浦城の骨格となる整備が行われた時期と考えられている。元和3(1617)年松平信吉は高崎に転封となり、翌年西尾忠永が城主となった。西尾氏は忠永・忠照の2代約33年にわたり土浦を治め、土浦城についても東・西櫓や、鐘楼などの城内主要施設の整備を行ったことが記録に残されている。慶安2(1649)年には西尾忠照は駿河田中城に転封となり、代わって朽木植綱が城主となった。朽木氏は植綱・植昌の2代約21年間土浦を治め、本丸櫓門の改築などのほか、本丸の塀を瓦葺に改築するなどの整備を行っている。この他の大きな整備としては(大河内)松平信興の治めた天和2(1682)年からの5年間に、北門・南門などの整備が行われている。

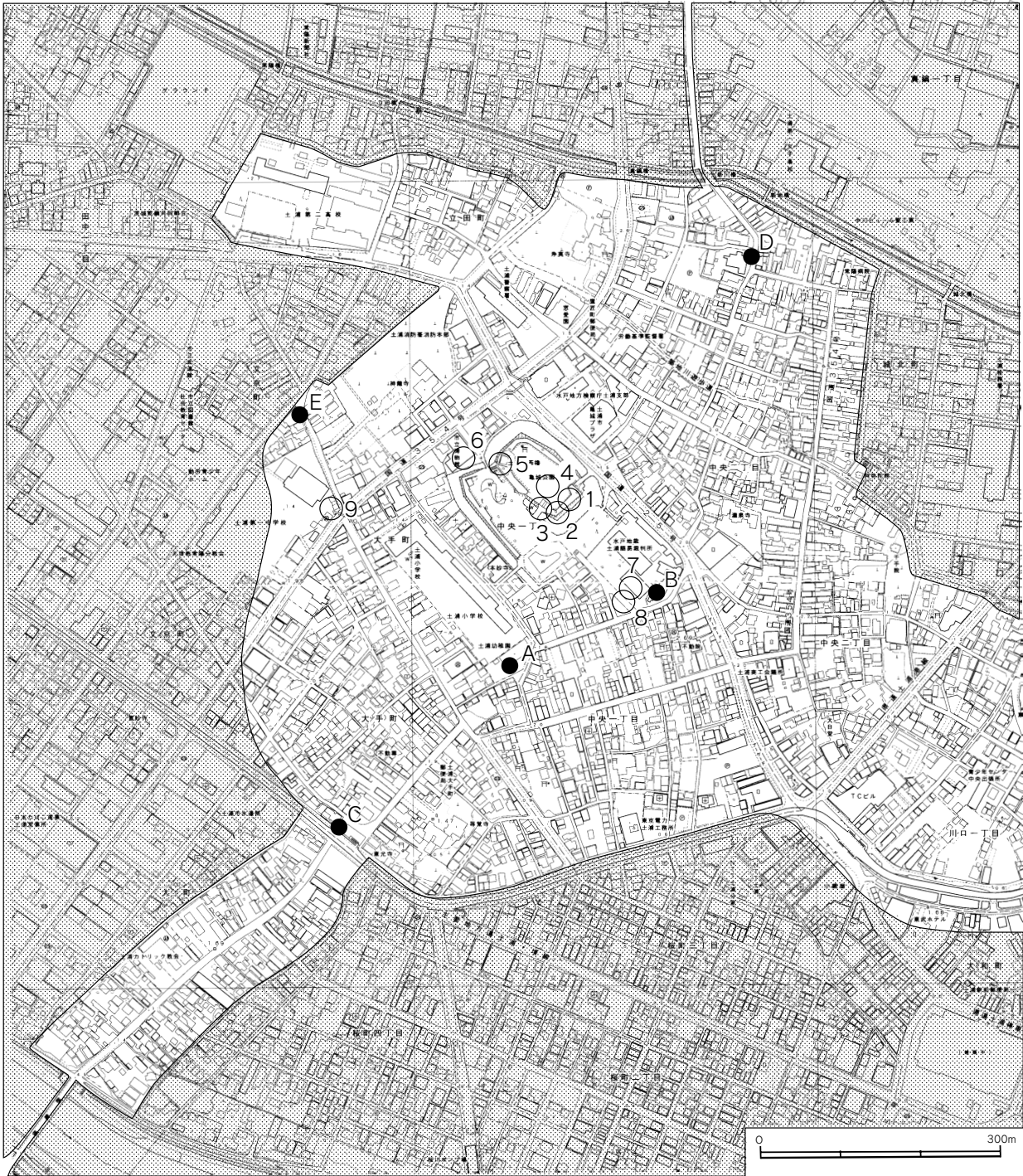
なお、これらの江戸時代前期の大名は概ね3～4万石程度の比較的小藩であったため、その後土浦藩主として有名な土屋氏が加増によって9万5千石になると、藩士の増加に伴い城内の施設も手狭になってきたようで、享保8(1723)年に武家地として立田郭が築かれたほか、江戸時代中期以降に藩主の居住場所として外丸御殿が建てられたりしている。

以上これらの整備によって、近世土浦城は概ね現在の形になったものと考えられる。その後、土浦城の城郭としての整備については施設の修築記録が残されているのみであるが、総郭内には次第に人が集まり、土浦の町を形成・拡大していったものと推定される。

なお、本丸の「塀」については、史料には寛文4(1664)年に瓦葺に改修されたと記録されているが、正保2(1645)年頃作成されたと推定される『常州土浦城之図』にも白壁状の塀の表現が見られることから、整備されたのは17世紀前半～中葉頃ではないかと想定される。また、現在知られているいずれの絵図や史料にも、土塁の「葺石」や「砂利敷」についての表現・記載は確認されていない。

西 曆	年 号	整 備 内 容 そ の 他	城 主 名	出 典
1603	慶長8	二ノ丸仕切門、黒門（二ノ門）、南・北・西門を建てる	松平信一	土浦城記
1612	慶長17	土浦城本丸を建てる	松平信吉	土浦史備考
1620	元和6	東・西櫓を建てる（史備考では元和2～3年）鐘楼を建てる	西尾忠永	土浦城記
1622	元和8	大手門を櫓門に改める	西尾忠照	土浦城記
1656	明暦2	本丸の門を櫓門に改める	朽木植綱	土浦城記
1658	万治元	武具庫、焰硝庫を建てる	朽木植綱	土浦城記
1658	万治元	搦手門、外記門を瓦葺きに改める	朽木植綱	土浦城記
1663	寛文3	本丸御殿の後ろに厨を増作	朽木植昌	土浦城記
1664	寛文4	土塁上の塀を瓦葺きに改める	朽木植昌	土浦城記
1665	寛文5	厩と台所を修増	朽木植昌	土浦城記
1666	寛文6	簀子橋の門（南門）を瓦葺きに改める	朽木植昌	土浦城記
1671	寛文11	築地に足軽町を造成	土屋数直	土浦城記
1661～73	寛文年間	真鍋臼井より城内に上水道を引く		市史年表
1678	延宝6	二ノ丸に米倉を建てる	土屋数直	土浦城記
1682	天和2	城内の土塁を補築する（～貞享元：1684）	松平信興	土浦城記
1683	天和3	城内土塁上の大木を切り倒す	松平信興	土浦城記
1684	天和4	巽郭、大手門脇、二ノ郭等の土塁を整備する	松平信興	土浦城記
1684	貞享元	外記門周辺の土塁を築く	松平信興	土浦城記
1684	貞享元	乾郭を築き二ノ丸より武具庫を移す	松平信興	土浦城記
1684	貞享元	兵庫口の門、不破口の門を建てる（一説に貞享2）	松平信興	土浦城記
1684	貞享元	外丸構築	松平信興	土浦市史
1685	貞享2	二ノ丸南側の土塁を補築する	松平信興	土浦城記
1685	貞享2	本丸霞橋を架け替える	松平信興	土浦城記
1685	貞享2	簀子橋前に角馬出を築く	松平信興	土浦城記
1685	貞享2	二ノ丸に盾蔵を建てる	松平信興	土浦城記
1686	貞享3	真鍋口に馬出を築く	松平信興	土浦城記
1686	貞享3	亀井郭の土塁、搦手門脇、米倉後の土塁を整備する	松平信興	土浦城記
1686	貞享3	霞門の土塁を築く	松平信興	土浦城記
1686	貞享4	霞門の橋渡り初め	松平信興	土浦城記
1686	貞享4	亀井曲輪、乾曲輪、巽曲輪、西曲輪、多計曲輪の名を定める	松平信興	土浦城記
1691	元禄4	火災により真鍋口門、搦手門、前川門、田町口門焼失	土屋政直	土浦城記
1691	元禄4	巽曲輪に春屋を設ける	土屋政直	土浦城記
1692	元禄5	土浦城修復	土屋政直	土屋家文書
1694	元禄7	本丸・搦手両橋を架け替える	土屋政直	土浦城記
1695	元禄8	米蔵を修理する	土屋政直	土浦城記
1696	元禄9	土浦城修復	土屋政直	土屋家文書
1702	元禄15	搦手門・同橋を建て替え・架け替える	土屋政直	公事小言
1704	元禄17	土浦城修復	土屋政直	土屋家文書
1707	宝永4	東櫓修復	土屋政直	西川家文書
1716	享保元	土浦城濠浚い	土屋政直	土屋家文書
1718	享保3	東・西櫓を改築する	土屋政直	土浦史備考
1718	享保3	西郭より出火、御用部屋・会所等を焼く	土屋政直	土浦史備考
1722	享保7	本丸・二ノ丸・三ノ丸の濠を浚渫する	土屋陳直	土浦城記
1723	享保8	立田郭を築く	土屋陳直	土浦城記
1724	享保9	外丸を築く	土屋陳直	土浦城記
1732	享保17	二ノ丸・三ノ丸の柵と土塁を修理する	土屋陳直	土浦城記
1734	享保19	（櫓門に祈祷棟札あり）	土屋篤直	櫓門棟札
1736	享保21	大手門・櫓門、館を修理する	土屋篤直	土浦城記
1761	寛文元	真鍋臼井より城内へ上水道を敷設（寛文年中：～72）	土屋篤直	土浦市史
1766	明和3	東櫓と城の周りの塀を修理する	土屋篤直	土浦史備考
1767	明和4	土浦城濠浚い	土屋篤直	土屋家文書
1799	寛政11	城内に郁文館設置	土屋篤直	土浦市史
1803	享和3	大手塀・屋根修復	土屋篤直	土屋家文書
1808	文化5	土浦城附櫓門の修理伺を提出する	土屋寛直	土屋家御系譜
1810	文化7	大手櫓門・西櫓の修理伺を提出する	土屋寛直	土屋家御系譜
1811	文化8	閏2月に始められた櫓の修理が8月に完成する	土屋寛直	土浦史備考
1816	文化13	火災により外丸御殿焼失	土屋彦直	土浦史備考
1828	文政11	櫓門に修理記録あり	土屋彦直	櫓門墨書
1839	天保10	藩校郁文館新築	土屋寅直	土浦史備考
1845	弘化2	大手門建て替え	土屋寅直	土浦史備考
1852	嘉永5	城内住居の修理伺を提出。文化7年伺の櫓1ヶ所を修理	土屋寅直	土屋家御系譜
1852	嘉永6	御城御屋形棟上	土屋寅直	御城内御定法書
1855	安政2	地震・大風雨のため城内外郭が破損する	土屋寅直	土屋家御系譜
1858	安政5	火災のため城内御家中方焼失	土屋寅直	土浦史備考
1859	安政6	築地郭築立始まる	土屋寅直	土浦史備考
1861	文久元	大手櫓門修復	土屋寅直	御城内御定法書
1862	文久2	前川口門を新築する	土屋寅直	前川口門墨書
1863	文久3	外丸御殿新築	土屋寅直	外丸棟札

第2表 近世土浦城の整備記録



第4図 土浦城跡・発掘調査箇所と主要施設（門）の位置

1. 東櫓 (1988) 2. 本丸土塁 (2000) 3. 櫓門 (1987) 4. 本丸 (1985) 5. 西櫓 (1988・89)
 6. 二ノ丸 (1985) 7. 外丸御殿 (1993) 8. 外丸 (2001) 9. 郁文館の正門 (1987)

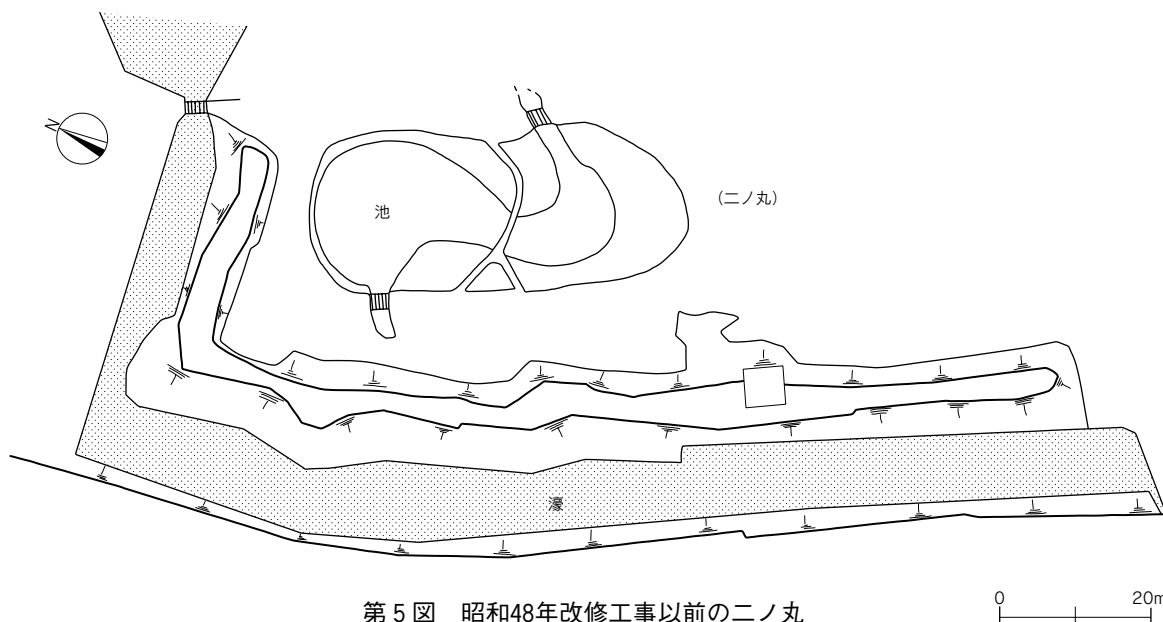
- A. 大手門 B. 搦手門 C. 南門 D. 北門 E. 田中口

(3) 近代・現代の土浦城

1871(明治4)年の廃藩置県および同6年の太政官布令以降、土浦城についても城郭としての主要施設は多くが破却または売却されて姿を消した。大手門・搦手門など建造物が1873(明治6)年に入札・売却によって姿を消し、土浦城の特徴的な施設であった南門の「枡形」(角馬出)や北門の2重馬出なども、1873(明治6)年の絵図では直線的に改修されているなど、明治初期のうちに土浦城の城郭としての形状は急速に変化したと思われる。ただし本丸御殿は新治郡役所、外丸御殿は新治郡裁判所として引き続き使用されたほか、本丸および二ノ丸の櫓門・霞門・東・西櫓など本丸周辺の施設は残されていたが、本丸御殿と東櫓は1884(明治17)年、外丸御殿は1905(明治38)年に火事で焼失し、西櫓も1949(昭和24)年のキテイ台風による破損を契機に取り壊されてしまった。本丸と二ノ丸の大半は郡役所敷地として利用されていたが、1897(明治31)年に土屋氏より土浦市に寄贈されたことを契機にして、都市公園「亀城公園」として整備されていくことになった。ちなみにこの公園部分が1952(昭和27)年に「土浦城跡および櫓門」として茨城県指定史跡として指定を受けた部分で、二ノ丸西側の現土浦市立博物館敷地などはそれ以前に切り離されて土地利用が進んでいたため指定地には含まれていない。公園は1932(昭和7)年に本丸内にあった自治会館(旧郡役所)が曳き屋工事によって濠北側の旧多計郭に移転したのち本格的に整備が行われ、1934(昭和9)年に開園している。公園内には1962(昭和37)年にプールが設置されたほか、各所で整備が進み(註10)、現在でも市中心部の公園として市民の憩いの場になっている。ただしこの公園整備のなかで無意識のうちに史跡の形状を分かりにくくしてしまったものもある(註11)。

ところで、本丸土塁上の塀はいつ頃撤去されたのであろうか。撤去等を示す史料は現在確認されておらず、東櫓を東側から撮影した古写真が唯一の資料である。この写真には東櫓と鐘楼は写っているが、塀については全く写っていないことから、明治17年の東櫓焼失より以前に塀は存在しなかったことが明らかである。

なお土浦市では昭和61(1986)年以降「土浦城址整備事業」を進めている。現在までに櫓門・郁文館の正門の解体修理(1986～87)をはじめ、西櫓(1989～91)・東櫓(1996～98)の復元工事を実施した。整備事業については今後も計画されている。



第5図 昭和48年改修工事以前の二ノ丸

西 暦	年 号	主 な 事 象
1873	明治 6	太政官布告により城跡建物の払下・破却が進む
1878	明治11	本丸内に新治郡役所設置
1884	明治17	本丸御殿・東櫓焼失
1897	明治31	土屋氏より土浦城跡寄贈
1905	明治38	外丸御殿焼失
1920	大正 9	『山村才助贈位紀恩之碑』 建立
1922	大正11	『忠魂碑』 建立
1923	大正12	新治郡役所廃止。自治会館となる
1927	昭和 2	濠さらい時に石灯笼発見
1932	昭和 7	自治会館（旧郡役所）本丸から移転
1934	昭和 9	6号国道（現国道354号線）開通
1934	昭和 9	亀城公園造園完成
1935	昭和10	原脩次郎銅像建立
1936	昭和11	亀城通り（現国道125号線）開通
1940	昭和15	西櫓修理工事
1940	昭和15	市制施行祝賀会を亀城公園で実施
1949	昭和24	キテイ台風襲来
1949	昭和24	亀城公園濠浚渫廃土が土塁に廃棄され問題となる
1950	昭和25	西櫓解体（7月以降）
1951	昭和26	亀城公園内に動物舎設置
1952	昭和27	「土浦城跡及び櫓門」茨城県指定史跡となる
1954	昭和29	櫓門修理工事
1956	昭和31	「亀城の椎」県指定天然記念物となる
1957	昭和32	高田保の句碑建立
1958	昭和33	『亀城公園之記』碑建立
1958	昭和33	「亀城の宿り木」県指定天然記念物となる
1962	昭和37	市営プール完成
1964	昭和39	二ノ丸濠に弓道場設置
1965	昭和40	聖徳太子堂桜川堤より移転
60年代後半頃		濠に蓮が移入される
1972	昭和47	二ノ丸濠にプール管理棟設置
1973	昭和48	根崎梧楼の句碑建立
1971～74	昭和46～49	二ノ丸濠石垣設置工事
1979	昭和54	霞門解体修理工事
1979	昭和54	土浦幼稚園園舎建替え時に大手門の遺構？検出
1980	昭和55	前川口門等覚寺より移転
1982	昭和57	公園の老松「鶴の松」枯死
1982	昭和57	「亀城の宿り木」枯損により指定解除
1985	昭和60	市立博物館建設に伴う二ノ丸・本丸の発掘調査
1986・87	昭和61・62	櫓門解体修理工事・発掘調査
1987	昭和62	郁文館の正門解体修理工事・発掘調査
1987	昭和63	二ノ丸に土浦市立博物館開館
1987	昭和63	弓道場移転
1987	昭和63	公園管理事務所事故により焼失（翌年再建）
1987	昭和63	西櫓・東櫓・土塁を発掘調査
1987	昭和63	公園植栽工事
1989	平成元	公園トイレ建替工事
1990・91	平成 2・ 3	西櫓復元工事
1991	平成 3	本丸内を地中レーダー探査
1993・94	平成 5・ 6	裁判所増築に伴う外丸発掘調査
1997・98	平成 9・10	東櫓復元工事
1998～2004	平成10～16	公園内電線地中化工事
2000	平成12	本丸東側土塁を発掘調査
2000	平成12	二ノ丸に車椅子用水飲み場設置
2000・01	平成12・13	歴史の小径整備事業による外丸の道路整備・発掘調査

第3表 近・現代の土浦城跡（亀城公園）の整備記録

(4) 土浦城関係の発掘調査記録

近世に整備された土浦城は、総郭としては北が真鍋町、南が大手町にも及ぶ現在の土浦中心部旧市街の大半を占めている大規模なものであった。その後この部分は近現代に引き続き市街化したため遺構の保存状態は決して良いとはいえないが、東光寺境内に土塁の一部が残されているほか、街道沿いの町割りや路地などにも昔の地割が踏襲されている部分が数多く見られる。

さて、土浦城の地下遺構に発掘調査のメスが初めて入ったのは1985(昭和60)年のことで、土浦市立博物館の建設にともなう事前調査として、二ノ丸および本丸の調査が行われたのが嚆矢である。このときの調査では建物跡が検出されたほか、瓦や陶磁器、土師質土器などが出土し、土浦城の歴史解明のために発掘調査が必要であることが認識された(註12)。その後土浦城址整備事業の一環として、1986・87(昭和61・62)年に櫓門と郁文館の門の解体修理工事が行われ、修理に伴って基礎部分が改修されることになったことから、この部分の発掘調査が行われた(註13)。このときの調査ではそれぞれの建物の特徴ある基礎工法や、さまざまな出土品が発見されたが、特に櫓門においては礎石下の盛土層より江戸時代前期頃のものと考えられる大量の破碎された、あるいは完形のかわらけがまとまって出土し、状況から櫓門の建築祭祀に伴うものではないかと推定されている。続く1988(昭和63)年には東・西櫓の建物復元のための資料収集等を目的に、東・西櫓および土塁の発掘調査行われ、東・西櫓の建物の基礎工法に違いが確認されたほか、建物規模・構造等を知るための資料を収集することができた。また遺物としては、土塁の盛土下より縄文後期の土器片が確認されたことと、土浦城と江戸遺跡出土の軒平瓦の対比が試みられた点が特に注目される(註14)。なお西櫓については、1989(平成元)年に復元工事に伴い建物基礎に相当する部分の発掘調査が再度行われ、建物内側に土間用と推定される盛土が存在していたことも確認された(註15)。2000・01(平成12・13)年には、本丸土塁上の堀及び鐘楼の資料収集を目的として、本丸東側土塁の発掘調査が行われた。この調査では、土塁が都合4時期の構築になることや、土塁の古い1・2期土塁は陸成土、新しい3・4期の土塁には水成土が使われていることが分かり、土浦城の築城は所謂「搔揚」城ではない可能性が推定された。また出土したかわらけのうち第1期土塁及びその下(第I期層)出土の一群が、比較の結果小田城跡第1・2面出土のものと同じと考えられたことから、これらの層の時代が16世紀中葉～17世紀初頭になるものと推定された。そのほか土塁上の堀については、検出された堀基礎や出土した瓦から、土塁上の堀は築地堀のような厚い堀ではなく比較的薄い控え柱構造をもつ木芯入りの堀で、屋根には板堀(目板)瓦が使用されており、全体としては直線的ではあるが細かな屏風折れをもっていたことが明らかとなった。また土塁の濠側表面からは「葺石」が検出され、堀と一体となった土塁の意匠は、だいぶ現在とは異なる可能性も想起された(註16)。このほか、発掘調査以外の調査として1991(平成3)年には地中レーダー探査も行われ、特に本丸跡では建物礎石と思われる地下遺構の存在が多数確認されている(註17)。

その他に開発事業に伴う調査として、公園東側に隣接する水戸地方裁判所土浦支部の施設増築に伴い、1993・94(平成5・6)年に外丸御殿跡の発掘調査が行われ、絵図に残されていた建物遺構が発見されたほか、建物下の盛土層から瓦のほか陶磁器や土師質土器など江戸時代後期～幕末・近代の遺物が多数出土している(註18)。この他にも近年の公園整備に伴った立会い調査(註19)や、歴史の小径整備に伴う外丸御殿跡の立会い・試掘・本調査(註20)、1979(昭和54)年に土浦幼稚園の園舎建て替えに伴い地下遺構が発見されたほか(註21)、真鍋地区などで水道管といわれる木樋等が発見されたこともあ

る(註22)。

このように、いままでの発掘調査等によって、文献では確認されなかった土浦城の新知見もいろいろと明らかになってきた。出土品の研究についても、瓦については近世霞ヶ浦水運を利用した江戸近郊地域等との物流が窺われる資料が見つかってきた(註23)ほか、今後の地域研究の中で手がかりになりそうな資料もいくつか見られる。これらの新たな資料が調査・研究・検討が進められれば、土浦の成り立ちのほか、霞ヶ浦地域の歴史の解明に新たな1ページが加えられることになるだろう。

(註1) 窪田恵一氏より御教示。詳細は『山川古墳群(第2次調査)』2004参照。

(註2) 木下良氏らの研究による。木下氏は高津～田中～真鍋を通る道を古代官道とし、曾祢駅家を高津地区に比定している。しかし、現在のところそれらしい遺跡は発見されていない。ただしこの地区は比較的早くから市街化した場所でもあり、調査事例が少ないため発見されない可能性もある。

(註3) 現物不明、拓本のみ現存。鷲宮にはこの他にも弘治4年の地藏塔(拓本のみ)や永禄7(1564)年銘の読誦塔なども存在する。

(註4) これについては、美浦村の安中土浦を指しているとの考え方もある。詳細は小森正明氏『常陸国富有人注文の基礎的考察』参照。

(註5) 桜川の河道の付け替えについては、若泉氏・菅谷氏・結城氏などが上げられているが現在のところ不明である。寺島誠齋氏は松林寺の松の樹齢から永正14年頃と推定し、菅谷氏の事績と考えている。

(註6) 以前より本丸及び二ノ丸を戦国時代の土浦城域とする考え方があがるが、1998～2000年度にかけて行われた公園整備に伴う立会いでは、本丸は自然堤防であるものの二ノ丸の大半は埋め立て地であり、中世の遺構は発見されていない。(『史跡 土浦城跡』2002参照)また「中城」を城内に含むとする考え方もあがるが、そうすると城域がかなり大きくなってしまふことから、中世段階の土浦城の中に含まれるかどうかは不明である。なお寺島氏は土浦城の基を信太氏館と想定し、所在は現在地ではなく現土浦二高敷地としている。

(註7) 鎌倉時代後期、小田朝重の子知継(重継)が手野に住んだとしている。(『新編常陸国誌』)また、戦国時代には中根氏の居城で、菅谷左衛門尉が信太範宗を手野城において誘殺したという伝承(『菅谷伝記』)もある。

(註8) 常名城のほか、常名台の発掘調査では神明遺跡から約100m四方に溝を巡らせ、内部に数棟の掘立柱建物を配置する遺構が検出されている。調査担当者は13世紀の館跡と推定している。詳細は『北西原遺跡(第6次調査)他』2003を参照。

(註9) 寺嶋誠齋『土浦史備考』による。「のうさい」寺については、『土浦市史』では市内立田町の浄真寺の前身とし、慶長年間に現在地に移転したとしている。

(註10) 現在亀城公園内の霞門周辺で使用されている切石は、以前に川口川桜橋周辺で使用されていたもので、川の埋め立てに伴い公園で再利用したものであるとのことである。保立俊一氏より教示。

(註11) 1973・74(昭和48・49)年に二ノ丸濠南側の石垣工事を行っているが、本来ここは石垣のない部分である。また二ノ丸土塁の屏風折れも工事前の形状の方が屏風折れの構造をよく示している(第5図参照)。このように、公園整備等の中で無意識のうちに、いくつかの土浦城の特徴ある遺構が姿を消してしまった可能性もある。

(註12) 詳細は『土浦城二の丸・本丸試掘調査 発掘調査報告書』1998参照。

(註13) 詳細は『櫓門保存修理工事報告書』1988参照。

(註14) 詳細は『土浦城址発掘調査報告書』1989参照。

(註15) 詳細は『西櫓復元工事報告書』1993参照。

(註16) 詳細は『史跡 土浦城跡』2002参照。

(註17) 詳細は『土浦城址地中レーダー探査報告書』1991参照。

(註18) 詳細は『土浦城(外丸御殿跡)発掘調査報告書』1996参照。

(註19) 詳細は『史跡 土浦城跡』2002参照。

(註20) 詳細は『土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報第8号』2003参照。

(註21) 詳細は『史跡 土浦城跡』2002参照。

(註22) コ字状の角柱と板材が組み合わされて管状になるもので、江戸遺跡等で確認される上水道管と形態は類似している。伝承によれば市内真鍋の善応寺から給水されていた上水道管ともいわれている。他には榭なども発見されているが、工事中の不時発見のため詳細は不明。資料は土浦市立博物館に保管されている。

(註23) 詳細は「土浦城の近世瓦」1999参照。

第3章 調査の概要

第1節 調査区の設定と調査方法

第2次・第3次の調査には第1次調査の成果と対応させるために、平面直角座標（旧座標）を使用している。座標は第Ⅸ系に属し、北緯36度、東経139度50分を原点とした座標で、土浦市は北緯36度以北、東経140度以東に位置して第1象現に当るため、X値・Y値共に+表記となる。今回新たに第2次調査で1ヶ所、第3次調査で5ヶ所と合計6ヶ所の調査区を配置したが、第1次調査で使用した公共座標記載を生かすことができた。なお、今回の調査区である本丸東側土塁は、概ね $X=9.090\sim 9.120$ 、 $Y=33.170\sim 33.210$ の座標の範囲に収まっている。

第2次調査区は第1次調査の成果を受けて、堀跡の北辺と東櫓の接続状況を確認するために第1次調査区と東櫓との間に調査区を設定した。第1次調査では、堀が東櫓との接続のために土塁縁辺から本丸方向に向かって約60度屈折して東櫓南壁の中央付近と接続していると想定されたが、他の考え方も考慮し第2次調査区を東櫓南壁に並行して拡張可能なように東西に長い調査区として設定した。調査の過程で必要に応じて部分的に掘削範囲を拡張し調査を行った結果、最後には東西4m×南北3mで面積12 m^2 の調査区となった。記録作成に使用した測量杭は、当初調査区の形状に合わせて調査担当者がトランシットを使用して方眼杭を設定した。その後に測量会社に委託し平面直角座標に基づく座標値と水準測量値を計測して方眼杭に与える方法を取った。

第3次調査区は、第1・2次調査を受けて、土塁上の堀跡・土塁の葺石状遺構などを確認することを目的に調査区を設定したものである。今回の調査区は土塁の各地に点在しているため、まず現地において第1～4の各調査トレンチの場所を設定し、その後調査範囲の表土除去後に測量会社に委託して先の座標系に基づく方眼杭を設置した。第5トレンチは調査工程の後半に新たに設定したため、方眼杭は設定せずに、第1・第2トレンチに使用した方眼杭を記載して、平板測量の方法で平面図作成を行っている。第3次調査の場合、トレンチの方向と座標の方向が斜めにずれていたため現地の測量はやや作業が大変であったが、調査後の図面整理については、座標値が利用できるため土塁上の位置確認や既調査区との整合は比較的作業がしやすかった。なお第3次調査の面積は5調査区合計で約38.5 m^2 である。

発掘調査については、調査範囲内に屋外照明の埋設配線などの埋設物が存在するため、第2次・第3次調査とも掘削はすべて人力により実施した。なお掘削については、深度の指標とするため第1次調査区と重複する部分についても一部を再度掘削している。また平面図作成は大半が遣り方を使用して行った。縮小率は20分の1を基本縮尺としながらも、第2次調査区で検出した堀跡の石敷部分や第3次調査区の遺物分布図は10分の1、第3次調査区第1・第2トレンチの遺物分布図は40分の1などの縮尺でも作図している。検出した遺構については一眼レフカメラと中型カメラを使用してモノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムによる撮影を行い、写真記録を作成した。発掘調査後には調査着手前の状態に復元するため、検出遺構の上面を山砂により被覆してから埋め戻し、表面に植栽を施して復旧した。

整理作業は、上高津貝塚ふるさと歴史の広場（考古資料館）にて第2次調査は2003（平成15）年

2月に、第3次調査は2003(平成15)年10月から2004(平成16)年2月まで実施した。第2次調査は「02TT-3」、第3次調査は「03TT-3次」の登録記号を使用して、検出遺物や作成図面・写真等の諸記録に記載している。

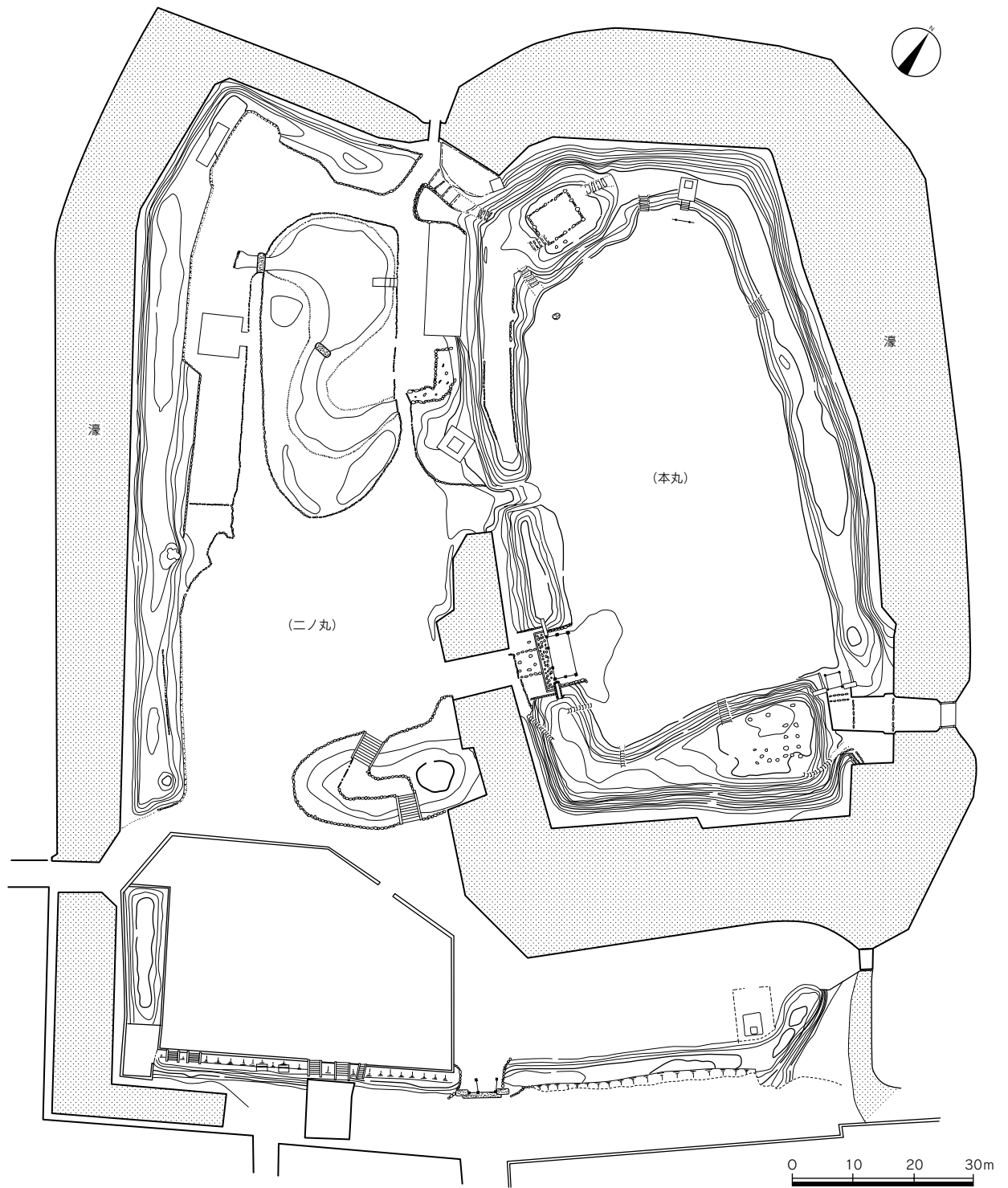
第2節 調査の概要

第1次(2000年：平成12年度)調査によって、本丸東側土塁上において良好な状態で塀基礎遺構を検出することができたため、検出された部分では塀の構造や位置を明らかにすることができた。しかし、東櫓と塀の接続位置や東櫓から霞門間の塀の位置については、調査区外であったため不明な点として残された。また本丸東側土塁コーナー部から櫓門の間については明確な塀基礎遺構を確認することができなかつたため、これらの部分については遺構の確認のために再度の調査の必要性が提起された。また前回調査によって確認された土塁濠側の葺石状遺構についても、文献等の史料はないものの、塀と一体となって施工されていたもので土浦城の土塁の意匠の特徴と考えられることから、再度調査によって確認する必要があると考えられた。

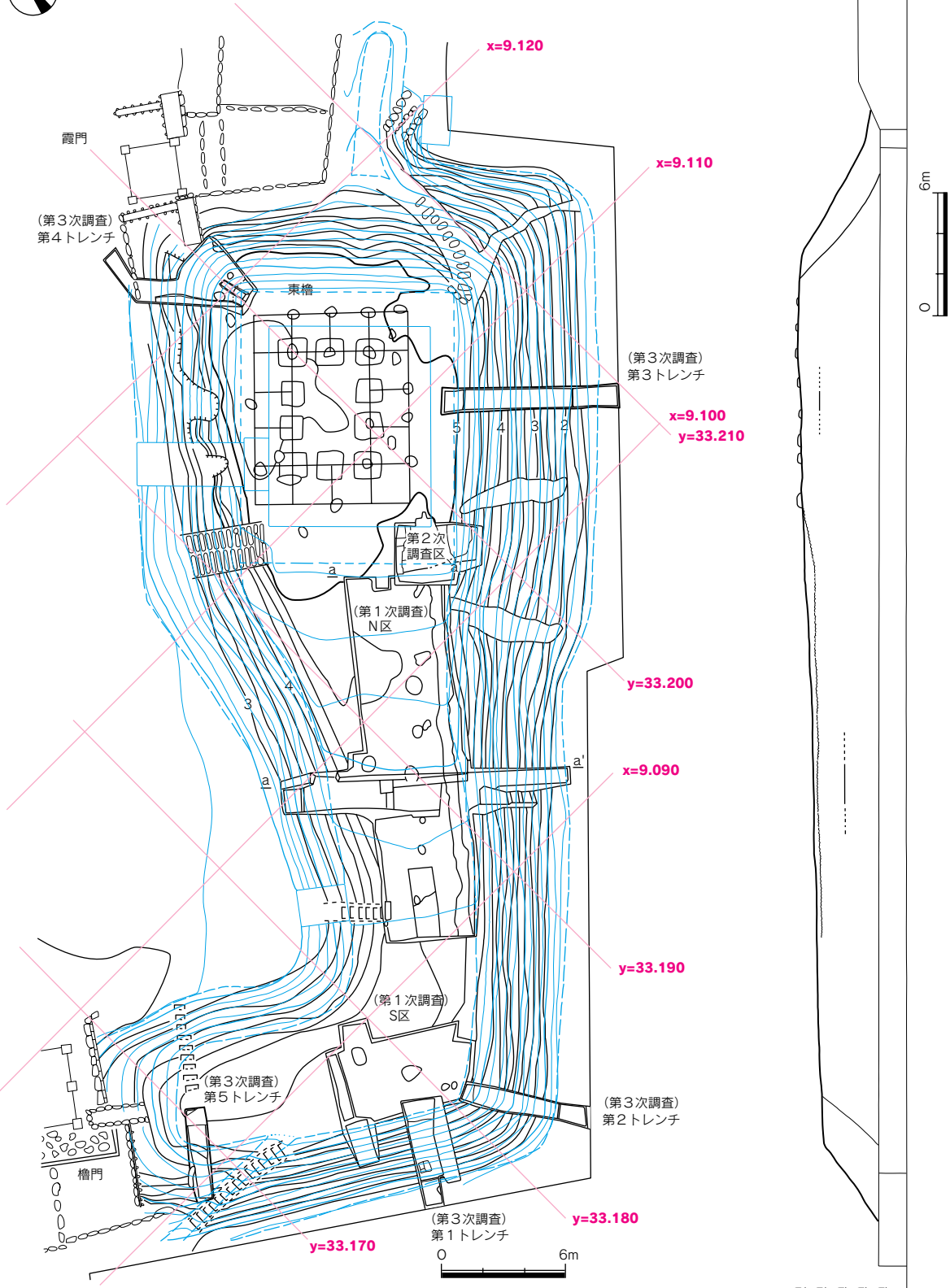
これらのことから、まず第2次調査として2003(平成15)年1～2月に第1次調査区の北東側に新たな調査区を設け、東櫓と塀の接続位置を確認する調査を行った。この調査では第1次調査で確認していた塀基礎の延長部が検出され、その屈曲状況から塀は東櫓の南東角部に接続していたことが明らかとなった。また、東櫓南東部の平坦面に小円礫を敷き詰めた砂利敷状の遺構が存在することが明らかとなった。

2003(平成15)年7～8月に実施した第3次調査では、本丸東側土塁コーナー部から櫓門間の塀基礎遺構の再確認と同部分の葺石状遺構確認のため第1・2・5の3本のトレンチを、東櫓東南濠側の葺石状遺構確認のため第3トレンチを、東櫓から霞門間の塀基礎遺構と葺石状遺構の確認のために第4トレンチを設け、調査を実施した。この結果第1・2トレンチでは遺構を確認することができなかつたが、第5トレンチでは塀基礎遺構の一部と思われる石敷の残欠を、また第3トレンチにおいては良好な葺石状遺構と石敷状遺構及び東櫓廃棄時に伴うと考えられる大量の瓦を、第4トレンチにおいては平坦部の石敷状遺構などを検出することができた。

今回の報告ではこれらの調査の概要について、各次調査毎に報告する。



第6図 亀城公園全体図（原図：1985年作成）



※なお東櫓については地下遺構保存のため、原位置より東側（濠側）へ50cm、南側（櫓門側）へ60cm移動して復元されている。よって遺構と東櫓の現状は一致しない。

第7図 本丸東側土塁全体図

第4章 土浦城跡第2次調査

第1節 調査の経過

2003(平成15)年

- 1月28日 現地調査に着手する。東西3m、南北3mの調査区を設定後、盛り土部分の掘削作業を行う。第1次調査の埋め戻し部分を確認する。
- 29日 盛り土部の除去を終了して堀跡の精査に入る。堀跡の西側に石敷に使用している礫よりも小さい砂利が露出し始める。
- 30日 堀跡の精査から周辺の遺構確認作業。砂利が面的に広がることを確認し、堀跡の石敷とは僅かに標高差をなし、砂利面が低いことを確認する。
- 31日 堀跡の検出作業はほぼ終了して実測作業に着手。濠側に向かい砂利が広がりを持つのか確認作業に入る。調査区北西隅に、瓦片や漆喰片を多数含む塵芥処理を目的としたと考える土坑を検出した。測量用の任意杭の設置を行う。
- 2月4日 堀跡の実測作業、濠側の砂利敷面の精査。砂利敷面は調査区全体に露出する。
- 5日 砂利敷面の南東隅を確認するため、濠側の調査範囲を拡張する。この部分は整備事業の盛り土が及んでいない法面部分で、植樹による樹根の攪乱が埋没遺構に影響が及んでいた。堀跡は東櫓方向に掘削限界まで掘り進み、復元された東櫓の基礎コンクリートに達する。任意に設置した測量杭に対し、直角座標系の座標値を測量する。
- 6日 堀跡の濠側に並行するように、東櫓復元以前に設置された柵列が露出する。堀跡の一部を切開して断面観察を行う。調査区内の掘削作業はほぼ終了する。
- 7日 堀跡の実測作業を終了し、現地作業を終了する。

第2節 検出された遺構と遺物（第8図、図版1・2）

第2次調査区は第1次調査区と東櫓の間にあたり、調査区の規模は長辺(北西－南東)約4m、短辺(東北－西南)約3mの長方形、面積約12m²である。

1. 土層

調査区北面の櫓側にて観察した。1層は1998(平成10)年度の東櫓建築時の土塁整備土で、その下部層理面が旧地表面となる。2層は砂利敷を覆う旧盛り土。2層は東櫓に近くなるほど薄くなり、調査区北端では整備土を除去すると、砂利が露出する状態であった。遺構上面は整備事業着手時まで場所によっては表面に露出していた箇所があったと見られる。

2. 検出遺構

砂利敷遺構

調査区の中央において砂利敷遺構を検出した。検出範囲は東西3.6m、南北2.0mの平面範囲である。

調査区の濠側南隅に角部があり現在の復元東櫓方向に向かって標高値が徐々に高くなっていく。1988年の発掘調査の記録では、端部に向かって35度の勾配があったとされ、今回の調査で端部には傾斜があることが追認できた。堀跡よりも10cmほど検出標高値が低い。遺構保護のため内部はほとんど開削を施していないが、一部堀跡との重複関係の確認のためトレンチを設定して掘削した断面の観察から、最大で長径長8cmほどで3cmから5cmの規模を主体とする円礫を大量に混合した粘質土(「礫混合粘質土」と呼称する)で構築している。5cm以上の円礫は面積比が20%ほどで、堀跡に使用している円礫よりも小さい。堆積厚は、観察箇所で10cmである。この堆積厚は、1988年の発掘調査でも「盛土層の厚さは2cmから25cmまで」「最も多いのは6～10cm」と記載されていて、今回の調査結果と整合的である。東縁辺は平面で確認した勾配以上に大きく、堀に向かって26～30度の勾配で法面を成すが、調査範囲内において端部まで確認することはできなかった。この遺構は東櫓との位置関係から東櫓の櫓台と考えられる。

遺存状況としては平面部で南辺と並行する溝(幅0.4m、延長1.2m)1条、瓦片を廃棄した土坑を3基確認した。溝は瓦廃棄土坑に後から切られる様に重複していることから、土坑掘削以前に掘削されたと考えられる。さらに堀跡の石敷と並行する溝(幅0.4m～0.7m、延長2.1m)1条を確認した。溝の覆土には、東櫓復元以前の平坦面に設置していた木製柵列が残り、ビニール製の塵芥を廃棄していたことから、近年の攪乱溝と判断した。櫓台濠側縁辺には桜の樹根による攪乱や軟質化箇所が認められた。

以上の事から、構築当時の状況がそのまま残されているわけではなく、地点的ながら地下遺構に達する後世の攪乱が及んでいることを確認した。

堀跡《SAH》

堀跡の石敷遺構は、長径長規模が最大15cmで10cmを中心値とする円礫を用いて、幅0.5mで帯状の配列を成す。今回の調査では、第1次調査の北端部0.5mを再度露出させながら東櫓方向に延長部分を検出した。検出範囲は延長2.8m、幅0.5m、石敷の厚さは0.2mである。第1次調査の問題点であった東櫓との接続部分の確認のため、調査区北壁は復元した東櫓の基礎コンクリートが露出するまで可能な限り追跡・確認した。石敷は第1次調査で想定した屈折角度ほどではなかったが、南側で確認していた「折れ」と同程度の屈折が認められた。1988年の発掘調査で確認した東櫓の位置と検討すると、石敷の敷設方向は東櫓の濠側外壁面角に連続する様で、上部施設の濠側壁面は屈折して東櫓壁面と連続すると考えられる。

石敷の構築では、砂利敷面を溝状に掘り込み構成材の礫混合粘質土を除去した上で、黒色土(3・4層土)を砂利敷上面に達する高さまで投入してから石敷を敷設している事を断面観察から確認した。3・4層共に隙間($\phi \sim 2\text{mm}$)が多く認められる。砂利敷構築後に石敷を敷設する工程順序があったと見られる。石敷の上面は東櫓に向かって標高値が高くなり、南側端部から東櫓側までは標高差0.2m(勾配率10%)を計測した。この傾斜は、砂利敷上面で確認した傾斜とほぼ同程度であった。

遺存状況は良好であるが、「砂利敷遺構」の遺存状況で触れた近年の攪乱溝により石敷の濠側縁辺が攪乱され、遺構を構成していた礫が失われている。

3. 出土遺物

本調査区からは瓦片などが出土したが、小片のため図示できなかった。

第5章 土浦城跡第3次調査

第1節 調査の経過

2003（平成15）年

- 7月29日 機材移動、周囲ロープ柵設置などの調査諸準備。
第1・2トレンチ調査区設定。掘削開始。
- 8月1日 第1・2トレンチ遺物出土状況図の作成。
- 5日 第3トレンチ掘削開始。
- 6日 第1トレンチ調査完掘。写真撮影。
- 7日 第2トレンチ調査完掘。写真撮影。
第3トレンチにおいて多量の瓦が確認される。
- 8日 第4トレンチ掘削開始。
- 12日 第3トレンチにおいて、石敷及び葺石を確認。
- 13日 第5トレンチ掘削開始。
- 14日～18日 現場夏休み。
- 19日 第1・2トレンチ平面図・断面図作成。
市立博物館市史研究会現地見学。
- 20日 報道向け現地説明会開催。
- 22日 第3トレンチ遺物出土状況図の作成。
土浦市文化財保護審議会現地視察。
- 23日 第3トレンチ調査完掘。写真撮影。
- 24日 発掘調査現地説明会開催。参加者約40名。
- 26日 第3トレンチ平面図作成。
- 27日 第3トレンチ断面図作成。
- 28日 第5トレンチ調査完掘。写真撮影。遺物出土状況図・平面図・断面図作成。
- 29日 第4トレンチ調査完掘。遺物出土状況図作成。
茨城ビデオパック調査状況撮影。
- 30日 第4トレンチ写真撮影。平面図・断面図作成。
その他調査記録の確認。
午後より機材を搬出し、調査終了。

第2節 検出された遺構と遺物

1. 第1トレンチ（第9図、図版3・4）

第1トレンチは、第1次(2000年度)調査時に確認できなかった本丸東側土塁における塀基礎遺構及び土塁の葺石状遺構の検出を目的として、本丸土塁南側角部の南側(櫓門側)斜面に設定したものである。調査区の規模は長辺(北東-南西)約5.3m、短辺(北西-南東)約2mの羽子板状であるが、調査区の南東側長辺部分は作業用に設けた階段部分のため、実際の調査規模は長辺約5.3m、短辺約1.1mの長方形、面積約5.8m²である。

(1) 土層

本トレンチにおける土層を概説すると、1層は1998(平成10)年度の東櫓建築時の土塁整備盛土である。1層を掘り込んだ2層は第1次調査時の調査区の埋戻し土で、最下層では埋め戻しに使用した山砂の薄い層を確認することができた。また濠側の5層は現代の残滓を多く含む砂質土で、昭和50年前後に行われた濠の石垣改修に伴う埋め戻し土と推定される。3層の褐色土・4層の暗褐色土は前回調査時に濠側土層と一括した層に対応するものと考えられるもので、やや砂を多く含み、締まりが弱く、叩き締めたというよりもただ盛り上げただけといった感の土層である。表層を除けば化学製品は出土せず、また土塁濠側裾部近くで板状のコンクリート塊が出土したことから、これらの層位は現代までは下らず、近代頃に形成されたものではないかと推定される。

(2) 検出遺構

3・4層の下、トレンチ底部から下は本来の土塁の盛土と考えられるが、3・4層が盛られる以前に一度土塁の表層が削られたようで、トレンチ底部においても塀基礎遺構や葺石状遺構などを検出することはできなかった。また5層の掘り込みにより濠側の土層も破壊されているため、現在の石垣構築以前の状況についても確認することはできなかった。

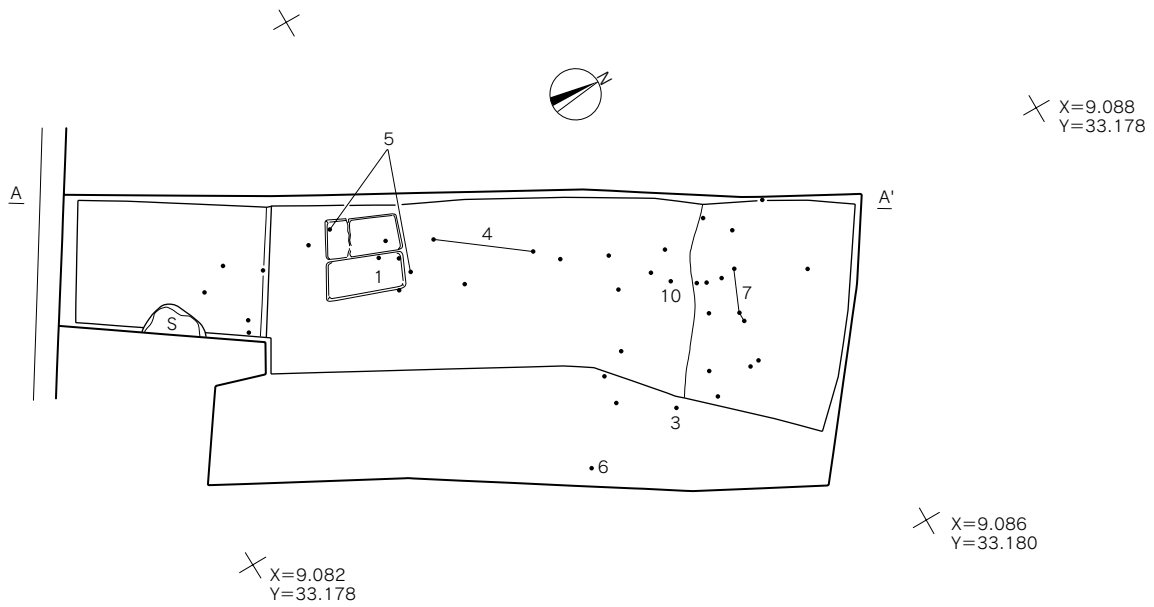
(3) 出土遺物

本トレンチからは瓦類、土師質土器、鉄製品などが出土している。出土層位の大半は3・4層で、盛土の中に含まれていたものと考えられる。

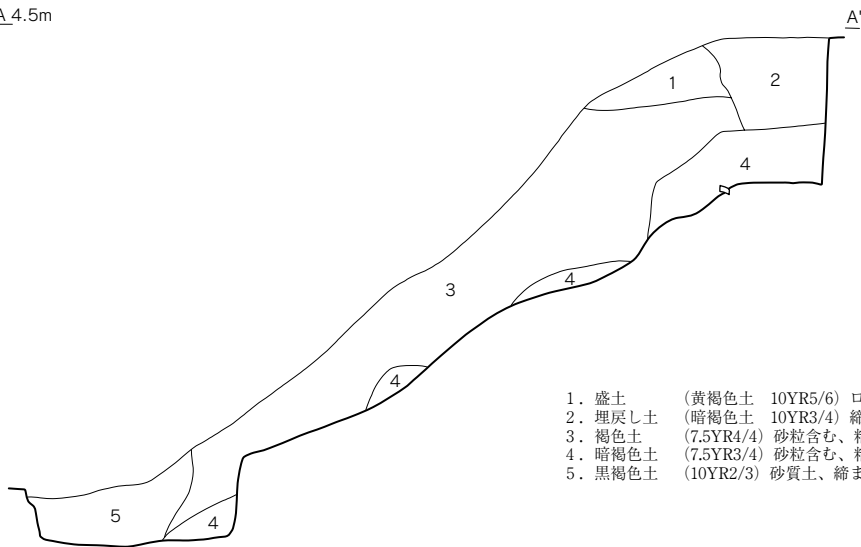
瓦類（第10・11図1～8、図版11）

本トレンチからは合計約11.7kgの瓦が出土している(第4表)が、細片が多く全体をうかがえる資料は少ない。傾向としては板塀瓦が最も多く、重量では全体の約46%を占めている。これはこの場所から出土している瓦が、主に塀で使用されていた瓦であることを物語っている。なお、第1次調査時の南区は本トレンチの北側に当るが、ここでも板塀瓦が出土した瓦の中で最も多く、構成比はほぼ同様の約47%であった。

1は軒丸瓦の一部である。巴は右巻きで尾はやや短め、やや太めの圈線を持つのが特徴である。なお、この瓦は第3トレンチから出土した軒丸瓦(第18図1)と同汎であると考えられる。2～4は平瓦である。このうち4は接合関係を示すが、2点のみの接合で集中もしないことから、この瓦はこの場所で壊れたのではなく、盛り上げられた3・4層中に含まれていたものであろうと推定される。平瓦の端面・側面の処理については特徴があり、2は1回ナデ仕上げで形状が多角形を呈すの対し、3は全体に曲面、4は比較的明確な処理がなくやや先端が尖り気味である。5～7は板塀瓦である。5



A 4.5m

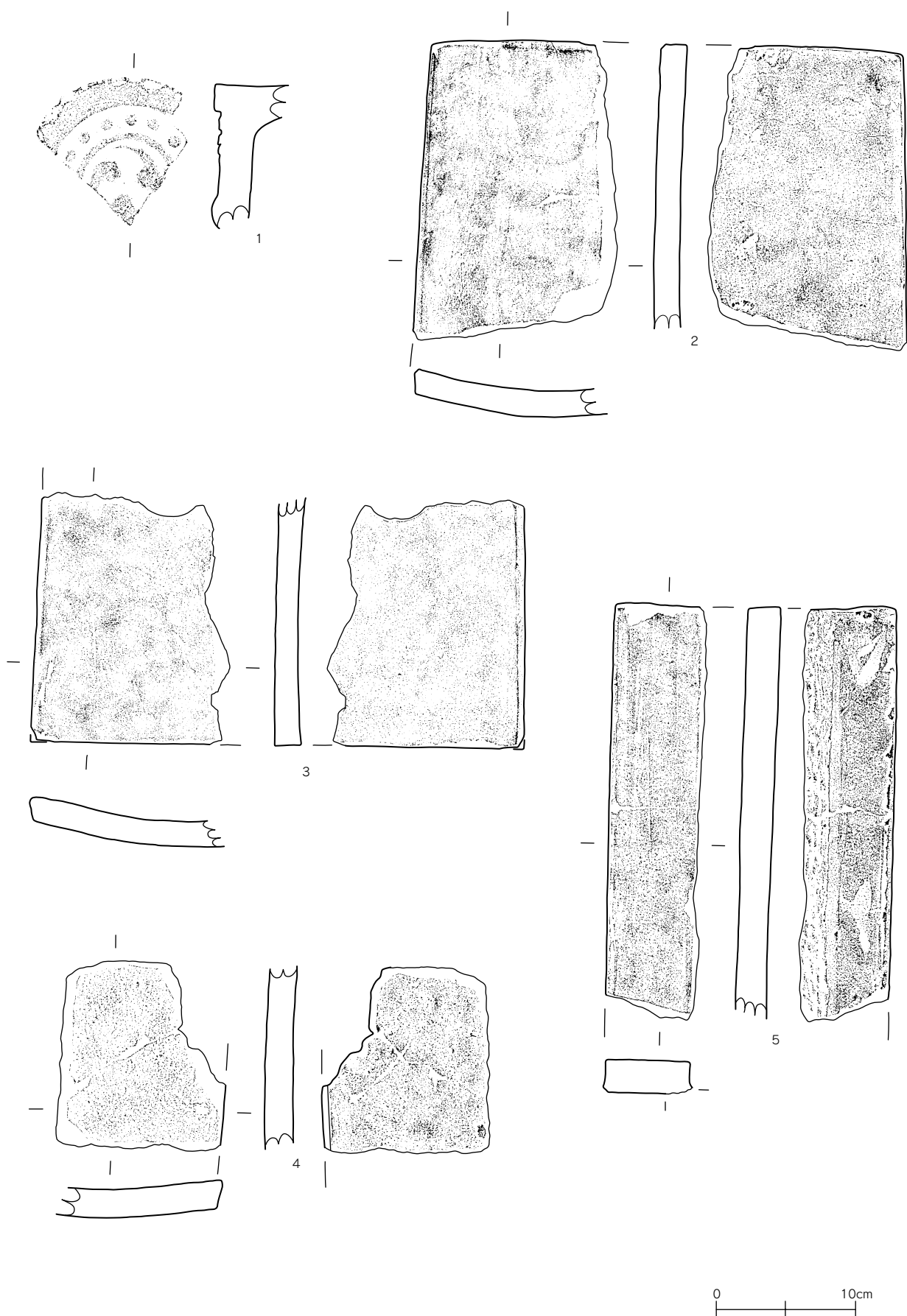


1. 盛土 (黄褐色土 10YR5/6) ローム大含む、締まり普通。
2. 埋戻し土 (暗褐色土 10YR3/4) 締まり強い。
3. 褐色土 (7.5YR4/4) 砂粒含む、粘性弱い、締まりやや強い。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 砂粒含む、粘性弱い、締まり普通。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 砂質土、締まり弱い。

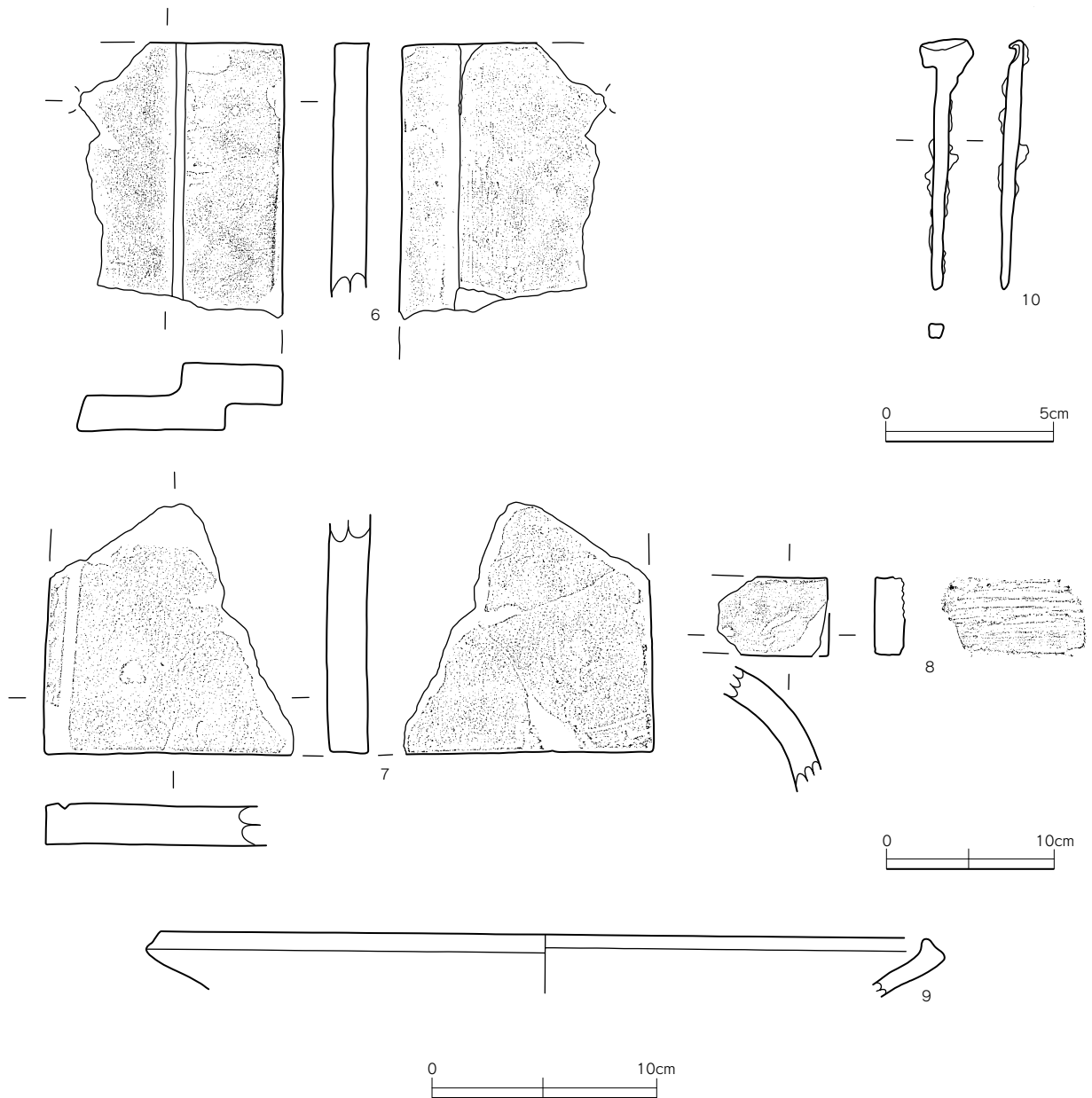
A 4.5m



第9図 第1トレンチ 平面図・遺物出土状況図・土層断面図



第10図 第1トレンチ 出土遺物(1)



第11図 第1トレンチ 出土遺物(2)

は棧瓦部のみが脱落したもので、裏面の接合部が剥離した痕には櫛状の工具を約1～2cm毎に力を入れながら引いた状況が観察できる。6は左端に釘穴が確認できるので右棧であることが分かる。7の平瓦部には鋭利な薄い刃物状の工具で、右→左の順に斜めに刃を入れて溝を切り取ったV字形の水切り溝が設けられている。8は棟瓦(冠瓦)の一部であろう。

土師質土器類 (第11図9、図版11)

9は内耳鍋または鉢類の口縁部である。このほかかわらけなどの小片も出土している。

鉄製品 (第11図10、図版11)

10は鉄釘(頭卷釘)である。軸は四角形の断面を呈し、先端部を欠損している。

2. 第2トレンチ (第12図、図版5)

第2トレンチも第1トレンチと同様、本丸東側土塁における塀基礎遺構及び土塁の葺石状遺構の検出を目的として、本丸土塁南側コーナー部東側(第1トレンチの東側)に設定したものである。調査区の規模は長辺(北西-南東)約6.2m、短辺(北東-南西)約1mの長方形、面積約6m²である。

(1) 土層

本トレンチにおける土層は第1トレンチと同様で、1層が1998年度の東櫓建築時の土塁整備盛土、2層が第1次調査時の調査区の埋戻し土、3層と4層が第1次調査時に濠側土層と一括した層に対応する褐色及び暗褐色土で、近代頃のものと考えられる土層、5層が濠の石垣改修に伴う埋め戻し土である。

(2) 検出遺構

本トレンチでは、土塁天場部分の4層上面でやや円礫が多い部分もあったが、4層が瓦片を含む層であることを考えると3・4層の下、トレンチ底部から下が本来の土塁の盛土と考えられる。本トレンチも第1トレンチと同様、3・4層が盛られる以前に一度土塁の表層が削られたようで、トレンチ底部においても塀基礎遺構や葺石状遺構などを検出することはできなかった。また5層の掘り込みにより濠側の土層も破壊されているため、現在の石垣構築以前の状況についても同様に確認することはできなかった。

(3) 出土遺物

本トレンチからも瓦類、土師質土器、陶器などが出土している。出土層位の大半は3・4層で、盛土の中に含まれていたものと考えられる。

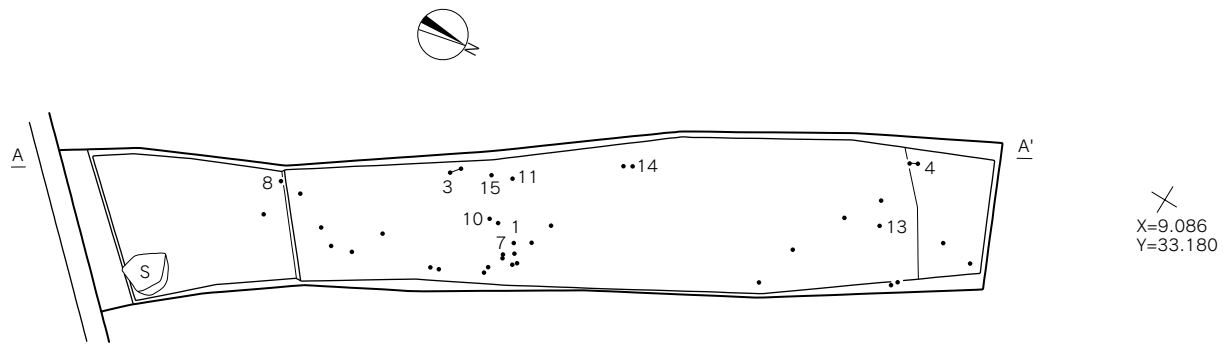
瓦類 (第13~15図1~13、図版12・13)

本トレンチからは合計約18.9kgの瓦が出土している(第4表)。細片が多く全体をうかがえる資料は多くはないが、丸瓦(第13図1)及び輪違瓦(第14図5~8)など保存状態が良好な個体も存在する。傾向としては平瓦及び板塀瓦が多く、特に第1トレンチと比べると平瓦が多いのが特徴である。また輪違瓦も多い。

1は丸瓦の完存品である。表面にはキラ粉が施されているが、大きな焼きムラも見られる。2~4は平瓦である。2は比較的良く残るが、3と4は破片である。このうち3と4は接合関係になっているが、出土場所はほど近く同一個体の破片が埋まっているうちに割れたものと思われる。平瓦の端面処理については、2・3とも1回仕上げの多角形のものである。5~8は輪違瓦の完存品で、5と6は3層上部表層、7と8は中・下部から出土している。これらの輪違瓦は、形状はよく似るものの内面の処理に違いが見られ、7については製作時についた右手人指指・中指・薬指3本の指頭圧痕が明瞭に残されている。9~11は板塀瓦である。全てのものに釘穴が見られるので、全て左棧の頭部の破片である。3点とも水切り溝が存在するが、第1トレンチ出土のものとは異なり丸い棒状の工具を用いて直線的に掘り込まれている。ただし工具には違いがあり9・11は幅約2、3mmの竹籤状の工具であるが、10は幅約7mm程度のやや太目の細棒状の工具が使われている。12・13は第1次調査報告時に板塀瓦とセットになる瓦と推定して板塀闘斗瓦と呼称したものである。上端の三角形の突出部は板状の部分に後付けされており、ナデ調整されている。

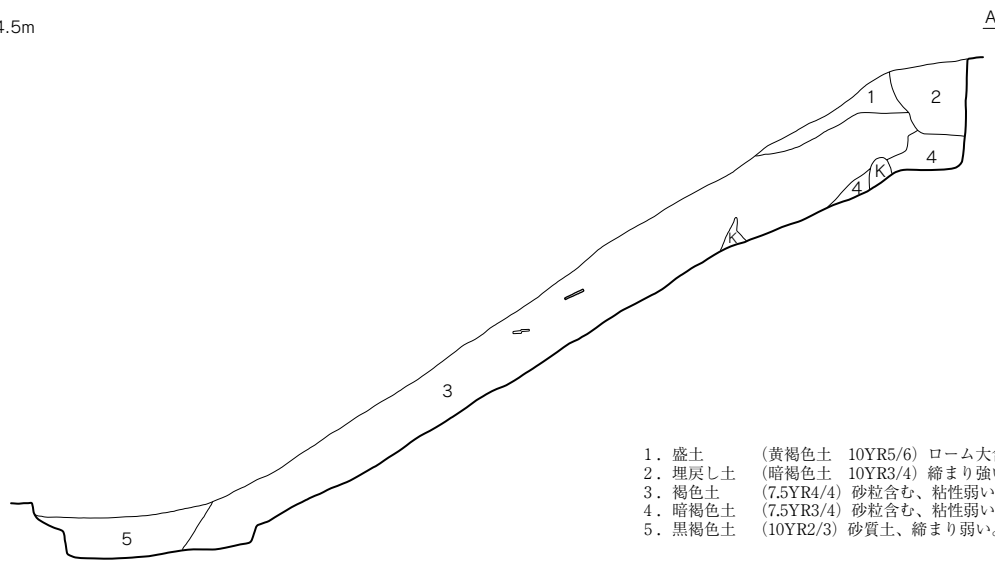
土師質土器 (第15図14、図版13)・陶器 (第15図15、図版13)

14はかわらけの口縁から体部の破片である。15は還元炎焼成で暗灰色を呈する素焼きの小皿状の陶器片であるが、内面に溶けた金属状の物質が付着している。



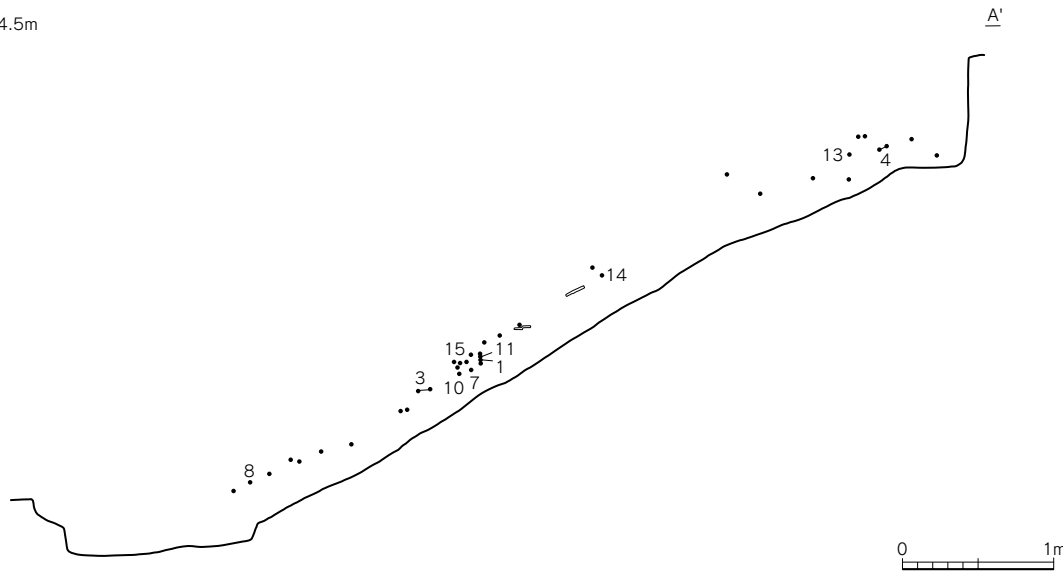
X=9.082
 Y=33.184

A 4.5m

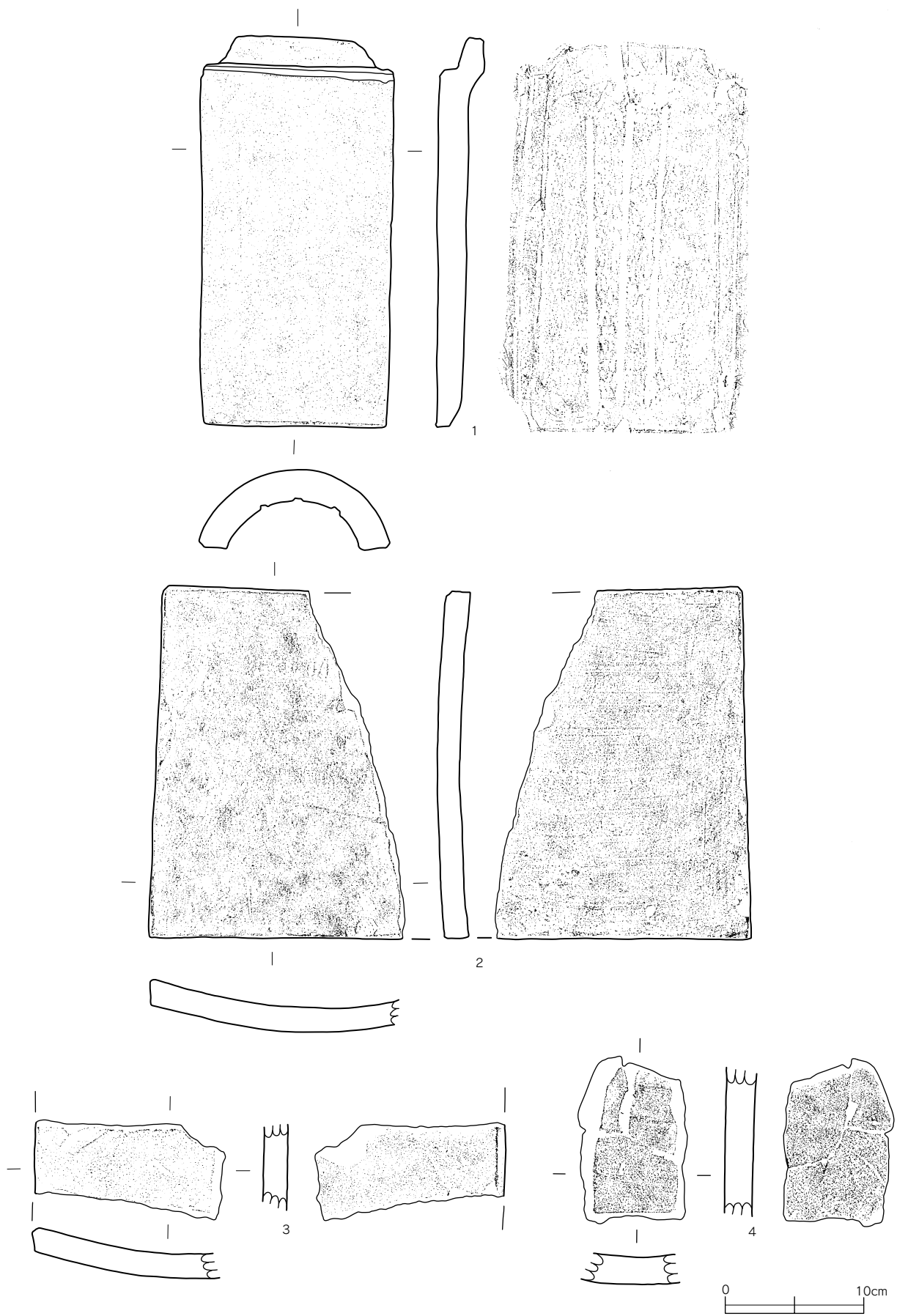


1. 盛土 (黄褐色土 10YR5/6) ローム大含む、縮まり普通。
2. 埋戻し土 (暗褐色土 10YR3/4) 縮まり強い。
3. 褐色土 (7.5YR4/4) 砂粒含む、粘性弱い、縮まりやや強い。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 砂粒含む、粘性弱い、縮まり普通。
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 砂質土、縮まり弱い。

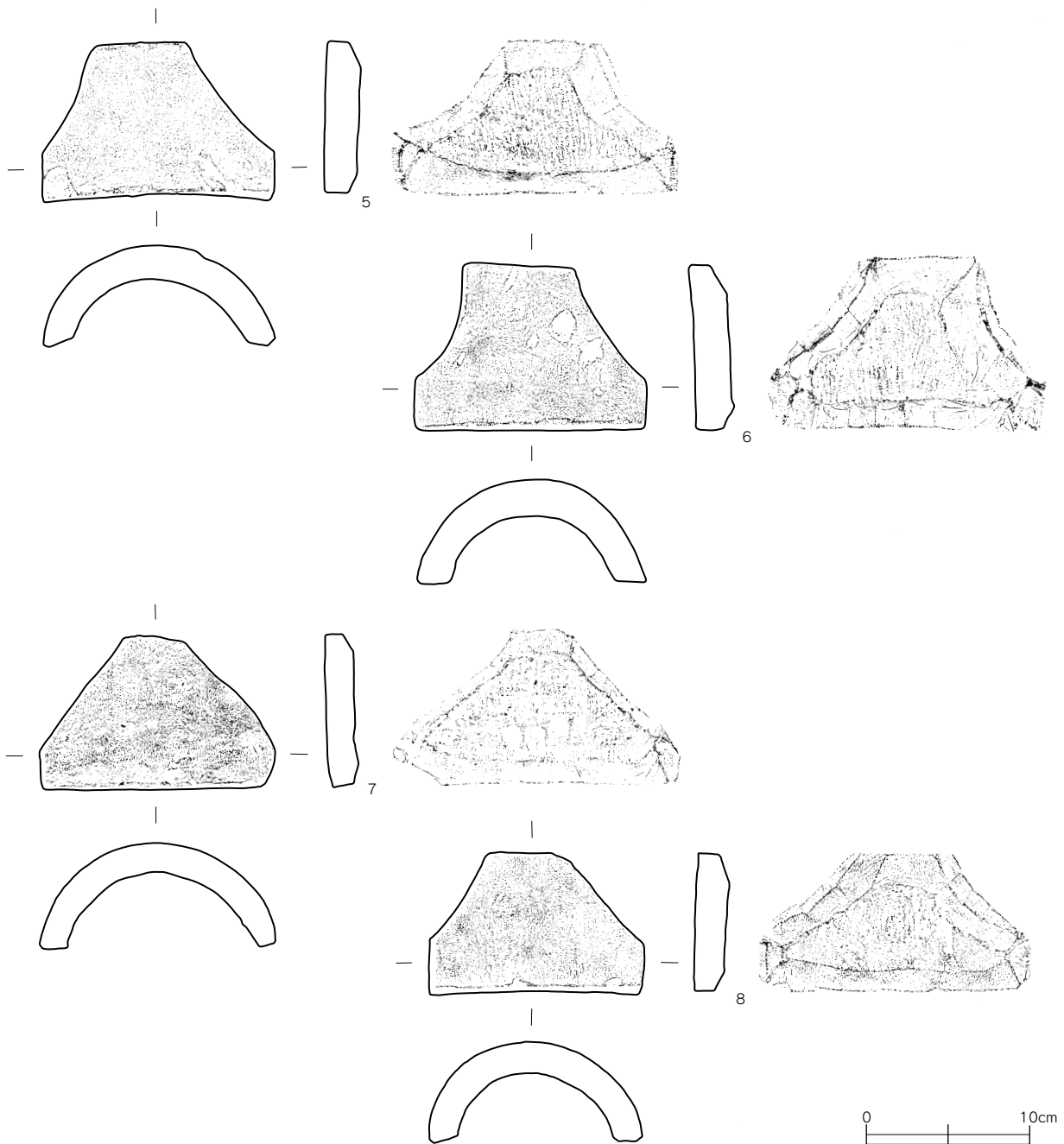
A 4.5m



第12図 第2 トレンチ 平面図・土層断面図・遺物出土状況図



第13図 第2トレンチ 出土遺物(1)



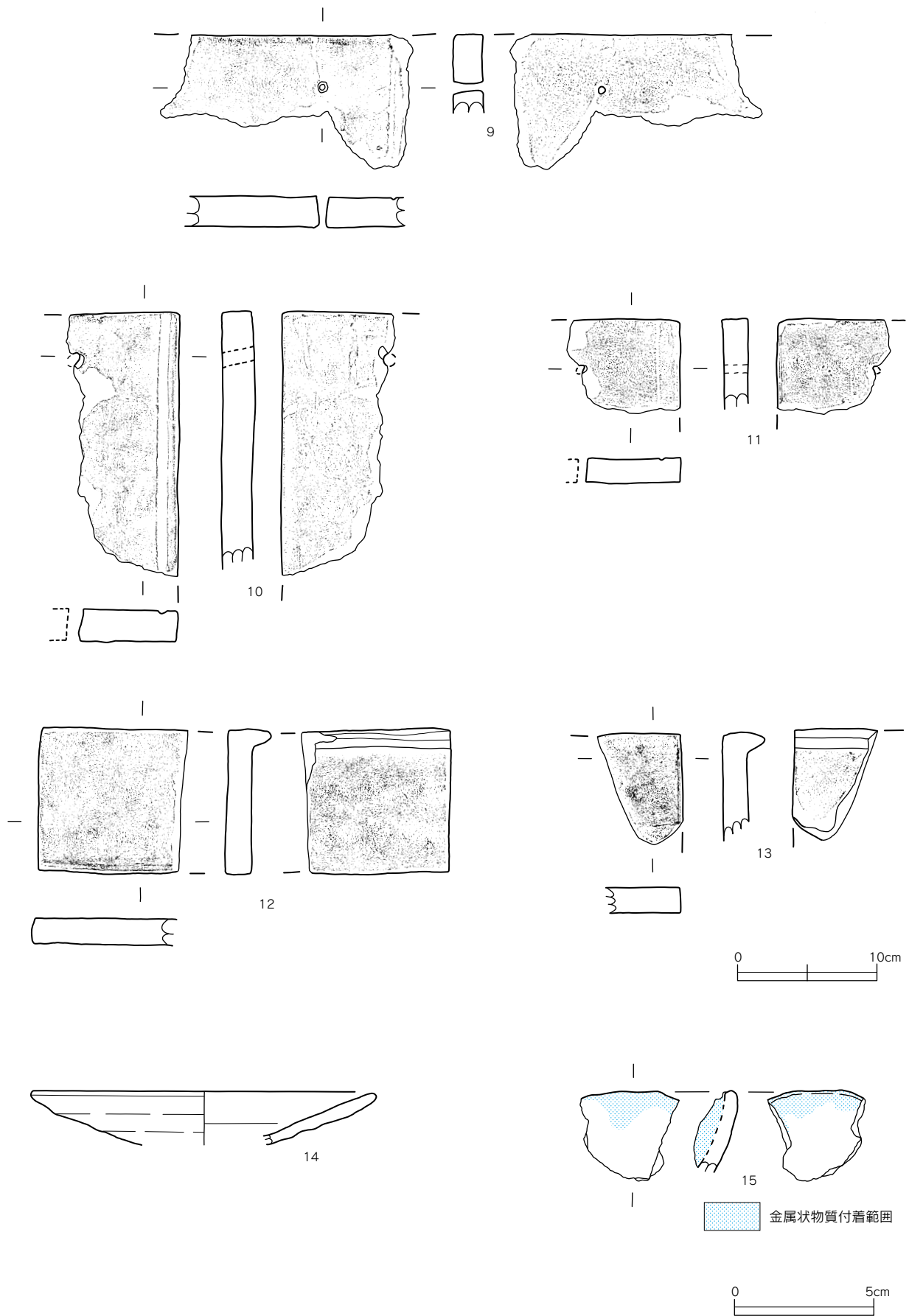
第14図 第2トレンチ 出土遺物(2)

3. 第3トレンチ (第16・17図、図版6・7)

第3トレンチは、土塁の東櫓南東側(濠側)斜面における土塁の葺石状遺構の検出を目的として設定したものである。調査区の規模は長辺(北西-南東)約8.4m、短辺(北東-南西)約1.1mの長方形、面積約9.2m²である。

(1) 土層

本トレンチにおける土層を概説すると、上部の1～3層は1998(平成10)年度の東櫓建築時の土塁



第15図 第2トレンチ 出土遺物(3)

整備土である。2層は東櫓建設時に遺構面を保護するために高上げた盛土、1層は建築工事後の周景整備時の盛土で、3層は建築工事後に行った電気工事に伴う掘り込みである。従って整備前の地表面が4層の上面である。この4層は第1次調査時に濠側土層として一括した層に相当し、トレンチ下面が土塁の本体である。この今回検出された部分の土塁の勾配は30度前後で、前回調査時に確認した部分の土塁の勾配40度に比べるとやや緩やかである。なお、今回の調査中に、トレンチ中段において薄い粘土層が縞状に堆積していることを確認できた箇所があることから、この部分の土塁の構築については土を版築状に水平に積んでいることが想定される。濠側の5層は第1・2トレンチの5層と同じく、昭和50年前後に行われた濠の石垣改修に伴う埋め戻し土と推定される。

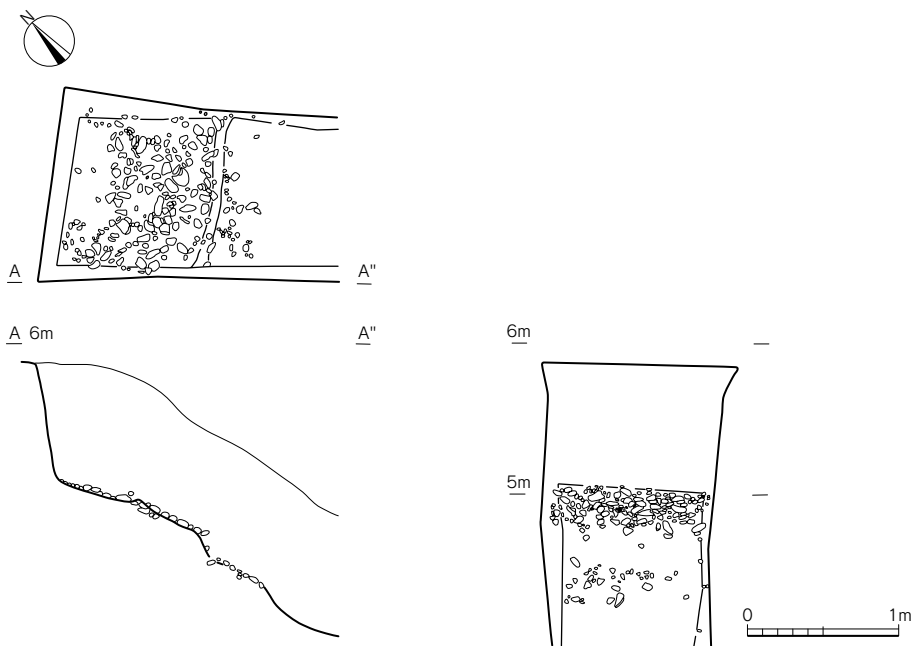
(2) 検出遺構

葺石状遺構

調査区北西側(東櫓側)にあたるトレンチ斜面上部で、土塁の斜面に円礫を貼り付けた葺石状の遺構を検出した。この遺構は標高4m付近から調査区の北西端に当る標高約5mまでの間の約20度の緩やかな土塁斜面の約1.5m分に、途中約20cmの小さな段差を挟んで2段に握り拳大の円礫を貼り付けたものである。特に上段は円礫が大きく、またしっかり張り付けられているが、下段は礫が小型になり、遺存状況も悪い。この葺石状遺構を検出したトレンチの北西側には1884(明治17)年まで東櫓が存在していたので、本遺構は東櫓と関連する遺構である可能性が高い。

遺構に伴う遺物としては瓦類が多量に出土しているが、特に葺石状遺構の段差部分にあたる下段部の上に遺物の集中が見られる。本トレンチ脇の東櫓が火災によって焼失した記録があることを考えれば、これらの瓦は江戸時代に東櫓で使用され、明治時代に建物を破却した際に廃棄された瓦であることが考えられる。

なおこのような葺石状遺構は第1次調査時にも土塁濠側から検出されており、土浦城の本丸土塁外側(濠側)の特徴的遺構であると考えられるが、今回検出されたもののほうが礫も大きく、遺存状況も良好である。



第16図 第3トレンチ 葺石状遺構 平面図・断面図



第17図 第3トレンチ平面図・遺物出土状況図・土層断面図

(3) 出土遺物

本トレンチからは、多量の瓦類のほか土師質土器、陶器などが出土している。出土層位は4層で、特に葺石状遺構周辺から多く出土している。

瓦類 (第18~22図、図版13~15)

瓦類は葺石状遺構の上段直上部から土塁裾近くまで幅広く出土している。特に葺石状遺構の下段部の上では多数の瓦が出土しているが、調査区内から出土する瓦が、近い位置の同レベルの瓦同士で接合する例が多い。このことからこれらの瓦は壊れたものが他から運ばれて捨てられたものではなく、この場所に廃棄された際に壊れたものであると考えられる。それに対し土塁中段~裾近くのは出土レベルにばらつきがあることから、土塁上部の葺石状遺構周辺に捨てられたものが、時間とともに崩落したものではないかと想定される。なお、本トレンチから出土した瓦類は合計約63.8kgで、平瓦37%、丸瓦56%、の比率を示す。これは基本的に東櫓の本瓦葺きを反映しているものと推定されるが、やや平瓦が相対的に少ないかも知れない。また、軒丸瓦は出土しているものの、瓦当文様の分かる軒平瓦は出土しなかった。

1は接合の結果完形となった軒丸瓦である。右巻き三ッ巴文で、16個の珠文を配し、筒部には焼成前穿孔の釘穴が縦に2ヶ所空けられている。また内面には粗い布目が明瞭に観察できる。2と3も軒丸瓦の瓦当面で、どちらも右巻き巴文であるが、3については1と同汜と考えられるが、2は圏線や巴に明瞭な相違がある。4は剥離した軒平瓦の瓦当部と推定したが、瓦当文様は不明である。5~8は丸瓦で、5は玉縁部周辺、6~8は筒部の破片である。5と6の内側には棒状圧痕があり、6~8は粘土切り出し時のコビキ痕が残っている。また筒部の端部処理が5と7は1回削りで角があるのに対し、6と8は端面が丸くなっている。9~18は平瓦である。9は本トレンチで出土した中では最も遺存が良好なもので、上部の1/3と右端に変色部分がある。これは葺かれていた時の瓦の重複部分と推定されるが、同様の痕跡は14の両端にも観察できる。なお、11の右端や12については赤褐色を呈する部分もあり東櫓の火災との関連も考えられるが、11は焼成不良である可能性が高い。端部の処理については丸仕上げが9・11・12・13・17、1回仕上げが10・15・16・18である。なお、16は他に比べて厚さが薄いので、使われ方が違ったか、あるいは平瓦ではない(棟瓦?)可能性もある。19は輪違瓦である。20・21は板塀瓦で、20は釘穴があり左棧と推定した。21は右棧と推定したもので、左端の水切り溝は第1トレンチ出土のものと同じく刃物によって切り取られたものである。裏面には滑り止めの突出部の痕跡がある。22は平瓦に似るが、あまりにも薄いので不明瓦に分類した。23は漆喰が付着した状態で遺存する丸瓦の筒部の破片である。

土師質土器 (第23図24、図版15)

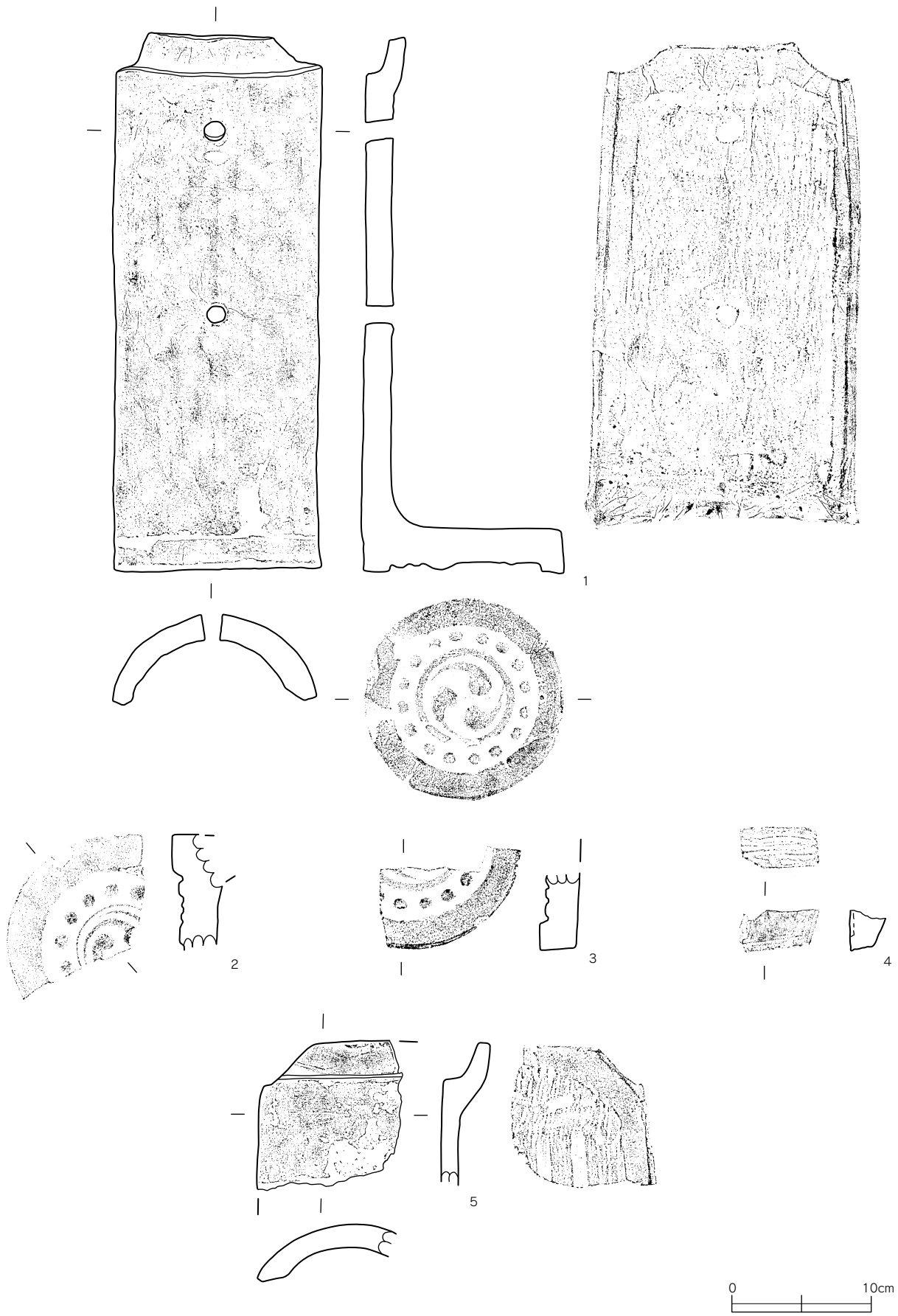
24は土塁中段の4層中より出土した小型のかわらけである。焼成は良好であるが胎土には砂や雲母が多く含まれている。

陶器 (第23図25、図版15)

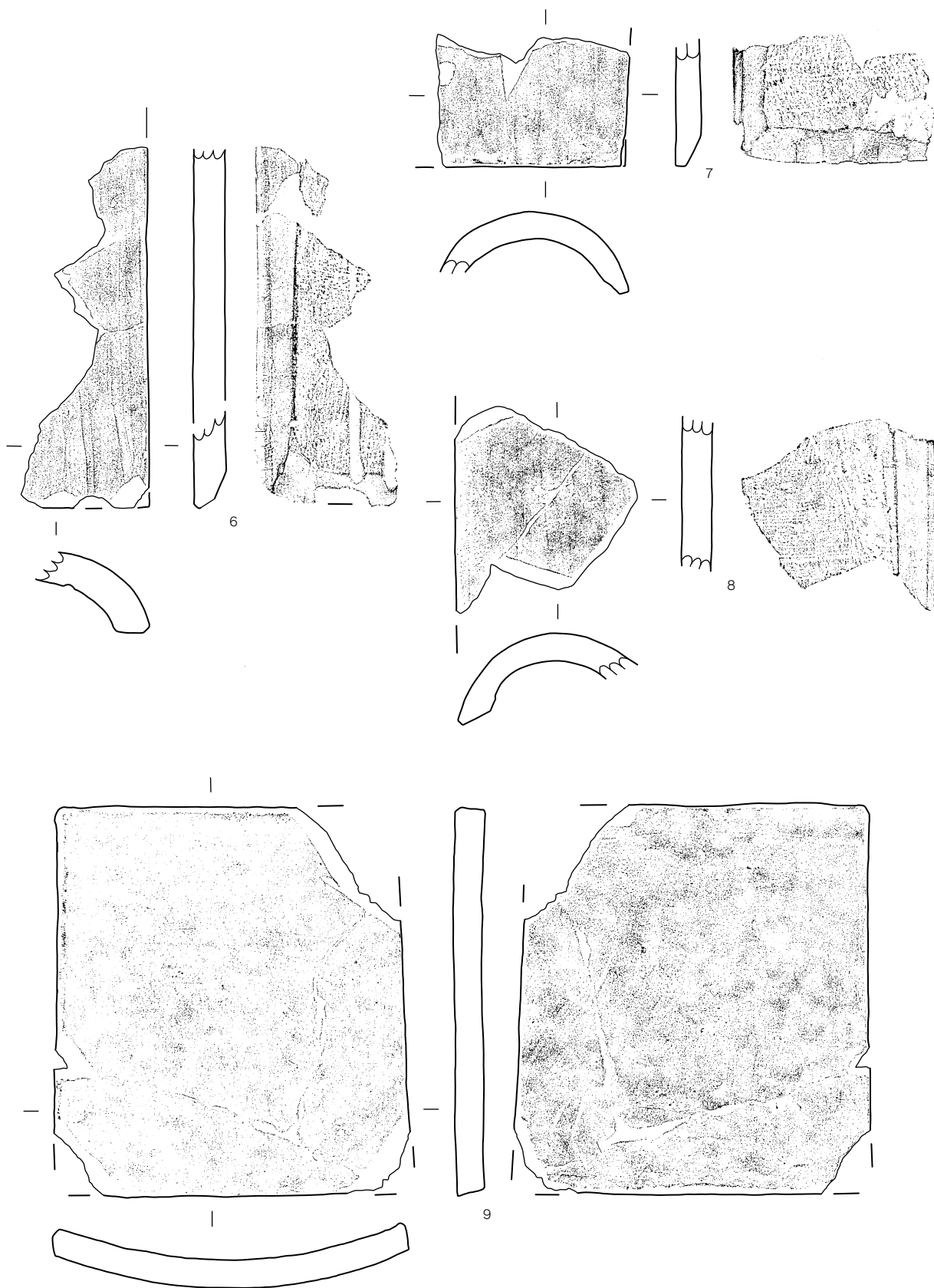
25はかわらけと同じく土塁中段の4層中から出土した陶器の播鉢である。内面に8条の櫛状工具による沈線が施されている。

金属製品 (第23図26・27、図版15)

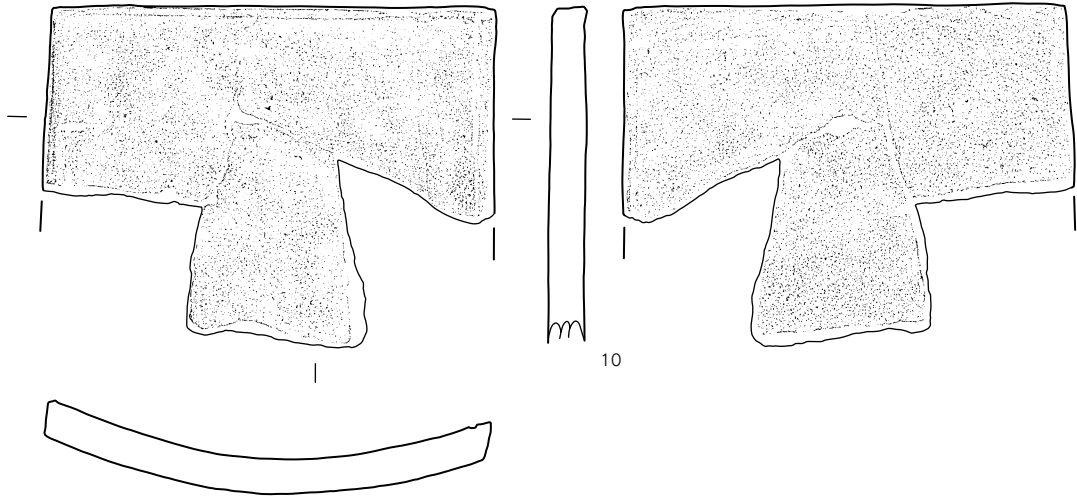
26は鉄釘(頭巻釘)である。軸は四角形の断面を呈し、頭部の大半を欠損している。27は覆土中から出土した大正13年銘の桐一銭青銅貨である。



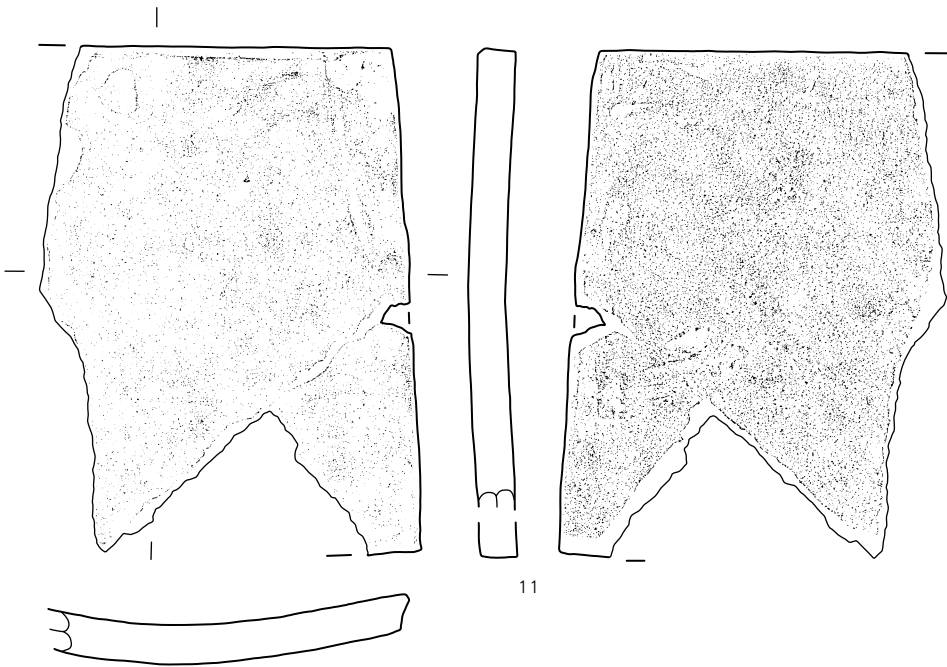
第18図 第3トレンチ 出土遺物(1)



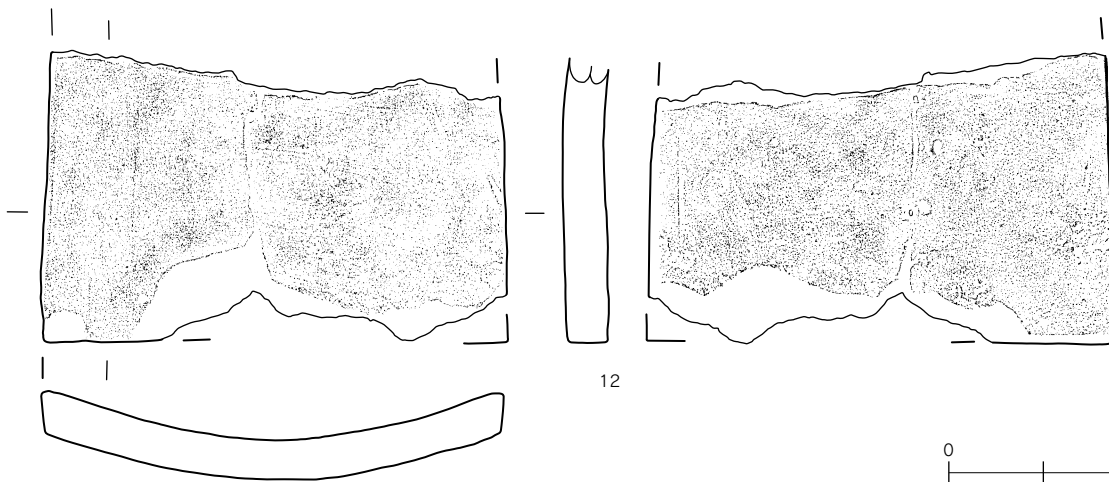
第19図 第3トレンチ 出土遺物(2)



10



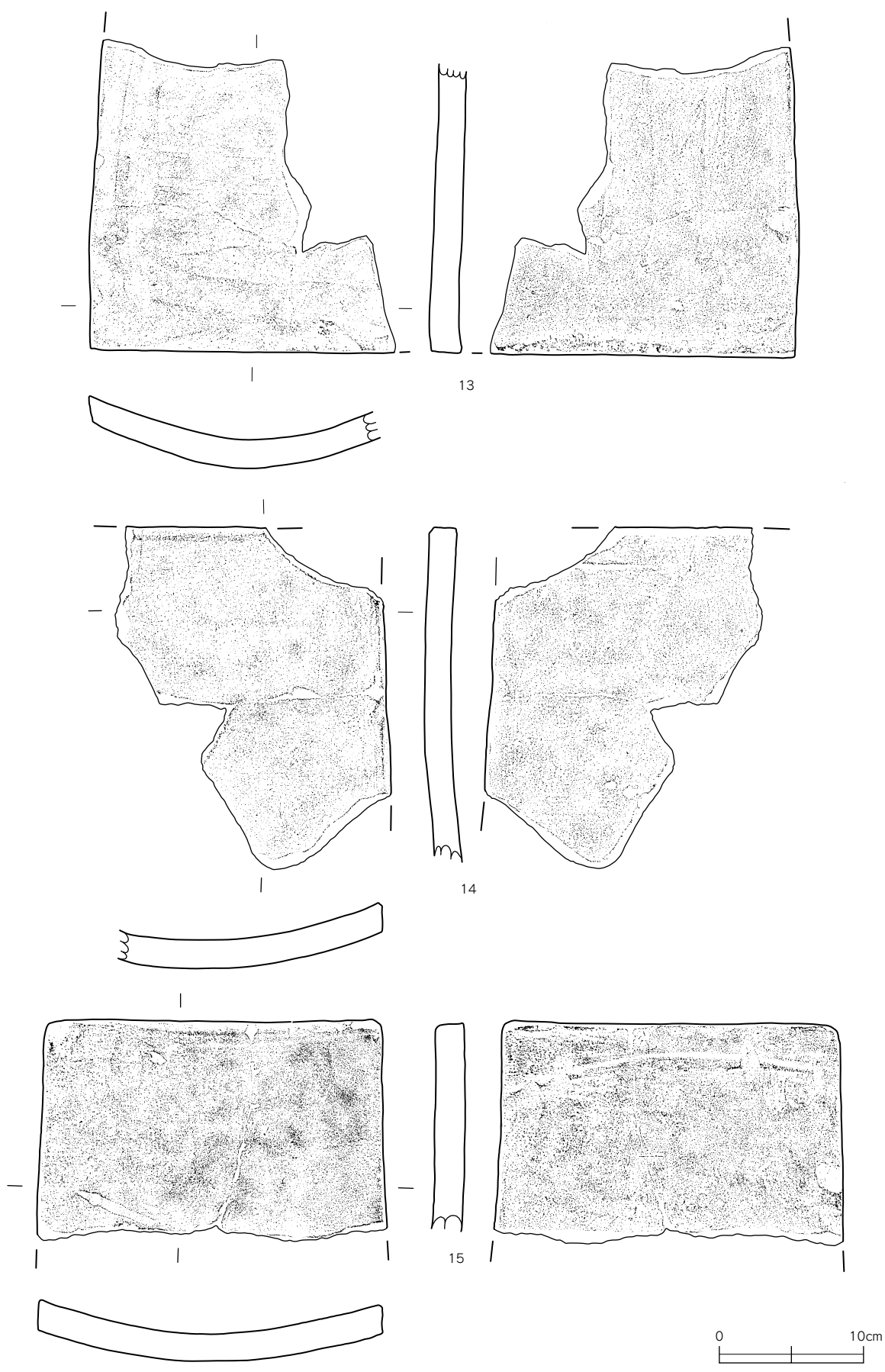
11



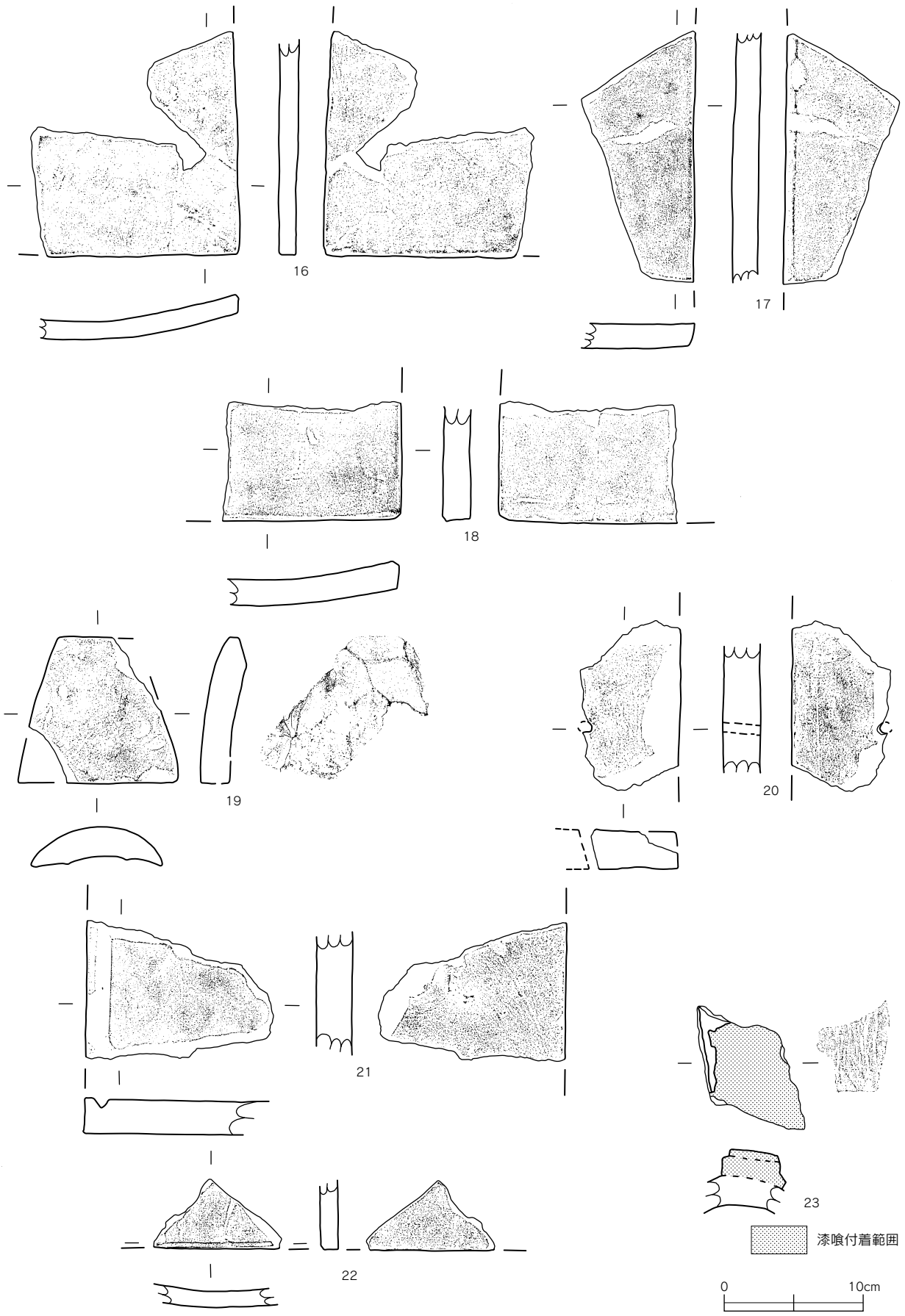
12



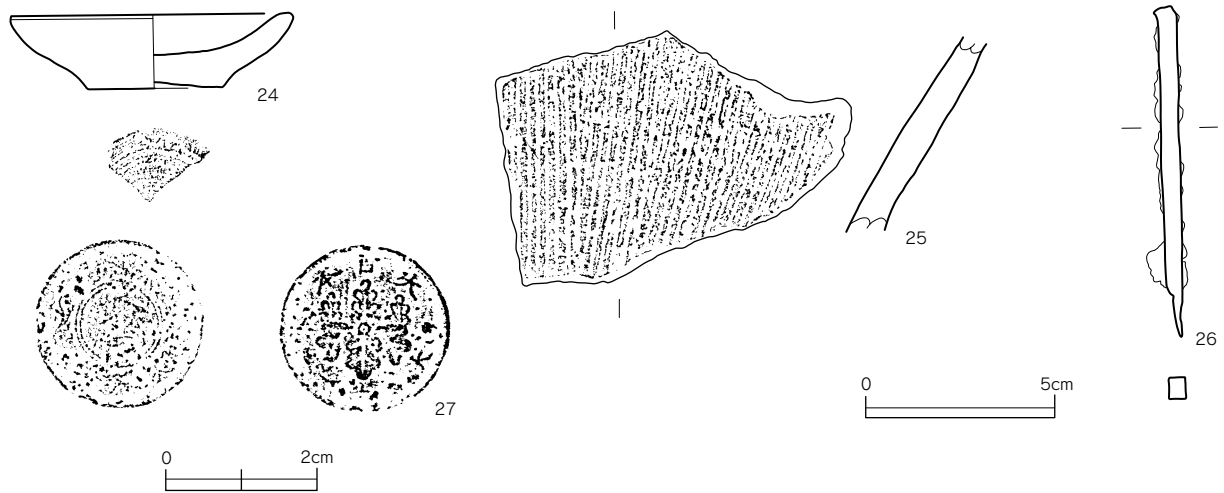
第20図 第3トレンチ 出土遺物(3)



第21図 第3トレンチ 出土遺物(4)



第22図 第3トレンチ 出土遺物(5)



第23図 第3トレンチ 出土遺物(6)

4. 第4トレンチ (第24・25図、図版8・9)

東櫓が設置されていた本丸土塁の北東部は、他の土塁に比べると西側に幅が広がって土壇状を呈している。この北側には小型の外柵形が設置され、現存する霞門とともに土浦城裏門の防御施設を形成していたことが絵図などに残されている。第4トレンチは、この東櫓—霞門間にあたる土塁(土壇)北西角部斜面における堀基礎遺構の確認及び葺石状遺構の有無の確認を目的として設定したものである。調査区は上辺(南側)約1.5m、下辺(北側)約3.8mの変形した台形状で、西北側に拡張区を設定している。全体の面積は拡張区を含め約13m²である。

(1) 土層

本トレンチにおける土層を概説すると、①1998(平成10)年の東櫓復元整備に伴う盛土、②昭和期頃の公園整備等に伴う盛土、③大正～昭和初期の郡役所時代の盛土、④東櫓土壇の構築土に大別される。まず1層が①の東櫓復元整備に伴う盛土に該当し、その下が整備工事前の地表面となる。次に②の昭和期頃の盛土としては調査区2～9層及び拡張区の18・20～25層が該当する。このうち2～7層は何らかの理由で一度削ってしまった東櫓土壇を後で盛りなおした土層と考えられ、部分的に化学製品などの残滓を含んでいる。また拡張区の18層以下の土層は、公園整地に伴い本丸に持ち込まれた砂層などである。8・9層は東櫓解体後から昭和期の層と推定される層で、土質の違いから分層は可能だが詳細な盛土の時期は不明である。次に③の郡役所時代の盛土としては19層が該当し、ここからは近代頃の遺物が集中して出土している。そして11～17層が④の東櫓土壇の構築土で、西壁の10層は斜面上で検出した地業跡の覆土である。この11～17層の上面が本来の江戸時代の東櫓土壇の表面となるが、土壇の裾部は公園整備に伴って設置された石列に伴う掘り込みにより攪乱を受けている。

この土壇の盛土を観察すると、13・14・15・16層の底面には小円礫を敷き詰めた面が水平に存在している。当初16層下でこの円礫面を検出した時には何らかの遺構の基礎地業跡かと考えたが、調査の結果13～15層の下でも同様の円礫面が発見され、更に精査すると各層はその円礫面によって挟み込まれ、土壇の奥まで続いていることが確認された。このことから考えると、この円礫面と間の土の層は土壇構築時の水平盛土の単位で、構築時に各盛土の底面に円礫を入れて敷き固めたものではないかと想定される。それに対し11層は12・13層の上に盛り上げて締め固められた土層で、底面には円礫面が存在しないが、上面には小円礫を敷き詰めた面(砂利敷面)が存在する。

(2) 検出遺構

砂利敷面

本調査区南側の土壇最高部に当る平坦部で、小円礫を敷き詰めた石敷の面を検出した。確認された石敷は11層の上面にあたり、直径3～5cm程度の小型の円礫を薄く敷き詰められたものである。平面的な範囲としてはトレンチ南角の長さ約0.6m、幅約1.2m分で、先に行くほど円く広がり扇状を呈しているが、調査区東壁付近は攪乱を受けている。この攪乱層（7層）上面は昭和期の公園の一部として利用されてきた地表面で、長年にわたり公園管理（掃き掃除）されてきた結果砂利敷面と近似してしまっていたため、断面では11層と7層は区別ができるが平面的な広がりについては判然としない部分もある。いずれにしてもこの遺構の検出された部分は東櫓土壇の北西角の平坦部にあたることから、東櫓の周囲に施された遺構と考えられ、第2次調査区で検出された砂利敷面と一連の性格を持つ遺構と考えられる。

この砂利敷面では瓦などが出土しているが、小片で図示できない。

ピット

本調査区中央部、石敷面の下にあたる斜面の上部で2基のピットを検出した。検出したピットの大きさは13層下の円礫面で東側のものが直径約25cmの円形、西側のものは長軸55cm、短軸36cmの南北に長い楕円形を呈するものであるが、確認に留めたため両ピットとも深さは不明である。覆土はどちらのピットも暗褐色土でピットの掘り込まれた13層と同じであることから、本来は土塁の斜面上から掘り込まれていたものと考えられる。本ピットの性格は不明であるが、覆土に若干の漆喰を含むことから東櫓の修理・解体などの工事に伴う足場のために使用したものである可能性も想定される。

本遺構では西側のピット内からは陶器（第30図37）が出土している。

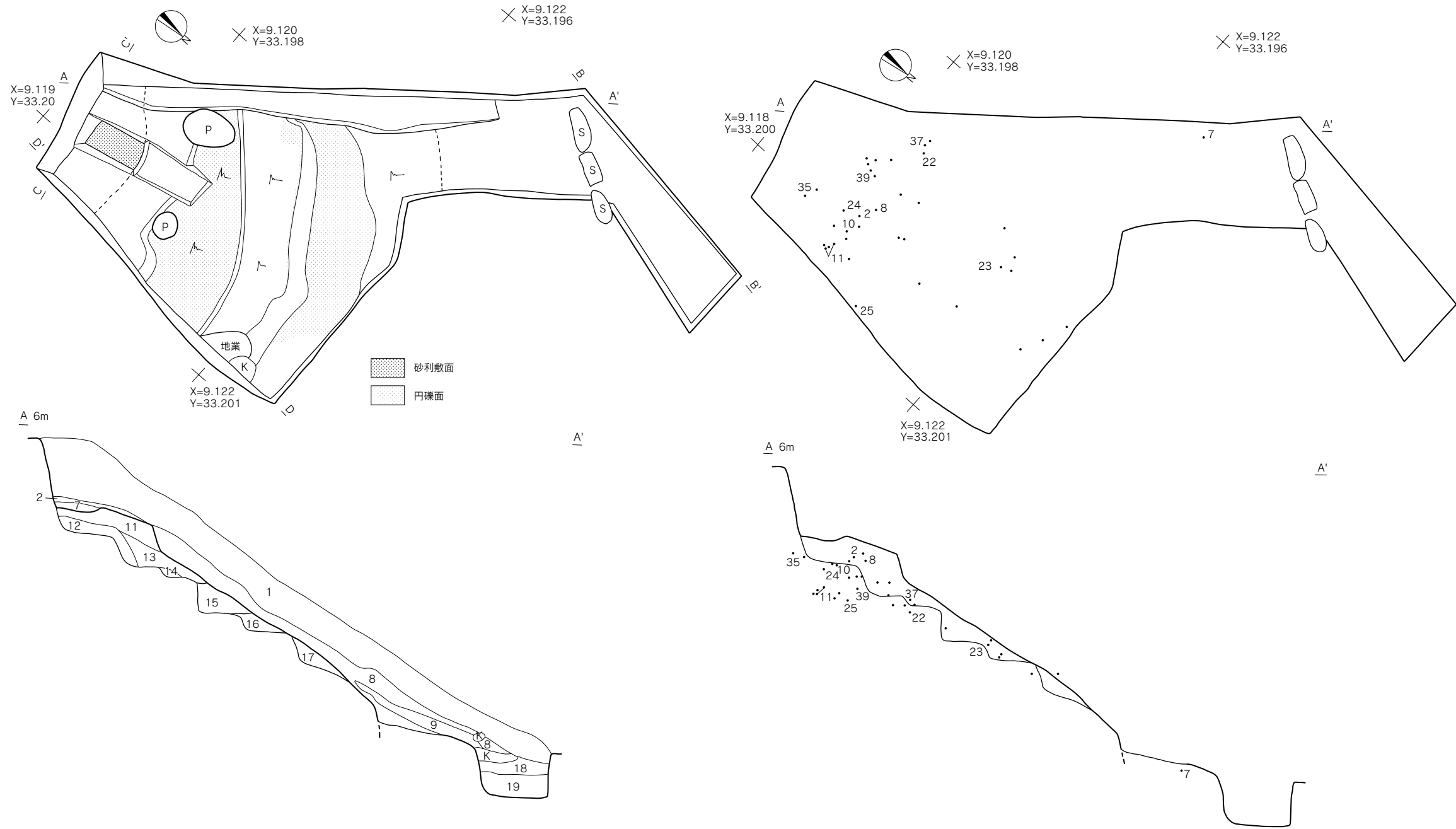
地業跡

本調査区北寄りの土壇斜面下段、調査区の東壁面において検出したものである。検出されたのは南北約50cm、東西約35cmの半円形で、東側半分は調査区外に延びていると推定される。また北端は攪乱を受けているため全体形は明らかではないが、概ね円形になるもの推定される。確認のみのため遺構の発掘は行っていないが、確認面では遺構中に黄色砂および円礫が充填されていた。この内部に円礫や砂が充填された遺構については、東西櫓や櫓門などの建物で検出された礎石下の地業跡と共通する点があるため、何らかの構造物に伴う地業跡ではないかと思われる。絵図には東櫓～霞門の間に塀が描かれており、この塀に関係する地業跡である可能性が考えられるが、以前に発見されている塀基礎とは形状が異なることや本調査区で発見された地業跡はこれ1つであるため、どのような性格の構造物に関係するものであるかを決定することは難しい。

本遺構内では遺物を検出することができなかった。

石列

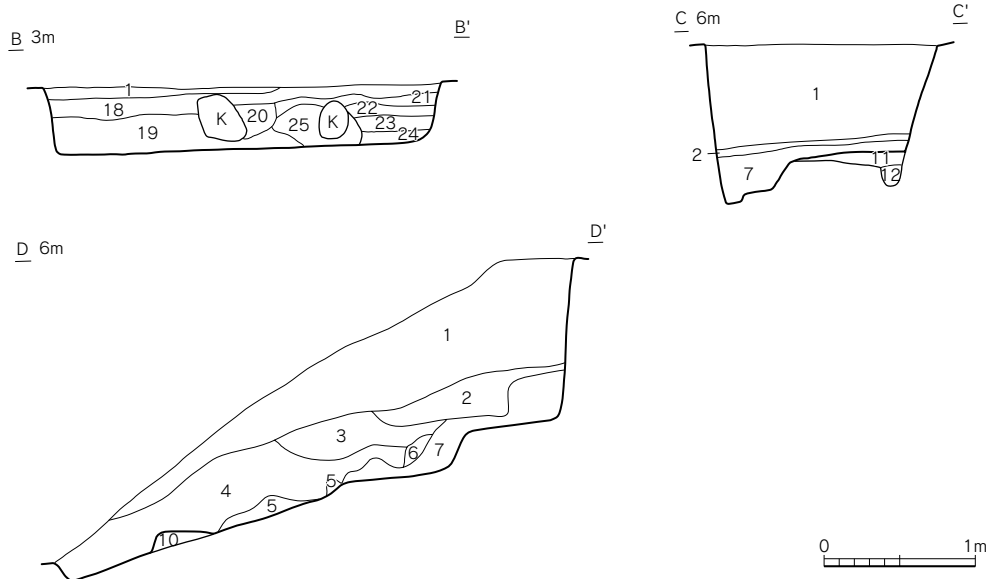
本調査区の北側、土壇裾部にあたる拡張区で石列を検出した。検出した石列は土壇の基底部に砂岩や凝灰岩などの切石を一列に並べたもので、基礎地業が存在せずただ石を並べ置いただけのものである。確認された石列は約1.2m分であるが、南東方向は埋没している可能性がある。この石列は土壇の基底部裾を掘り込んで設置され、また19層が石列の下にも存在していることから考えれば、この石列は昭和期の公園整備に伴い設置されたものと考えられる。



1. 盛土
2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 石微量、粘性普通、締まり弱い。
3. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 石・瓦含む、粘性弱い、締まり強い。
4. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 石・瓦・粘土含む、粘性弱い、締まり強い。
5. にぶい赤褐色土 (7.5YR4/3) 粘土多量、粘性弱い、締まり強い。
6. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化物少量、石含む、粘性弱い、締まり普通。
7. 暗赤褐色土 (7.5YR3/4) 炭化物中量、石含む、粘土微量、粘性・締まり弱い。
8. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 石微量、粘性・締まり弱い。
9. 褐色土 (10YR4/6) 砂主体、粘性弱い、締まり強い。
10. にぶい赤褐色土 (7.5YR4/3) 石・砂主体、粘性弱い、締まり強い。
11. 暗赤褐色土 (7.5YR3/4) 石・砂含む、粘性普通、締まり強い。
12. 暗赤褐色土 (7.5YR3/4) 石・砂含む、粘性弱い、締まり普通。
13. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化粒少量、石微量、粘性普通、締まり強い。

14. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 砂少量、粘性・締まり弱い。
15. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 炭化粒・鉄少量、粘性弱い、締まり普通。
16. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 砂・粘土少量、粘性弱い、締まり普通。
17. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 砂中量、粘性弱い、締まり極めて強い。
18. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 砂中量、粘性弱い、締まり強い。
19. 暗褐色土 (5YR3/2) 砂多量、粘性弱い、締まり強い。
20. 黒褐色土 (7.5YR3/3) 砂多量、粘性弱い、締まり強い。
21. にぶい赤褐色土 (7.5YR4/3) 砂多量、粘性弱い、締まり極めて強い。
22. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 砂中量、粘性弱い、締まり極めて強い。
23. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化粒微量、砂中量、締まり極めて強い。
24. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 石・砂中量、粘性普通、締まり極めて強い。
25. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化粒少量、砂中量、粘性弱い、締まり普通。

第24図 第4トレンチ 平面図・遺物出土状況図・土層断面図(1)



第25図 第4トレンチ 土層断面図(2)

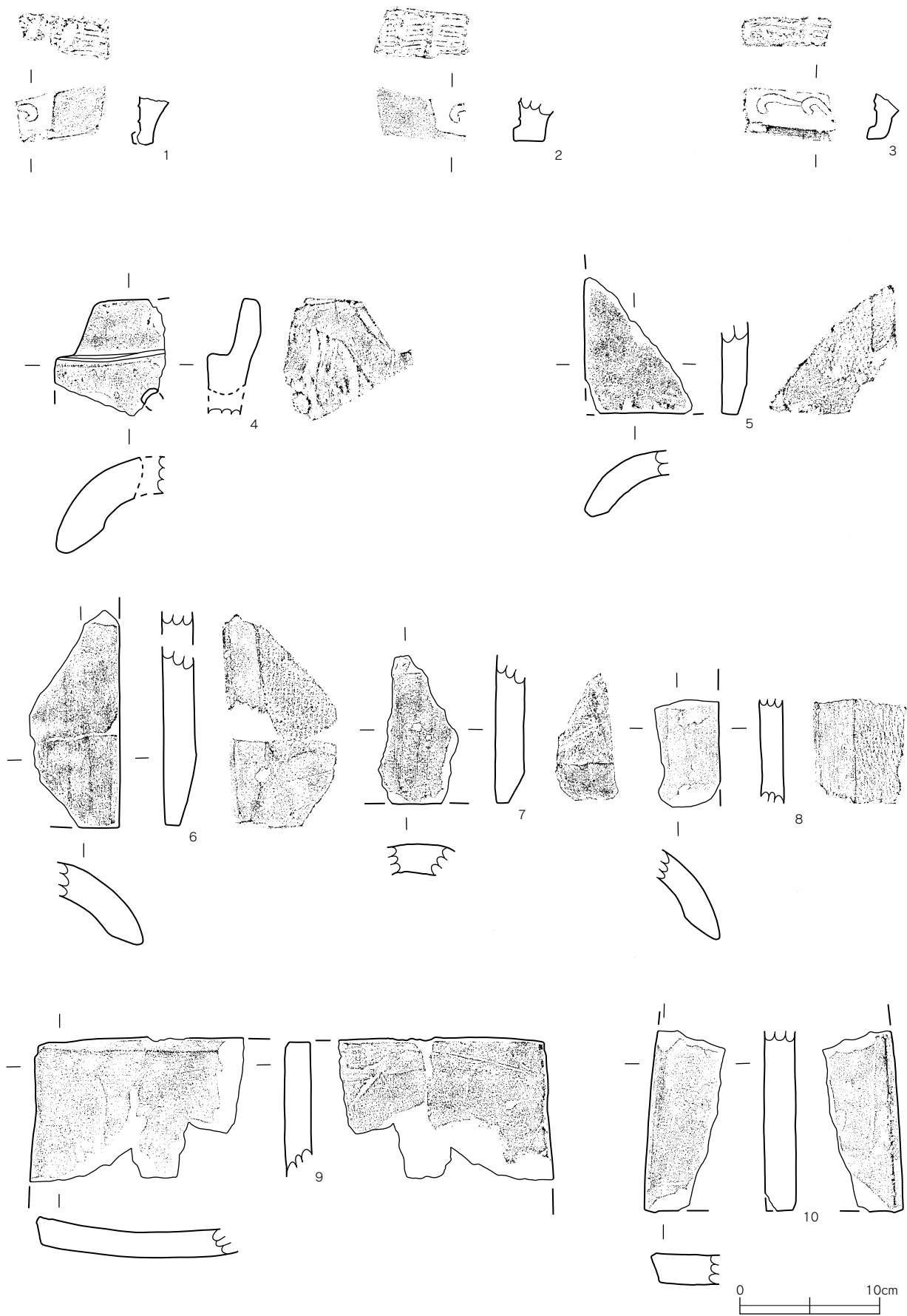
(3) 出土遺物

本トレンチからは、瓦類のほか瓦質土器、陶器、磁器、金属製品などが出土している。

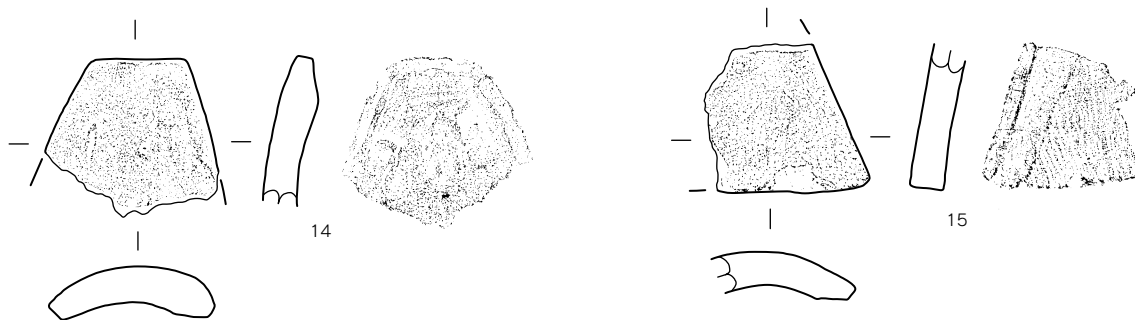
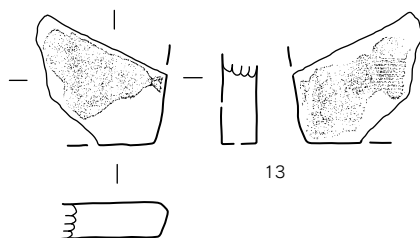
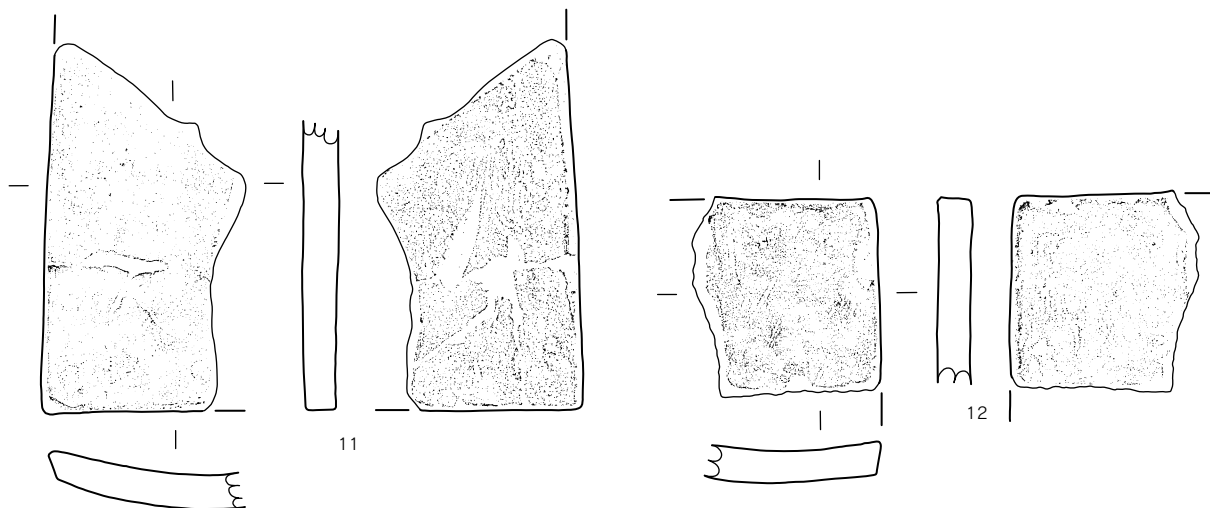
瓦類 (第26～29図、図版16～18)

本トレンチから出土した瓦類は約20.5kgである。構成は平瓦が約57%、丸瓦が約17%、板塀瓦が約20%で、東櫓と塀の中間的な様相を示している。出土層位は土壇斜面の2～9層が多いが、土壇盛土内の11層中から出土した資料もある。瓦当部は端面にキザミ目状の櫛目を入れ、瓦当部を貼り付けたものである。いずれの資料も接合関係が追えないことから、瓦は破碎されたものが調査区周辺に捨てられたものか、盛土内に混入したものと考えられる。

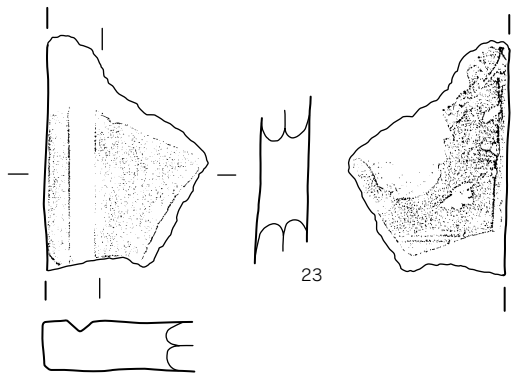
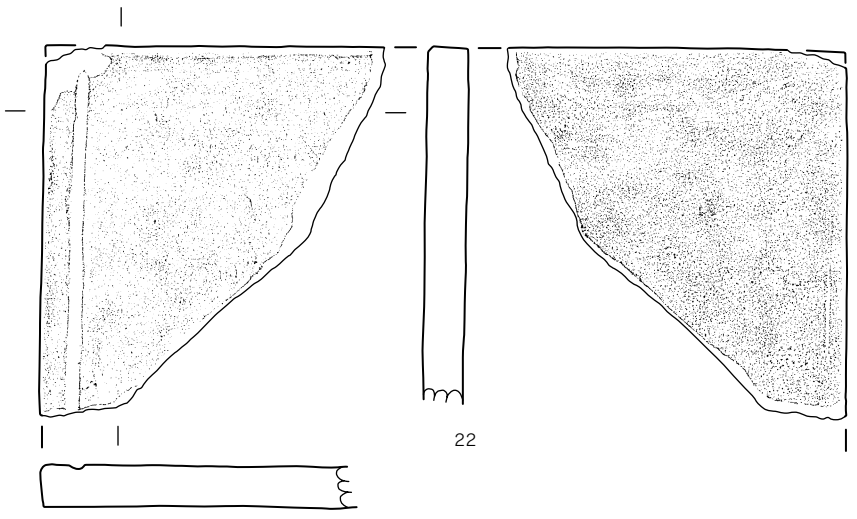
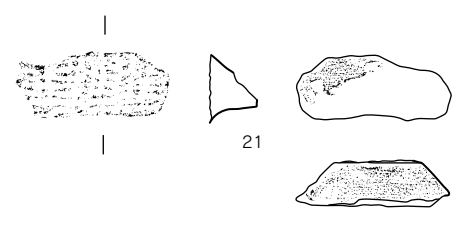
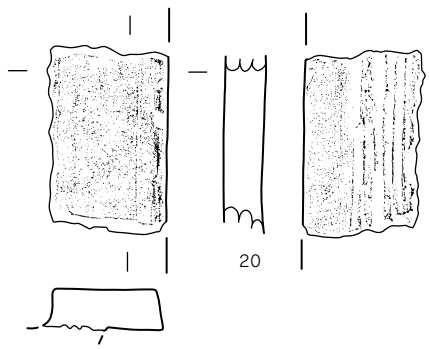
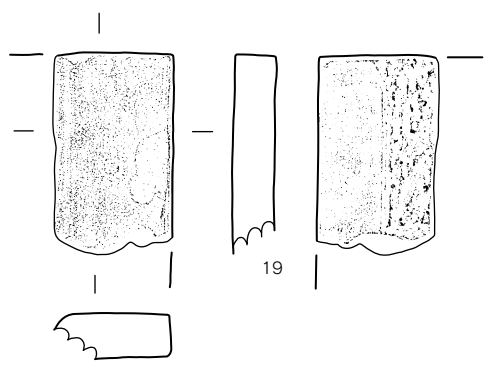
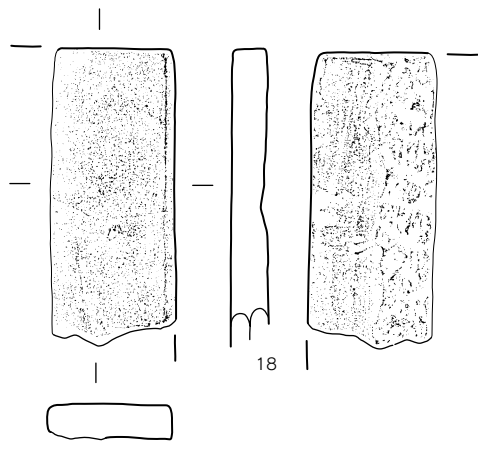
1～3は軒平瓦で、瓦当部が平瓦部から脱落したものである。瓦当部は端面にキザミ目状の櫛目を入れ、瓦当部を貼り付けたものである。いずれの瓦も細めの線で下向きの唐草を描いているが、これは「三葉文系」と呼称している土浦城独自の瓦当文様を持つ一群の瓦である。このうち2は11層から出土したもので、砂利敷面より下からの出土である点が注目される。4～8は丸瓦で、4は玉縁部周辺、5～8は筒部の破片である。筒部の端面処理については、5には1回削りで角が分かるが、6～8は丸くなだらかである。なお、本トレンチから出土する丸瓦には細片が多い。9～12は平瓦である。このうち10は内面が土師質土器のような赤褐色で、表面のみ瓦質土器のように黒色処理した瓦である。このような瓦は、少量ではあるが他の土浦城跡出土瓦にも見つけることができる。13は棧瓦で、内面には櫛状工具による11条の浅い沈線が施されている。14～17は輪違瓦である。端面は丸いものや角のあるものが存在することから、処理については丸瓦と共通する点が見られる。18～23は板塀瓦で、18～20が脱落した棧部、21は脱落した裏面の突出部、22・23は平瓦部である。18～20の棧部については平瓦部との接合痕跡などの調整や重部幅、角の形状などに相違点があり、1型式の瓦ではないことがわかる。同様に平瓦部についても、22は棒状工具による丸い水切り溝、23は刃物によるV字状の水切り溝といった相違点がある。ただし破片であり全体を窺える資料ではないため、この特徴を持つ瓦がどのように組み合わされていたのかは不明である。24・25は板塀熨斗瓦と呼称している瓦である。25の瓦は焼成があまり良くなく、内面が黒褐色の生焼け状である。26・27は不明瓦である。26はやや丸みがあり焼成は瓦と同様であるが、内外面とも調整は粗くまた内面にコビキ痕なども見られないので丸瓦ではないことが判る。鬼瓦の一部であろうか。27は平瓦にしては厚さが薄く胎土も異なるので、瓦ではなく瓦質土器の一部である可能性も想定される。



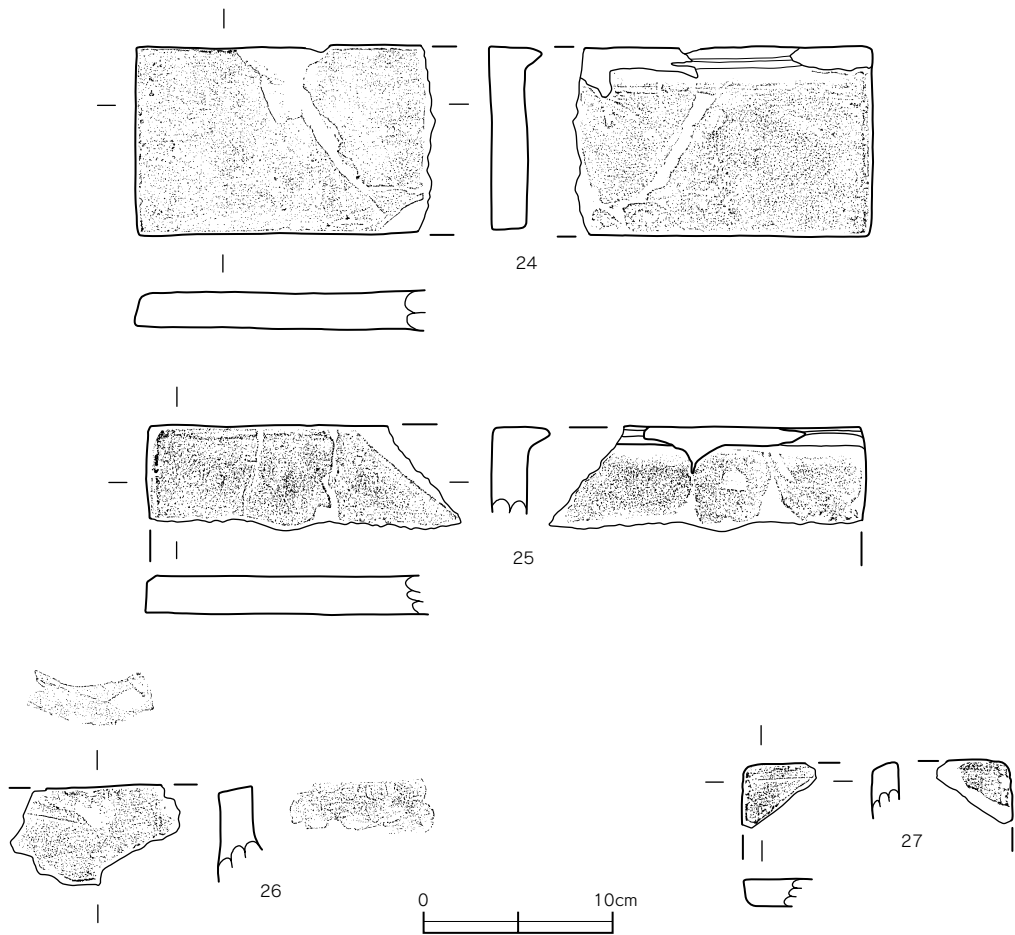
第26図 第4トレンチ 出土遺物(1)



第27図 第4トレンチ 出土遺物(2)



第28図 第4トレンチ 出土遺物(3)



第29図 第4トレンチ 出土遺物(4)

瓦質土器 (第30図28~30・33、図版18)

28~30は拡張区から出土した小型の深鉢で、火鉢であろうと想定される。内外面調整は比較的丁寧ではあるが装飾はなく、実用的なものと考えられる。33は小型の鉢である。底面には糸切り痕が残り調整はやや粗いが、香炉の可能性が想定される。

土師質土器 (第30図32・34、図版18)

32は小片ではあるが、江戸在地焙烙かと推定される。34は搗鉢で、内面に櫛状工具の櫛目が存在する。

陶器 (第30図35~37、図版18)

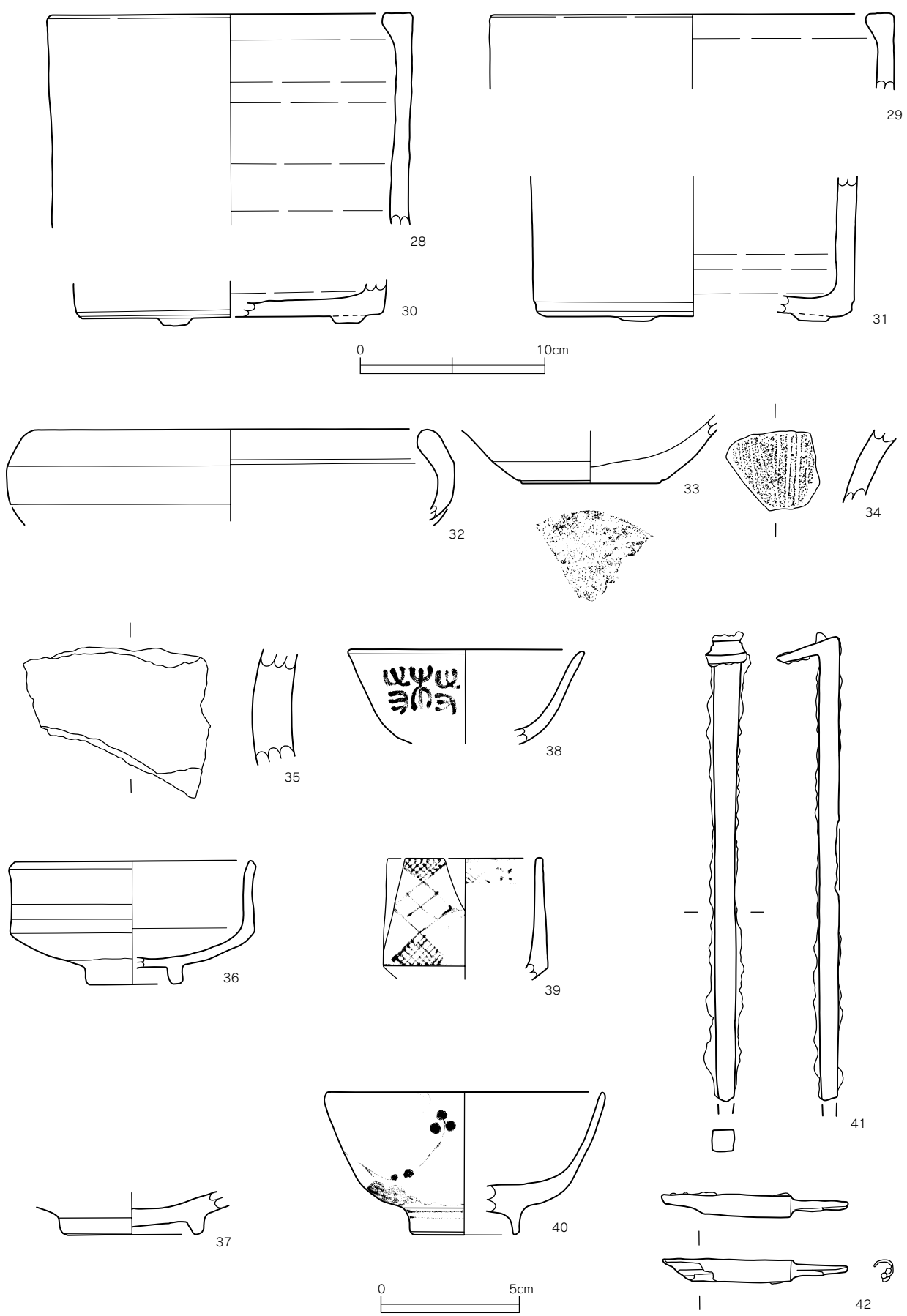
35は大型の甕類の頸部である。内外面とも茶褐色で、外面には自然釉が見られることから、常滑製と考えられる。36は箱型湯呑碗で、内面にハマの跡が残っている。37は西側ピット内から出土したもので、底部~高台部の破片であるが器形は不明である。

磁器 (第30図38~40、図版18)

38は拡張区から出土した小型の端反碗である。39は筒茶碗である。40は丸碗で、体部下半の器厚が厚いくらわんか手のものである。

金属製品 (第30図41・42、図版18)

41は土壇上部、7層から出土した大型の鉄釘(皆折釘)である。軸は四角形の断面を呈し先端を欠損している。42は筒状の銅製品で、煙管の吸口であろうか。



第30図 第4トレンチ 出土遺物(5)

5. 第5トレンチ（第31図、図版10）

第5トレンチは、第1・第2トレンチにおいて塀基礎遺構・葺石状遺構が確認できなかったことに鑑み、櫓門周辺の塀基礎遺構及び葺石状遺構の検出を目的として設定したものである。調査区の規模は長辺(北東-南西)約4.5m、短辺(東南-西北)約1mの長方形、面積約4.5m²である。

(1) 土層

本トレンチにおける土層を概説すると、まず西北壁の土層は1層が1998(平成10)年の東櫓復元整備に伴う盛土で、その下が整備工事前の地表面である。2層は昭和期の公園整備時にここに植えられていた樹木の植栽土で、中央の攪乱が根の痕跡である。次の3～6層も本来の土塁の盛土ではなく、一度土塁を削った後に再度粗く盛り直した土層で、いわば攪乱土である。この土層は土質的にも土塁の層とは類似していないので、削った土塁の土をそのまま再度盛り上げたものではなく、土塁を削った土はどこかに搬出した上で、再度この部分を盛り上げるために新しい土を搬入し盛り上げたものと考えられる。この土塁が削り取られた時期及び再度盛られた時期については史料がなく不明であるが、盛土の中に化学製品が含まれていないので現代までは下らない可能性がある。7層は遺構の覆土で、この層の下から石敷遺構の残欠が検出された。東壁の土層は3～6層の攪乱をうけた土塁壁面の土層断面であるが、この壁に見られる8～21層が本来の土塁の土層である。この土層を見ると、この部分の土塁も第1次調査で断ち割りを実施した部分の土塁と同様に、細かい単位で土が水平に積み上げられて築かれたものであることがわかる。なお、層位中に見られる小規模な攪乱は東側に存在する大きな榎の根による攪乱である。

(2) 検出遺構

塀跡《SAH》

本トレンチ中央北東寄りの覆土下より、円礫が集中する箇所が検出された。この遺構は北東側を土塁上の榎樹の根により攪乱を受けているが、直径約10cm前後の円礫が直径約40cmの範囲で平面的に存在しているものであるが、円礫の下には掘り込みなどの地業は存在しない。この石敷遺構の検出された場所は、位置的には櫓門に取り付く袖塀の延長状にあり、構造的にも2000年の調査で検出された塀基礎と考えられる石敷遺構と共通点があることから、この遺構は櫓門から東に延びていた塀の基礎地業である石敷遺構が一部残存したものではないかと推定される。

本遺構からは瓦片(第32図6)及び土師質土器(第32図8)などが出土している。

なお土塁の葺石状遺構については、前述のとおり土塁濠側が以前に大きく攪乱を受けて掘り取られていたため、本調査区においては遺構を検出することができなかった。

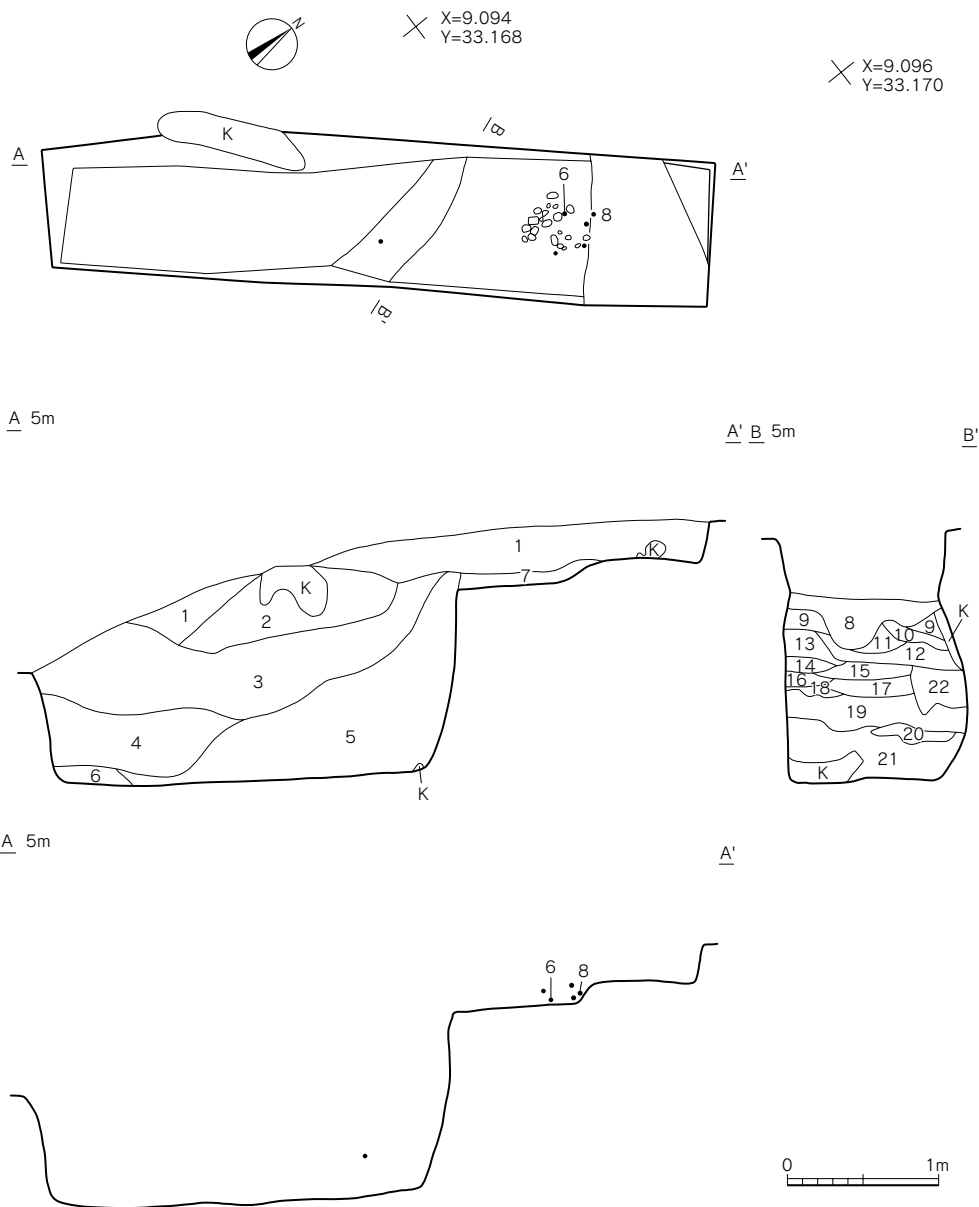
(3) 出土遺物

本トレンチからも、瓦類、土師質土器のほかガラス製品などが出土しているが、他のトレンチに比べればその量は少ない。

瓦類（第32図1～5、図版19）

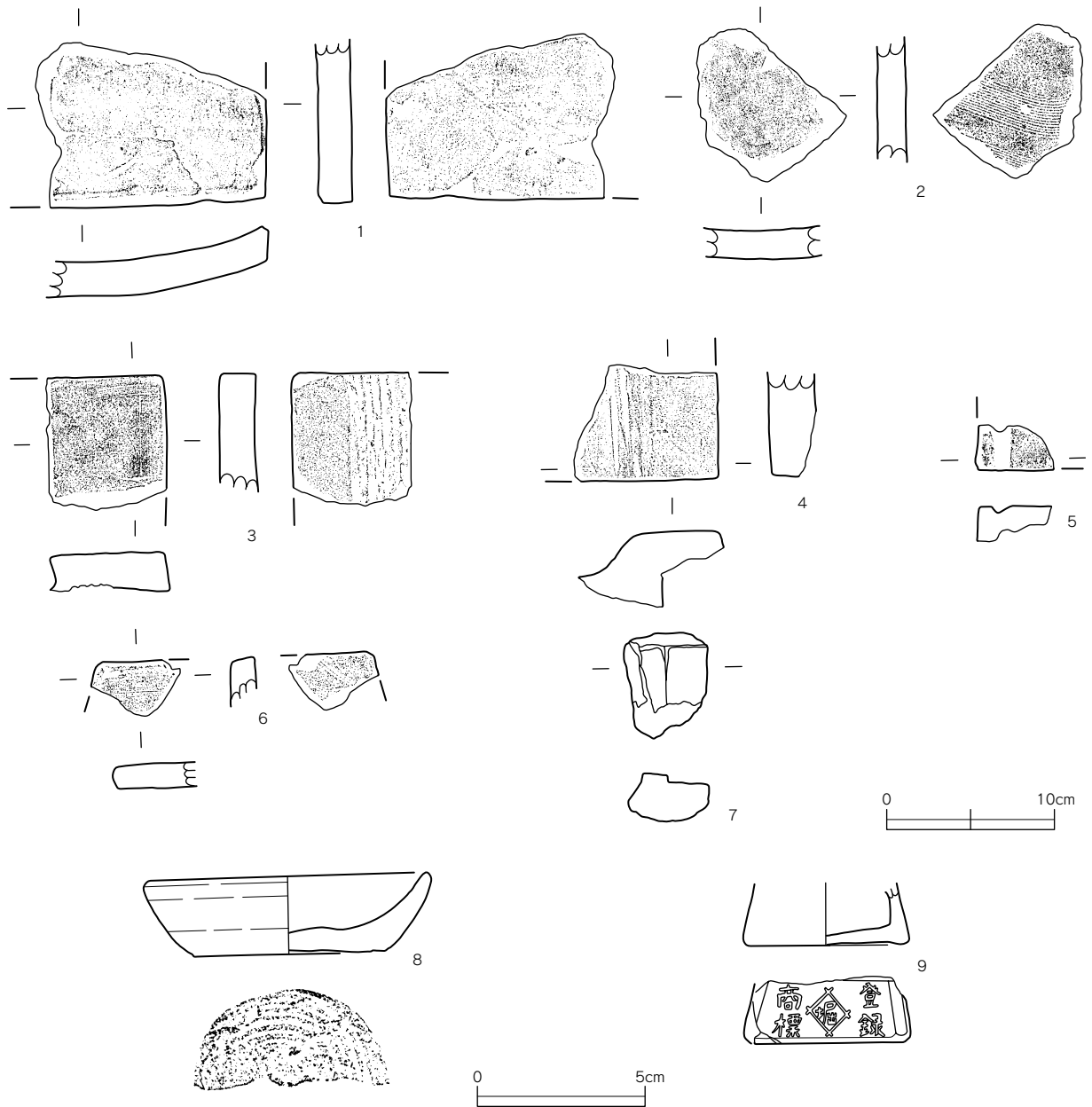
本トレンチからは合計約4kgの瓦が出土しているが、細片が多い。傾向としては平瓦が最も多く重量では全体の約66%を占め、次いで板塀瓦が約19%、丸瓦が約12%となっている。

1は濠側の攪乱層(2～6層)から出土した平瓦の一部である。端面は1回削りで処理されており比較的角張っている。2は7層から出土した棧瓦で、裏面には15条の櫛状工具による曲線的な浅い櫛目



1. 盛土
2. 暗赤褐色土 (5YR3/2) ローム粒微量、粘性弱い、締まり普通。(植栽に伴う盛土)
3. 褐色土 (10YR4/6) ロームブロックを主体とする、粘性・締まり弱い。(埋め土)
4. 褐色土 (7.5YR4/4) 砂粒含む、粘性・締まり弱い。(埋め土)
5. 褐色土 (7.5YR4/4) ローム粒極めて多量、粘性・締まり弱い。(埋め土)
6. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 土畧の遺残土、瓦含む、粘性普通・締まり弱い。
7. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 炭化物・小石微量、粘性弱い、締まり強い。
8. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 炭化粒中量、粘性弱い、締まり普通。
9. 暗褐色土 (7.5YR3/3) ローム小少量、粘性弱い、締まり普通。
10. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 炭化粒普通、粘土中量、粘性弱い、締まり普通。
11. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 鉄粒子少量、粘性・締まり弱い。
12. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘土多量、小石少量、粘性弱い、締まり普通。
13. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘土少量、小石中量、粘性弱い、締まり強い。
14. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 焼土中・炭化物少量、粘土・鉄分多量、カワラケ含む、粘性弱い、締まり強い。
15. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化物・粘土・鉄粒少量、粘性弱い、締まり普通。
16. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 炭化粒微量、ローム粒中量、鉄粒少量、粘性・締まり弱い。
17. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘土・鉄粒多量、粘性弱い、締まり普通。
18. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) ローム粒・鉄粒少量、粘性弱い、締まり普通。
19. 黒色土 (7.5YR2/1) 粘土多量、鉄粒中量、粘性・締まり普通。
20. 暗褐色土 (7.5YR3/3) ローム粒中量、鉄粒少量、粘性弱い、締まり強い。
21. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 炭化粒・ローム粒少量、粘性弱い、締まり強い。
22. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) ローム粒・粘土少量、粘性・締まり弱い。

第31図 第5トレンチ 平面図・遺物出土状況図・土層断面図



第32図 第5トレンチ 出土遺物

が施されている。3～5は板塀瓦で、3・4は棧部、5は平瓦部の角である。3の脱落した棧部は濠側の攪乱層から出土したもので、裏面の剥離した跡には鋭利な櫛状工具による接合用の櫛目が観察できる。4と5は7層から出土したもので、どちらも焼成は良くない。5にはV字状の水切り溝が残っている。

土師質土器（第32図6・8、図版19）

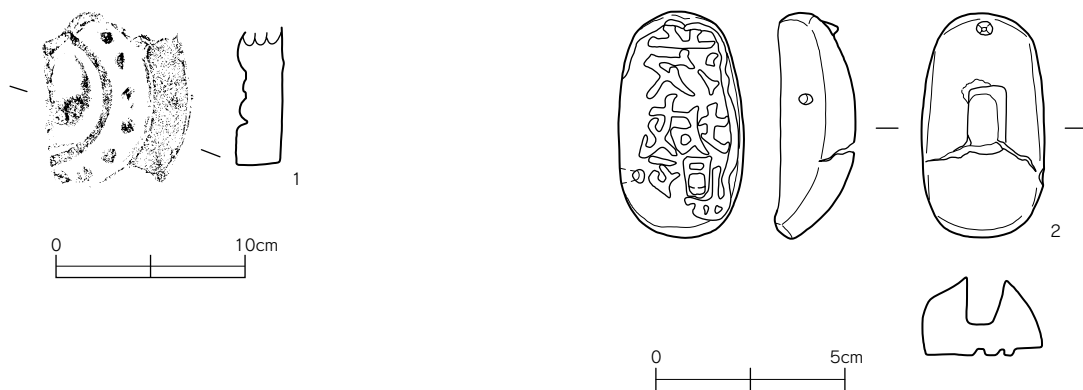
6は塀跡と思われる石敷遺構とともに出土したものである。直線的な形状は平瓦に似るが、瓦特有の黒色処理が全くみられないので土師質土器と推定した。8も石敷遺構とともに出土したかわらけである。底径が比較的大きく直線的に立ち上がる形状、赤色粒を含む胎土など、土浦城跡で多く出土する一般的なかわらけとは異なるもので、第1次調査時に葺石状遺構から出土した個体と共通点がある。

その他の遺物（第32図7・9、図版19）

7は7層から出土した漆喰の塊である。漆喰に瓦の小片が喰いこみ、板状のもの(瓦か?)の圧痕が残されていることから、瓦と瓦の間の充填に使われていたものと考えられる。9も7層から出土したガラス製品で、瓶の破片と考えられる。斜めになった側面に『登録商標』と菱形に『堀』の文字が見える。

6. 表採資料（第33図、図版19）

1は今回の調査中に西櫓南側の通路部分で採集した軒丸瓦である。右巻き巴文で尾は短め、太めの圈線など全体的な特徴は第1・第3トレンチ出土の軒丸瓦に非常に似るが、巴の形状が異なるので同汎ではない。土浦城ではこのような共通の特徴を持つ瓦が、東櫓の他にも使われていたことが判る。2は2003年12月に本丸内の北側土塁そばで採集された銅製品である。下面に逆字で『茨城縣』の文字があることから印鑑であることは間違いない。背面には印の上を示す角状の突出部と長方形の穴があり、穴には軸が差し込まれていたものと考えられるが、その穴の角からひび割れが起こったため印全体が湾曲している。この印は金属製であることから焼印として使われたものとも考えられるが、焼印は鉄製であることが多いため断定はできない。ちなみに本丸は1871(明治4)年に土浦藩から土浦県、新治県庁となり、1875(明治8)年に茨城県土浦支庁、1878(明治11)年に新治郡役所となっているため、もし茨城県の印だとすれば、使用した時期は1875年から1878年に限定されることになる。ただし移転前の自治会館には県税務出張所・農産物検査出張所・木炭検査支所などの茨城県の機関が収容されていた(『亀城会会報』4)ので、こちらで使用されていた印であれば昭和7年の移転前まで使用された印の可能性もある。



第33図 表採資料

第4表 土浦城跡第3次調査各調査区出土瓦の傾向

[角数は90°の角に限る 重量単位はkg]

調査区名	平瓦		丸瓦		板塀瓦		板塀鬘斗瓦		その他の瓦(重量)
	角数	重量	角数	重量	角数	重量	角数	重量	
第1トレンチ	3	3.27	4	2.32	11	5.31			軒丸0.46、不明0.3
第2トレンチ	12	6.63	6	3.45	11	4.66	6	0.8	輪違い3.02、不明0.35
第3トレンチ	48	23.7	16	8.92	4	2.99			軒平0.18、軒丸27.08、輪違い0.3、不明1.05
第4トレンチ	21	11.6	9	3.38	5	4.17	3	0.66	軒平0.18、軒丸0.05、輪違い0.3、棧瓦0.07、不明0.15
第5トレンチ	3	2.64	2	0.5	5	0.75			棧瓦0.1

軒丸瓦

(単位：mm・g)

挿図	出土地点	筒長	筒幅	筒高	瓦高	重量	直径	内区径	巴長(°)	外区幅	珠数(個)	珠径	文様区径	周縁幅	周縁高	玉縁長	玉縁幅	内面調整	色調	焼成	胎土	残存率	観察所見
第10図1	1トレ	364	147	147	24	(343.5)	(104)	(62)	130	17	6	9	(84)	20	4				外：暗灰色N3/0内：灰色N6/0	良	長石○石英○雲母△	20	
第18図1	3トレ				20	2800	145	72	120	17	16	10	105	20	5	25	90	コビキB+薬状圧痕	外：暗灰色N3/0内：灰白色5Y7/1	良	長石○石英○雲母○	100	キラ粉あり、釘穴2ヶ所あり
第18図2	3トレ1層				26	(358)	(83)	(35)		20	6	12	(53)	27	7				外：灰色7.5Y4/1内：灰色N6/0	並	長石○石英○雲母△	35	
第18図3	3トレ				21	(197)	(53)	(10)		16	5	10	(32)	20	6				外：灰色N4/0内：灰色N6/0	良	長石△石英○雲母○	15	
第33図1	西ヤグズ脇、表採				24	(206)	(72)	(26)		16	6	11	(50)	22	7				外：暗灰色N3/0内：灰色N6/0	並	長石○石英○雲母○	15	

軒平瓦

挿図	出土地点	右長	瓦厚	重量	上弧幅	弧深	下弧幅	高さ	文様区幅(縦)	文様区幅(横)	外区幅(上)	外区幅(下)	脇区幅(左)	脇区幅(右)	周縁高	頸高	頸上幅	頸下幅	色調	焼成	胎土	観察所見
第18図4	3トレ 1層			(48)			(44)	(30)	(18)	(5)		9		44	3	(20)	(25)	15	外：灰色7.5Y5/1 内：灰色7.5Y6/1	良	長石×石英△雲母△	
第26図1	4トレ南側サプトレ			(65)			(66)	(33)	(24)	(23)		(10)		34	6	(30)	(22)	12	外：灰色5Y4/1 内：にぶい黄褐色10YR7/3	並	長石○石英○雲母○	
第26図2	4トレ11層			(78)			(64)	(42)	(24)	(22)		9	40		5	(15)	22	27	外：オリーブ黒色5Y3/1 内：灰白色5Y7/1	良	長石○石英○	キラ粉あり
第26図3	4トレ 1層			(45)			(64)	(32)	(22)	(65)		9			5	(21)	23	14	外：灰色7.5Y4/1 内：灰黄色2.5Y7/2	並	長石○石英△雲母○	

丸瓦

挿図	出土地点	筒長	筒幅	筒高	筒厚	重量	玉縁長	玉縁幅	内面調整	色調	焼成	胎土	観察所見
第13図1	2トレ	261	140	58	33	1207	21	90	コビキB(鉄線引き)+粗い布目、棒状圧痕	外：黒色2.5GY2/1 内：灰白色N7/0	良	長石○石英○雲母○	キラ粉あり
第18図5	3トレ	(74)	(101)	(44)	17	(262)	26	(59)	細かい布目、棒状圧痕	外：灰色N4/0 内：にぶい黄褐色10YR7/3	並	長石○石英○雲母△	
第19図6	3トレ	(250)	(88)	(57)	23	(463)			コビキB、棒状圧痕	外：灰色5Y5/1 内：灰色5Y6/1	良	長石△石英○雲母△	
第19図7	3トレ	(92)	(130)	(57)	18	(298)			コビキB+細かい布目	外：オリーブ黒色7.5Y3/1 内：灰白色2.5Y7/1	良	長石△石英△雲母△	
第19図8	3トレ	(110)	(131)	(47)	21	(410)			コビキB	外：灰色N4/0 内：灰色N6/0	並	長石○石英○雲母○	
第22図23	3トレ1層	(72)	(67)	(27)	20	(153)			細かい布目	外：灰色7.5Y4/1 内：灰白色5Y7/1	良	長石△石英×雲母△	漆喰付
第26図4	4トレ1層	(84)	(78)	(69)	27	(184)	39	(36)	細かい布目	外：灰色7.5Y5/1 内：灰白色N7/0	良	長石△石英△雲母×	キラ粉あり、釘穴1ヶ所あり
第26図5	4トレ1層	(96)	(67)	(47)	20	(122)			コビキB	外：黄灰色2.5Y6/1 内：灰黄色2.5Y7/2	並	長石△石英△雲母△	
第26図6	4トレ1層	(157)	(64)	(60)	23	(276)			コビキB+細かい布目	外：灰色N4/0 内：灰白色N7/0	良	長石△石英○雲母×	キラ粉あり
第26図7	4トレ	(116)	(35)	(22)	21	(105)			コビキB	外：灰色N4/0 内：灰白色2.5Y8/1	良	長石△石英△雲母×	
第26図8	4トレ	(58)	(74)	(59)	17	(131)			コビキB+網代	外：灰色7.5Y4/1 内：灰色7.5Y5/1	良	長石○石英○雲母○	

第5表 瓦類観察表(1)

平瓦

〔単位：mm・g〕

挿図	出土地点	左長	右長	頭長	尻長	瓦厚	重量	谷深	色調	焼成	胎土	観察所見
第10図2	1トレ1層	(206)		(118)		19	(810)	(6)	外：黄灰色2.5Y4/1 内：にぶい橙色7.5YR6/4	良	長石△ 石英○ 雲母○	
第10図3	1トレ	(163)		(113)		19	(615)	(5)	外：灰黄褐色10YR5/2 内：灰黄褐色10YR6/2	良	長石△ 石英△ 雲母×	
第10図4	1トレ		(45)			20	(408)	(3.5)	外：黄灰色2.5Y5/1 内：暗灰黄色2.5Y5/2	良	長石○ 石英△ 雲母×	キラ粉あり
第13図2	2トレ濠脚底一括	255		(105)	(183)	17	(1210)	(12)	外：灰色N4/0 内：灰色N5/0	良	長石△ 石英○ 雲母△	キラ粉あり、丸瓦の当たり裏あり
第13図3	2トレ	(51)				18	(178)	(5)	外：にぶい黄色2.5Y6/3 内：褐色10YR5/1	良	長石△ 石英△ 雲母△	キラ粉あり
第13図4	2トレ					20	(230)	(2)	外：灰色N4/0 内：灰白色7.5Y8/1	並	長石△ 石英△ 雲母△	キラ粉あり
第19図9	3トレ	(225)	(146)	(163)	(168)	21	(1880)	23	外：黄灰色2.5Y5/1 内：灰白色2.5Y7/1	良	長石△ 石英△ 雲母△	
第20図10	3トレ	(97)	(108)	235		18	(975)	26	外：灰色N4/0 内：灰色5Y6/1	良	長石△ 石英◎ 雲母×	キラ粉あり
第20図11	3トレ1層		(267)	(164)	(29)	21	(1585)	(12)	外：灰色N4/0 内：黄褐色2.5Y5/4	良	長石○ 石英○ 雲母○	
第20図12	3トレ1層	(154)	(106)		(65)	22.5	(1160)	26	外：褐灰色10YR4/1 内：にぶい褐色7.5YR6/3	並	長石○ 石英○ 雲母○	赤色砂、キラ粉あり
第21図13	3トレ	(215)			(211)	20	(1010)	(24)	外：オリーブ黒色5Y3/1 内：灰白色2.5Y8/1	良	長石○ 石英○ 雲母○	
第21図14	3トレ		(138)	(97)		20	(935)	(14)	外：灰色N4/0 内：灰色N6/0	並	長石○ 石英○ 雲母△	
第21図15	3トレ	(150)	(145)	233		20.5	(1170)	21	外：黒色2.5GY2/1 内：明オリーブ灰色2.5GY7/1	並	長石△ 石英○ 雲母○	
第22図16	3トレ1層		(160)		(136)	14	(236)	(8)	外：灰色5Y6/1 内：灰白色N7/1	並	長石○ 石英○ 雲母△	薄手、棟瓦か
第22図17	3トレ		(175)			18	(258)		外：黒褐色2.5Y3/2 内：灰黄色2.5Y6/2	良	長石△ 石英△ 雲母×	キラ粉あり
第22図18	3トレ		(82)		(125)	20	(302)	(5)	外：灰色5Y5/1 内：灰白色N7/0	並	長石○ 石英○ 雲母△	
第26図9	4トレ1層	(97)		(147)		19	(365)	(6)	外：オリーブ黒色5Y3/1 内：にぶい橙色7.5YR6/4	並	長石○ 石英○ 雲母○	
第26図10	4トレ	(128)		(33)		21	(180)		外：表にぶい橙色7.5YR6/4 内：にぶい褐色7.5YR7/3 裏：黄褐色10YR5/1	並	長石△ 石英△ 雲母△	キラ粉あり
第27図11	4トレ	(190)		(86)		19	(435)	(4)	外：黄灰色2.5Y4/1 内：灰白色N7/0	良	長石○ 石英△ 雲母○	
第27図12	4トレ南側サブトレ		(99)	(82)		17	(240)	(4)	外：灰色7.5Y4/1 内：灰色N6/0	並	長石○ 石英○ 雲母△	
第32図1	5トレ南側攪乱		(60)		(128)	20	(366)	(8)	外：褐灰色10YR5/1 内：灰黄褐色10YR5/2	良	長石○ 石英◎ 雲母◎	

第6表 瓦類観察表(2)

[単位：mm・g]

椀瓦

挿図	出土地点	右長	頭長	尻長	瓦厚	重量	谷深	色調	焼成	胎土	観察所見
第27図13	4トレ本丸側	(38)		(29)	19	(66)		外：オリープ黒色7.5Y3/1 内：灰白色2.5Y7/1	良	長石○ 石英○ 雲母○	キラ粉あり
第32図2	5トレ1層				17	(115)	(3)	外：暗灰色N3/0 内：灰色N5/0	並	長石○ 石英○ 雲母△	

輪違瓦

挿図	出土地点	全長	全幅	全高	瓦厚	重量	内面調整	色調	焼成	胎土	観察所見
第14図5	2トレ	97	142	62	21	308	網代	外：暗灰色N3/0 内：灰白色N7/0	良	長石○ 石英○ 雲母○	キラ粉あり
第14図6	2トレ	108	141	64	22	366	コビキB+網代	外：オリープ黒色7.5Y3/1 内：灰白色N7/0	良	長石△ 石英△ 雲母△	
第14図7	2トレ	107	143	65	18	305	コビキB	外：オリープ黒色5Y3/1 内：灰色5Y5/1	良	長石△ 石英× 雲母△	
第14図8	2トレ	85	132	61	20	264	コビキB+糞状圧痕	外：暗灰色N3/0 内：灰白色N7/0	良	長石△ 石英○ 雲母○	
第22図19	3トレ	114	[114]	35	21	(228)	コビキB+細かい布目	外：オリープ黒色5Y3/1 内：灰白色2.5Y7/1	良	長石△ 石英△ 雲母○	
第27図14	4トレ1層	(84)	[91]	[28]	21	(157)	コビキB+細かい布目	外：灰色N5/0 内：灰色N7/0	並	長石△ 石英○ 雲母○	
第27図15	4トレ南側サブトレ	(78)	[88]	[23]	18.5	(140)	コビキB+細かい布目	外：灰色N4/0 内：灰色7.5Y5/1	並	長石△ 石英○ 雲母△	キラ粉あり
第27図16	4トレ1層	(72)	[68]	[29]	18	(124)	コビキB	外：灰色7.5Y6/1 内：灰白色7.5Y7/1	並	長石△ 石英○ 雲母△	
第27図17	4トレ南側サブトレ	(52)	[33]	[21]	19	(74)	コビキB	外：黄灰色2.5Y5/1 内：灰色5Y6/1	並	長石△ 石英△ 雲母△	

板塀瓦

挿図	出土地点	左長	右長	頭長	尻長	瓦厚	重部幅(上)	重部幅(下)	瓦高	瓦厚	突出部幅	突出高	重量	色調	焼成	胎土	観察所見
第10図5	1トレ	(280)		(63)		25	61	45	(23)	25			(736)	外：灰色5Y4/1 内：灰黄色2.5Y6/2	良	長石○ 石英○ 雲母○	キラ粉あり
第11図6	1トレ		(160)	(80)		21	59	31	40	21			(675)	外：灰色N4/0 内：灰色N6/0	良	長石○ 石英○ 雲母○	キラ粉あり、釘穴1ヶ所あり
第11図7	1トレ	(106)			(149)	24							(608)	外：オリープ黒色5Y2/1 内：灰色N6/0	並	長石○ 石英○ 雲母○	キラ粉あり
第15図9	2トレ			(144)		22							(309)	外：暗灰色N3/0 内：明青灰色5PB7/1、青灰色5PB5/1	並	長石△ 石英○ 雲母○	キラ粉あり、黒色砂、釘穴1ヶ所あり
第15図10	2トレ		(189)	(78)		23							(465)	外：暗灰色2.5Y5/2 内：黄灰色2.5Y6/1	良	長石○ 石英× 雲母○	キラ粉あり、釘穴1ヶ所あり
第15図11	2トレ		(62)	(76)		19							(115)	外：灰色5Y4/1 内：灰黄褐色10YR5/2	良	長石△ 石英△ 雲母△	キラ粉あり、釘穴1ヶ所あり
第22図20	3トレ		(99)			29							(230)	外：灰色N4/0 内：灰白色N7/0	並	長石△ 石英△ 雲母△	キラ粉あり、釘穴1ヶ所あり
第22図21	3トレ	(99)				25.5							(336)	外：暗灰色N3/0 内：灰白色N7/0	並	長石○ 石英○ 雲母△	キラ粉あり
第28図18	4トレ1層		(145)	(61)		19	62	35	(18)	19			(311)	外：黄灰色2.5Y5/1 内：灰黄色2.5Y6/2	良	長石○ 石英○ 雲母○	
第28図19	4トレ東側サブトレ		(96)	(61)		23	61	41	(23)	23			(204)	外：灰色7.5Y5/1 内：灰白色7.5Y7/1	良	長石○ 石英○ 雲母△	キラ粉あり
第28図20	4トレ1層		(94)			21	55	29	(22)	21			(158)	外：黒褐色2.5Y3/1 内：褐灰色10YR5/1	良	長石△ 石英△ 雲母○	焼むらあり
第28図21	4トレ1層										32	22	(42)	外：灰色N4/0 内：灰色N6/0	並	長石△ 石英○ 雲母△	
第28図22	4トレ	(184)		(140)		22							(740)	外：灰色5Y4/1 内：灰色N5/0、灰白色N7/0	並	長石○ 石英○ 雲母○	

第7表 瓦類観察表(3)

[単位：mm・g]

挿図	出土地点	左長	右長	頭長	尻長	重部幅(上)	重部幅(下)	瓦高	瓦厚	突出部幅	突出高	重量	色調	焼成	胎土	観察所見
第28図23	4トレ	(118)							27			(232)	外：暗灰色N3/0 内：灰白色N7/0	良	長石○石英○雲母○	キラ粉あり
第32図3	5トレ濠側		(69)	(70)		70	35	(23)	22			(146)	外・内：灰色5Y6/1	並	長石×石英△雲母△	キラ粉あり
第32図4	5トレ1層		(64)	(82)	(82)	48	(37)	(46)	28			(168)	外・内：暗灰色N3/0	並	長石○石英○雲母○	
第32図5	5トレ1層	(26)		(47)	(47)				22			(16)	外：黒色7.5Y2/1 内：灰白色N7/0	良	長石△石英△雲母△	

板掘鬘斗瓦

挿図	出土地点	左長	右長	頭長	尻長	突出部高	突出部幅	瓦厚	重量	色調	焼成	胎土	観察所見
第15図12	2トレ	101		(105)	(97)	11	14	19	(324)	外：灰色5Y5/1 内：灰黄褐色10YR6/2	良	長石○石英△雲母△	
第15図13	2トレ		(64)	(60)		12	16	19	(103)	外：灰色5Y4/1 内：灰色5Y6/1	良	長石△石英○雲母△	キラ粉あり
第29図24	4トレ	(97)		(152)	(147)	11	11	20	(450)	外：灰色7.5Y4/1 内：灰白色7.5Y7/1	並	長石○石英○雲母△	
第29図25	4トレ東側サブトレ	(51)		(126)		12	10	20	(215)	外：暗灰色N3/0 内：暗灰色N3/0、灰白色2.5Y8/2	並	長石○石英○雲母△	

特殊瓦・不明瓦 (1)

挿図	出土地点	筒長	筒幅	筒高	筒厚	重量	玉縁長	玉縁幅	尻長	色調	焼成	胎土	観察所見
第11図8	1トレ濠側底面内				16	(113)	48	(65)		外：暗灰色N3/0 内：灰色5Y6/1	並	長石△石英△雲母○	棟瓦(冠瓦)の一部か
第29図26	4トレ1層				17	(98)	(51)	(55)		外：灰色7.5Y5/1 内：灰白色7.5Y7/1	並	長石○石英△雲母△	

特殊瓦・不明瓦 (2)

挿図	出土地点	左長	右長	頭長	尻長	瓦厚	重量	谷深	色調	焼成	胎土	観察所見
第22図22	3トレ1層				(87)	14	(48)	[4.5]	外：オリーブ黒色10Y3/1 内：灰白色10Y8/1	良	長石○石英△雲母△	キラ粉あり
第29図27	4トレ精査一括東側	(30)		(22)		14	(15)		外：暗灰色N3/0 内：にぶい黄褐色10YR5/3	並	長石○石英○雲母○	瓦か?薄手
第32図6	5トレ	(16)		(37)		15	(26)		外：灰黄褐色10YR5/2 内：にぶい黄褐色10YR6/3	良	長石○石英△雲母○	

第8表 瓦類観察表(4)

かわらけ・土師質土器・陶磁器・その他

[単位：mm]

挿図	器種	出土地点	法量			焼成	色 調・胎 土	部位	観察所見	残存率(%)
			口径	底径	器高					
第15図14	かわらけ	2トレ	[124]	(19)	良	橙色5YR6/7.6 長石△ 石英○ 雲母△ 赤色粒子△	口～体部		小片	
第23図24	かわらけ	3トレ	[74]	[36]	並	褐色7.5YR4/3 長石△ 石英○ 雲母◎	口～底部	底部糸切り	30	
第32図8	かわらけ	5トレ	[83]	58	並	橙色5YR6/6 長石○ 石英△ 雲母○ 赤色粒子△	口～底部	底部糸切り	50	
第11図9	土師質土器内耳鍋	1トレ濠側底面内	[340]	(26)	並	にぶい、橙色7.5YR6/4 長石△ 石英△ 雲母○	口縁部		小片	
第30図32	土師質土器江戸在地焙烙	4トレ南側サブトレ	[144]	(33)	並	にぶい、橙色7.5YR6/4 長石△ 石英○ 雲母○	口縁部		小片	
第30図33	土師質土器鉢	4トレ1層		50	良	灰色5Y4/1 長石△ 石英× 雲母△	底部		小片	
第30図34	土師質土器摺鉢	4トレ1層	[196]	(114)	良	にぶい、橙色7.5YR6/4 長石◎ 石英○ 雲母◎	体部	内面に3条の崩目あり	小片	
第30図28	瓦質土器火鉢	4トレ本丸	[164]	(24)	並	灰色5Y4/1 長石△ 石英△ 雲母△	口縁部		小片	
第30図29	瓦質土器火鉢	4トレ北側拡張部	[218]	(41)	良	褐色10YR4/1 長石△ 石英△ 雲母○	口縁部		小片	
第30図30	瓦質土器火鉢	4トレ本丸	[164]	(24)	良	黒褐色2.5Y3/1 長石△ 石英○ 雲母○	底部		小片	
第30図31	瓦質土器火鉢	4トレ本丸	[170]	(78)	並	灰色5Y4/1 長石△ 石英△ 雲母○	底部		小片	
第15図15	陶器小皿	2トレ			良	褐色10YR5/1 長石△ 石英× 雲母△	口縁部	裏全面釉	小片	
第23図25	陶器摺鉢	3トレ			良	にぶい、赤褐色5YR5/4 長石◎ 石英◎ 雲母○	体部	内面に8条の崩目あり	小片	
第30図35	陶器甕	4トレ			良	にぶい、赤褐色2.5YR4/4 長石△ 石英○ 雲母△	体部		小片	
第30図36	陶器碗	4トレ1層	[86]	44.5	良	灰白色7.5Y7/1 長石× 石英× 雲母×	口～底部		40	
第30図37	陶器碗	4トレ		(10)	並	明オリープ灰色2.5G7/1 長石○ 石英○ 雲母△	底部		小片	
第30図38	磁器染付茶碗	4トレ本丸	[86]	(34)	良	うすい、灰色GY8.0 長石× 石英× 雲母×	口縁部		30	
第30図39	磁器染付茶碗	4トレ	[56]	(44)	良	灰白色7.5Y8/1 長石△ 石英× 雲母×	口縁部		小片	
第30図40	磁器染付茶碗	4トレ1層	[110]	52	並	灰白色10Y7/1 長石○ 石英○ 雲母×	口～底部		40	
第32図9	ガラス瓶	5トレ1層		50	—	褐色	底部	「登録商標」[堀]	小片	

[単位：mm・g]

挿図	器種	出土地点	長さ	幅	厚さ	重量	観察所見	
							内径(縦)	内径(横)
第11図10	鉄製品	1トレ	74	6	5	8	頭巻釘、先端欠損	
第23図26	鉄製品	3トレ	89	5	6	12	頭巻釘	
第30図41	鉄製品	4トレ東側敷石下	(168)	10	8	(60)	皆折釘	
第30図42	銅製品	4トレ南側精査一括	(68)	8	—	3.4	キセルか？	

[単位：mm・g]

挿図	器種	出土地点	外径(縦)	外径(横)	内径(縦)	内径(横)	銭厚	観察所見	
								重量	裏面
第23図27	古銭	3トレ1層東側側	23	23	22	22	1.28～1.34	3.4	桐一銭青銅貨 裏面：「大日本」大正十一年

第9表 その他の遺物観察表

第6章 考察

第1節 遺構

1. 想定される塀について

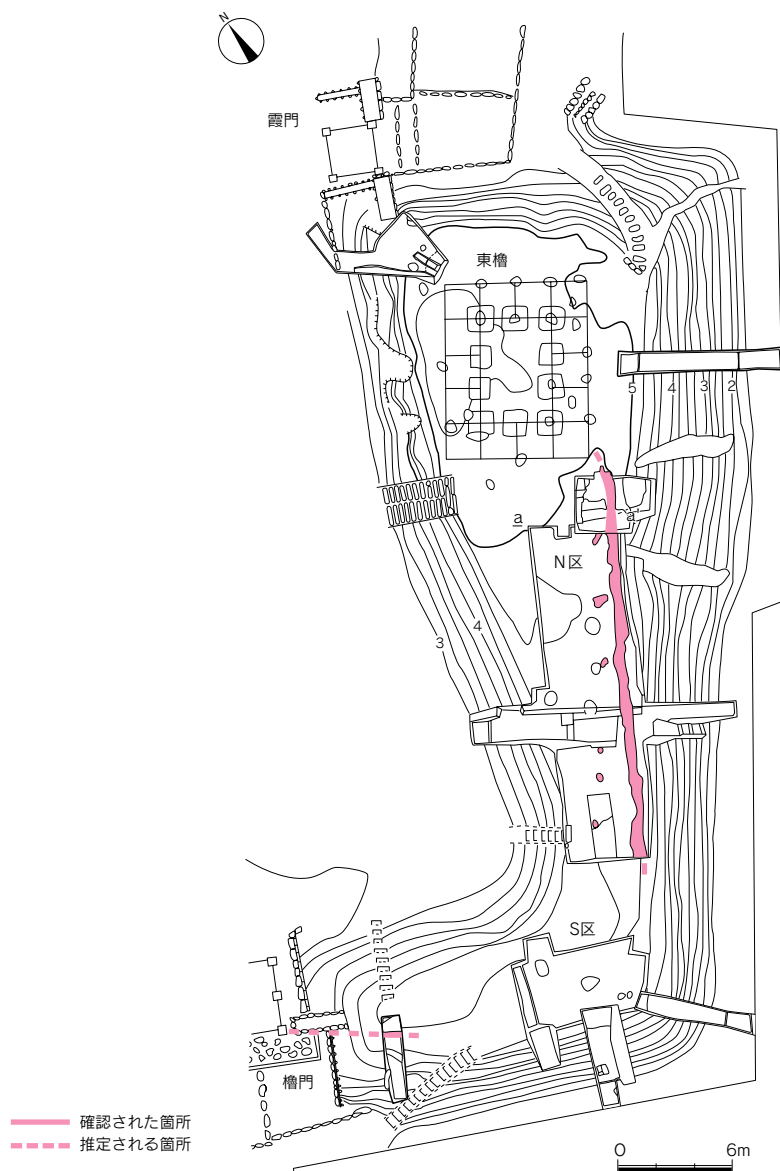
今回復元が計画されている本丸東側土塁上に設置されていた塀については、今回までの3回の発掘調査及び文献史料調査、建築学的痕跡調査により、いくつかの点についてはかなり解明が進んだが、依然不明の点も数多く残されている。ここではその点を整理してみたい。

まず塀の設置位置については、発掘調査によって塀基礎と考えられる石敷遺構の遺存が確認された結果、東櫓—櫓門間では、塀は東櫓南東角から南の土塁濠際に向かい(第2次調査区)、その後折れて土塁濠際の天場を平行に進むこと(第1次調査区)が確認され、同時にこの部分では塀の濠際には所謂犬走り空間が存在しないことが明らかとなった。また南西の櫓門脇では、塀基礎は櫓門前面南側の柱から東南に土塁と平行して延びていることが確認されている(第3次調査第5トレンチ)。このことから、塀は土塁南角周辺のどこかで設置位置が土塁の濠側天場際から土塁の中央部に変化することが予想されるが、第1次・第3次調査ともこの部分の塀基礎遺構を確認することができなかったため、土塁角部周辺のどこで塀の設置位置が変化するのは明らかではない(第34図)。また東櫓—震門間の塀についても第3次調査(第4トレンチ)では明確な塀基礎遺構は検出することはできなかった。この塀の設置位置の問題については、残念ながら文献史料には土塁上のどの位置に塀が設置されていたかを示す史料は発見されていないため、発掘調査の結果を史料の面から検討することはできない。ただし塀が直線的に表現されたものと多角表現されたものが古絵図に見られる点については、塀基礎部分が全体としては直線的で細かな折れを持つこと(第1次調査)が確認されたため、この両表現はいわばいずれも正しいものと考えられる。

次に塀の構造・寸法については、発掘調査の結果からは①塀基礎の石敷遺構の幅が約60cmであるため、塀の厚さはこれ以内である(第1・2次調査)こと、②控柱・控塀が存在するが、塀基礎部分に掘立柱は存在しない(第1次調査)こと、③塀には板塀瓦が使用されていた(第1・3次調査)ことなどが確認されている。これらのことを他の資料と整合させると、まず櫓門の柱の痕跡調査で発見された塀の木造軸組塀痕跡から、塀は土台敷きの木芯土塀と神戸信俊氏は推定しているが、この点については発掘資料とも矛盾はない。ただし長島家文書『御城内外御定法書』(註1)と関家所蔵『秘公満律』(註2)に記された東櫓—櫓門間の塀の「石落し」については、東櫓南側の一部が控塀構造になっていること(第1次調査)からこの遺構が石落しと関係する可能性も考えられるが、この石落しがどのような構造であったのかは確定できていない。また屋根構造については神戸氏が痕跡調査と出土した板塀瓦から構造や寸法を推定し、丸瓦を棟瓦として使用する屋根瓦葺きを推定しているが、第1次調査南区や第3次調査第1・2トレンチなどでは板塀瓦や丸瓦のほかに平瓦も多めに出土しており、この平瓦の使用方法についてはまだ今ひとつ明確ではない。また、控柱については柱痕内から漆喰で覆われた角柱の痕跡が発見された(第1次調査)ことから、控柱は漆喰が塗られたうで埋め込まれていたと推定したが、神戸氏からはこの方法では控柱が湿気をもつため腐朽が早くなるとの指摘を受けているなどの問題が残されている。なお、塀の高さについては『御城内外御定法書』に「太鼓御門・・・塀

高七尺」「御東やくら台・・・塀七尺五寸」「同石落之辺・・・塀七尺」などの記載があり、痕跡調査でも櫓門のこし屋根裏甲に塀の棟木に対応すると考えられる切り欠きが存在するなどの資料が提示されているが、発掘資料では塀の高さについて直接的に結びつけられる資料は確認できなかった。

これらの点を総合すると、土浦城の本丸土塁上に建てられていた塀は、厚さ約1尺高さ約七尺の木芯土塀で、屋根に板塀瓦が使用されていたなどの概略的な点についてはほぼ確定できたと考えられるが、南東角部を中心とした土塁上の設置位置、石落しや大筒狭間などの塀の構造や意匠、屋根瓦の使用方法などにはまだ検討しなければいけない点が残されている。



第34図 推定される塀の位置

2. 「葺石」について

土塁上の塀については古絵図などの史料があったため、曲りなりにも発掘調査前から存在が予想されていたが、葺石状遺構については発掘調査で確認されるまでまったく記録がなかったものである。この葺石状遺構は第1次調査で土塁の濠側斜面上部で発見されたのをはじめに、第2次調査区の櫓台濠側斜面と第3次調査の第3トレンチ上部でも発見されたことから、この遺構は土塁に偶然形成されたものではなく、土塁にある意図をもって施工したものであることは間違いない。ただし、これらの発見された葺石状遺構についてはいくつかの異なる点もあることから、現在までの調査成果をもとに葺石状遺構について整理したい。

(1) 検出状況から見た「葺石」

葺石状遺構は、現在までに(A)第1次調査区の土塁濠側斜面の上部(B)第2次調査区の櫓台濠側斜面天場付近(C)第3次調査第3トレンチ上部の3箇所において検出されている。これらの発見された葺石状遺構に共通する点として、①円礫を斜面に貼り付けたもので、裏込め構造は存在しない②土塁(櫓台)の上部で発見され、中段以下では発見されていないことなどの特徴が存在する。これらを総合してみると、葺石状遺構は表面的な施設であり土塁・櫓台の土木的構造に影響を与えるとは考え難く、土塁・櫓台の表面を被覆(化粧)することを目的に施工されたものであると考えられる。ただし土塁下半部および土壇部分では発見されていないことを考慮すれば、あくまでも被覆の対象は土塁上半部及び櫓台で、土塁や土壇全体を被覆する意図ではなかったものと想定される。また第1次調査区の本丸側や第3次調査区第4トレンチなどでは検出されていないことを併せて考えれば、葺石状遺構は土塁・櫓台の内側についても被覆する意図はなかったものと考えられる。

(2) 「葺石」の違い

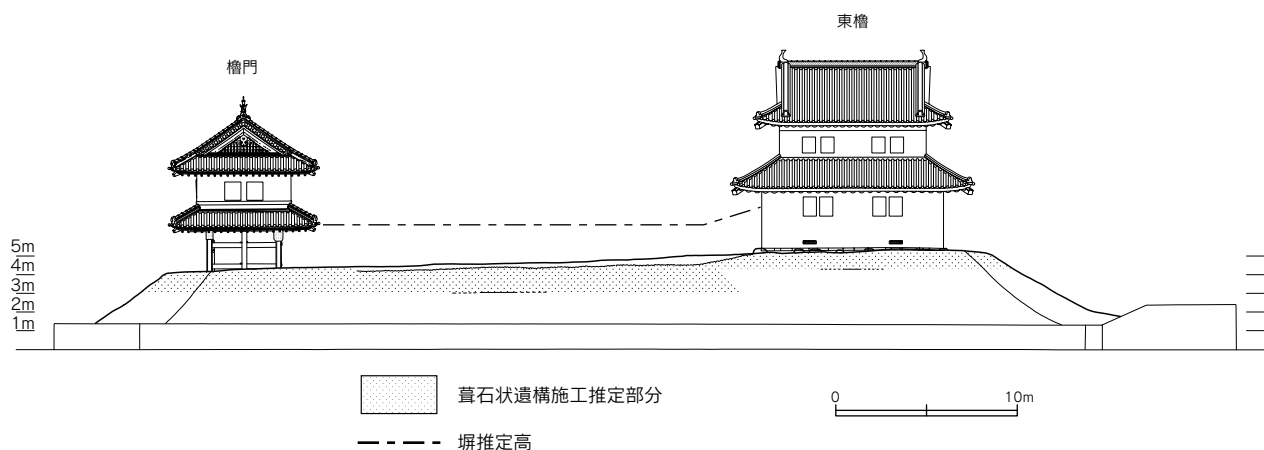
検出された葺石状遺構のうち、使用されていた円礫の大きさと施工されていた部分の標高・延長などについては検出された場所によって差異があることが確認されている。まず使用されていた円礫については、(A)の第1次調査区の土塁濠側斜面のものよりも(C)の第3次調査第3トレンチ上部で使用されている方がやや大きいものを使用されており、また葺石の遺存状況についても(A)よりも(C)のほうが良好であった。次に葺石状遺構が検出された部分については、(A)は土塁天場の標高約4mから約2.5mまでの斜面長約2m分なのに対し、(C)は櫓台天場の標高約5mから約4mまでの斜面長約1.5m分で検出されている。これらのことから見れば、葺石状遺構は全て同じように施工されたものではないと思われ、特に施工範囲(標高)については大きな差が存在している。この施工範囲の問題については、土塁・土壇を側面からみた場合の葺石範囲に大きく違いがあることがわかるため、偶然のものとは考え難い。土塁・土壇に葺石を行う目的は同じであっても、場所によって施工計画が異なっていたのであろう。

(3) 「葺石」存在の意義

最後に以上のような事象を総合的に考えながら、葺石状遺構が設置された意義について考えてみたい。まず実用性から見た葺石状遺構存在の意義であるが、葺石状遺構は土塁や櫓台の強度・構造に関係した構築物ではないと考えられる上、検出された場所の上には塀や東櫓があることから考えると、葺石状遺構とこれらの建築物の間には何らかの関係が存在したと考えられる。検出された位置を良く見るといずれも塀や東櫓の屋根の先端に近いことから、屋根からの雨落ちなどによって櫓台や土塁の

表面流失を防ぐために設置されたものである(註1)ことが考えられる。ただしその実用性を重視したものであれば東櫓や土塁の本丸側にも施工すべきものであるが、こちら側には確認できないことを考えれば、設置については実用的な面よりも意匠的な面を強く意識したものであると考えられる。

そこで次に景観的に見た葺石状遺構の存在意義であるが、まずこの葺石状遺構が存在することによって土塁・櫓台がどのような景観を呈するか考えてみたい。現在このような葺石を見ることのできる例としては復元された古墳の葺石があるが、葺石の古墳を見ると盛土の古墳よりも威圧感があり、同じ土で築かれたものには見えない。このことから考えれば、葺石状遺構が存在することによって土塁ではなく石造りの城の景観に似せ、石垣の上に堀や東櫓を建てたように見せようとした可能性が考えられる。ただし古墳築造の技術を江戸時代に生かしたとは到底考えられないので、葺石の発想は庭園に見られる州浜との関連から生み出されたものではないかと思われる。ただし、この土塁と櫓台の葺石状遺構に見られた差異はなぜ生じたのであろうか。この点を考えるヒントとして櫓台の葺石状遺構の最低検出高と土塁の葺石状遺構の最高検出高が同じ約4mになっている点が注目される。この検出された高さをもとにして土塁・土壇に葺石状遺構が存在したと仮定すると、東櫓下櫓台の葺石状遺構は土塁に施工された葺石状遺構とはつながらず、土塁の葺石状遺構よりは1段高い状態に連なるのではないかと思われる(第35図)。このことを考えれば、土塁の葺石状遺構は堀と一体となったものとして計画されたものに対し、櫓台の葺石状遺構は土塁の葺石状遺構とは別に、櫓台を強調するために土塁よりも一段高い位置で東櫓と一体となったものとして計画したものではないか考えることができる。また、もし同様に南側(櫓門側)にも葺石状遺構が施工されていたのであれば、葺石状遺構の検出標高約2.5mは櫓門礎石上面のレベルとも概ね一致する高さであるため、櫓門とそれに繋がる堀も石垣を伴うもののように見えるように企画されたものである可能性も考えられる。これらの点については第2次調査区の濠側斜面の大半が未調査であることと、第3次調査でも土塁南側の葺石が確認できなかったため想像の域を出ないが、いずれにしても現在の土塁と東櫓土壇(櫓台)周辺の景観は、葺石状遺構が機能していた時期とはかなり違いがあった可能性が高い。このような土塁の葺石状遺構は全国的にも検出された事例が知られておらず、もちろん復元整備された事例もない。今後の土浦城跡の復元にあたってはこの葺石状遺構をどのように考え、どのように取り扱うか充分注意する必要がある。



第35図 推定される葺石状遺構と建造物の関係

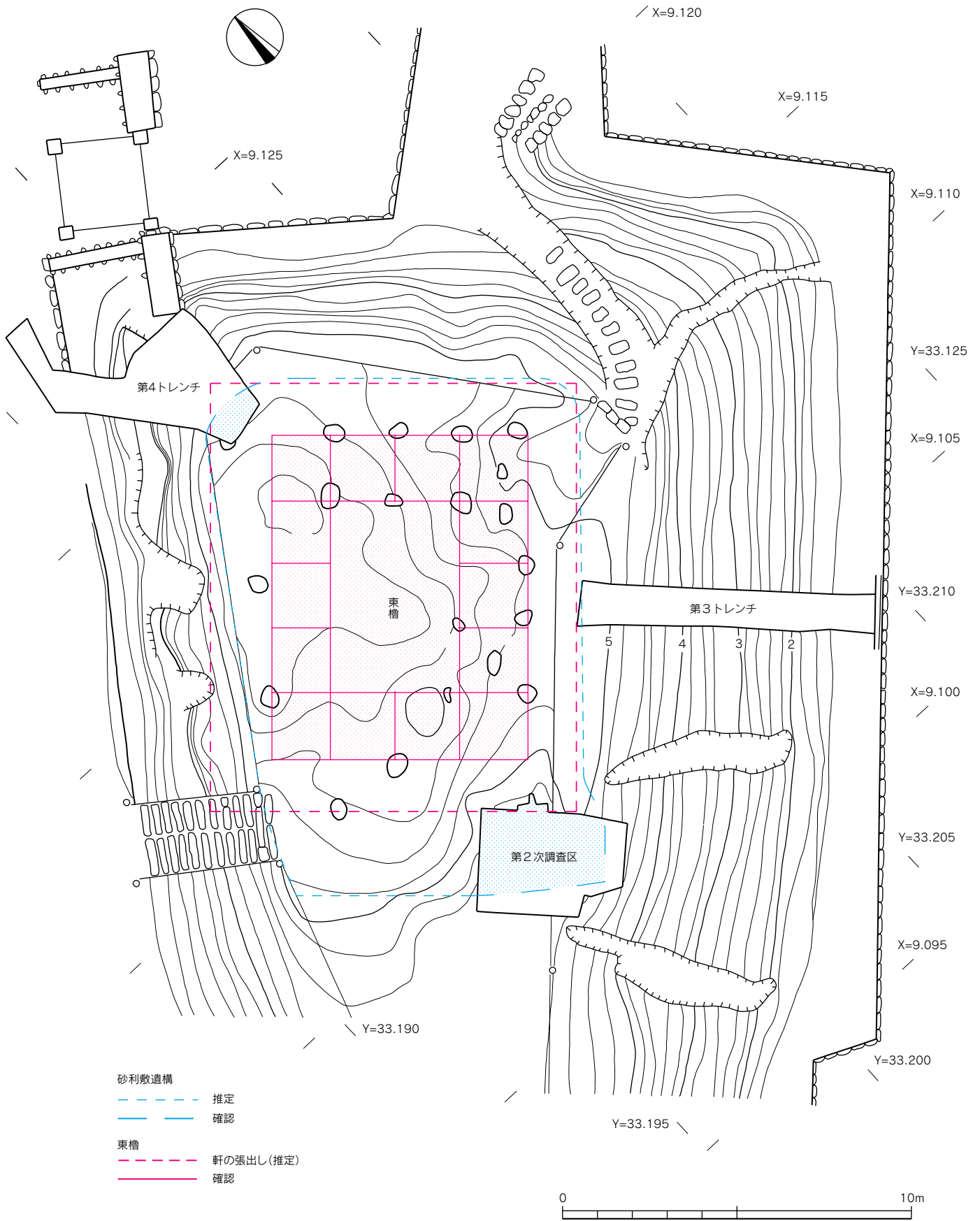
3. 砂利敷面について

第1次調査では確認されず、今回(第2次・第3次)の調査ではじめて確認されたものに、東櫓周囲の平坦部に小円礫を敷き詰めた砂利敷面がある。この遺構は第2次調査区と第3次調査の第4トレンチにおいて確認されたもので、葺石状遺構で使用されたものよりも小さい直径約5cm以下の円礫を平坦部に敷き詰めたものである。なお第3トレンチにおいても東櫓脇にあたる葺石状遺構の西側端はやや傾斜が緩く石が小型化しているので、そのまま砂利敷面に繋がる可能性が推測される。また第2次調査区の調査結果からは、砂利敷面は塀基礎と考えられる石敷遺構によって掘り込まれていることがわかった。

この検出された砂利敷面は、第1次調査区の土塁天場では確認されず、検出範囲が東櫓の櫓台平坦部に限定されていることから考えれば、東櫓に伴って施工された遺構であると考えられる。また砂利敷面と石敷遺構の先後関係についても、文献史料から東櫓の建築年代(元和6：1620)は塀を瓦葺きに改めた年代(寛文4：1664)よりも古いことが分かるため、確認された遺構の先後関係とは齟齬をきたさないことが判った。

ところでこの砂利敷面はどのような性格の遺構であろうか。建物に付随する施設で砂利を平面的に敷き詰めたものとしては、建物の周囲に設けられる雨落ちがある。雨落ちと今回の砂利敷を比較すると、施工方法や使用された砂利など類似点が多く見られることから、砂利敷面も東櫓の雨落ちとして施工されたものである可能性が想定された。そこで、今回検出された砂利敷面の範囲を、復元前の東櫓(礎石)の位置を基準として、その上に1998年に復元した東櫓、特に屋根の張り出しの範囲を同じ図に重ねてみると、北側や東側では比較的良く整合すること判った(第36図)。このことから、今回検出された砂利敷面も東櫓の雨落ちとして施工されたものであると考えられる。

ただし、この図を作成してみて改めて奇妙に感じられる点も存在する。まず1点目としては、東櫓南側の第2次調査で検出された砂利敷面は東櫓の想定雨落ち位置よりもかなり南に広がっていることである。上記のように雨落ち位置が屋根の張り出し位置と整合するのであれば、東櫓は南側のみ屋根が伸びていたことになるが、古写真に残された東櫓にはそのような形跡はない。であるとすれば、南側のみ何の理由で砂利敷面を拡張している理由は何だったのであろうか。1つの可能性として、東櫓の入口は現在復元された西側ではなくあるいは南側に開口していたため、入り口付近の足元の水はけを良くするために南側の砂利敷を施工していた可能性も想像できるかも知れない。次の疑問点としては、東櫓と櫓台の関係を見ると櫓台南西側にはほとんど余裕がなく、砂利敷はおろか建物周囲の平坦部でさえほとんど存在しないことである。この場合もし図のように東櫓の屋根が存在していたとすれば、この部分の雨落ちは土塁の傾斜部に直接落ちることから土塁を洗掘してしまうことが予想され、土塁の遺存はもちろん、東櫓の基礎にも悪影響を与える可能性が考えられる。本丸東側の土塁については江戸時代の旧状を保っていたと考えているが、あるいは近代頃に南西角部は削られていたのかもしれない。



第36図 砂利敷遺構と東櫓の関係

第2節 遺物

1. 軒丸瓦について

軒丸瓦については1988年刊行の『土浦城址内櫓門保存修理工事報告書』において、解体前の櫓門に使用されていた軒丸瓦について報告を行っている。今回は2002年報告資料及び今回調査時出土資料を加え土浦城跡の軒丸瓦について考えてみたい。

(1) 土浦城跡において確認されている軒丸瓦

①櫓門使用瓦（第37図）

1986・87(昭和61・62)年に解体修理が行われた、土浦城本丸の櫓門に使用されていた軒丸瓦である。櫓門の創建年代は不明であるが、1656(明暦2)年に櫓門に改められたと史料にある。また1808(文化5)年の修理伺いなどが残されているほか、解体修理時には享保19(1734)年銘の祈禱棟札や文政11(1828)年銘の修理裏甲が発見されている。また1954(昭和29)年にも解体修理が行われている。

この修理中に確認された軒丸瓦は全て連珠巴文の瓦で合計24種類あり、調査に参加した東憲章氏は珠文数・巴の向き・圏線の有無をもとに大きく11種類に分類している。

②土浦城跡出土瓦（第38図）

イ. 東櫓出土瓦（第38図-1）

今回の発掘調査で出土した瓦である。東櫓は江戸時代前期の1620(元和6)年に建てられたと伝えられている櫓で、1707(宝永4)・1718(享保3)・1766(明和3)年に修復の記録がある。1884(明治17)年火災により焼失。

ロ. 本丸土塁出土瓦（第38図-2）

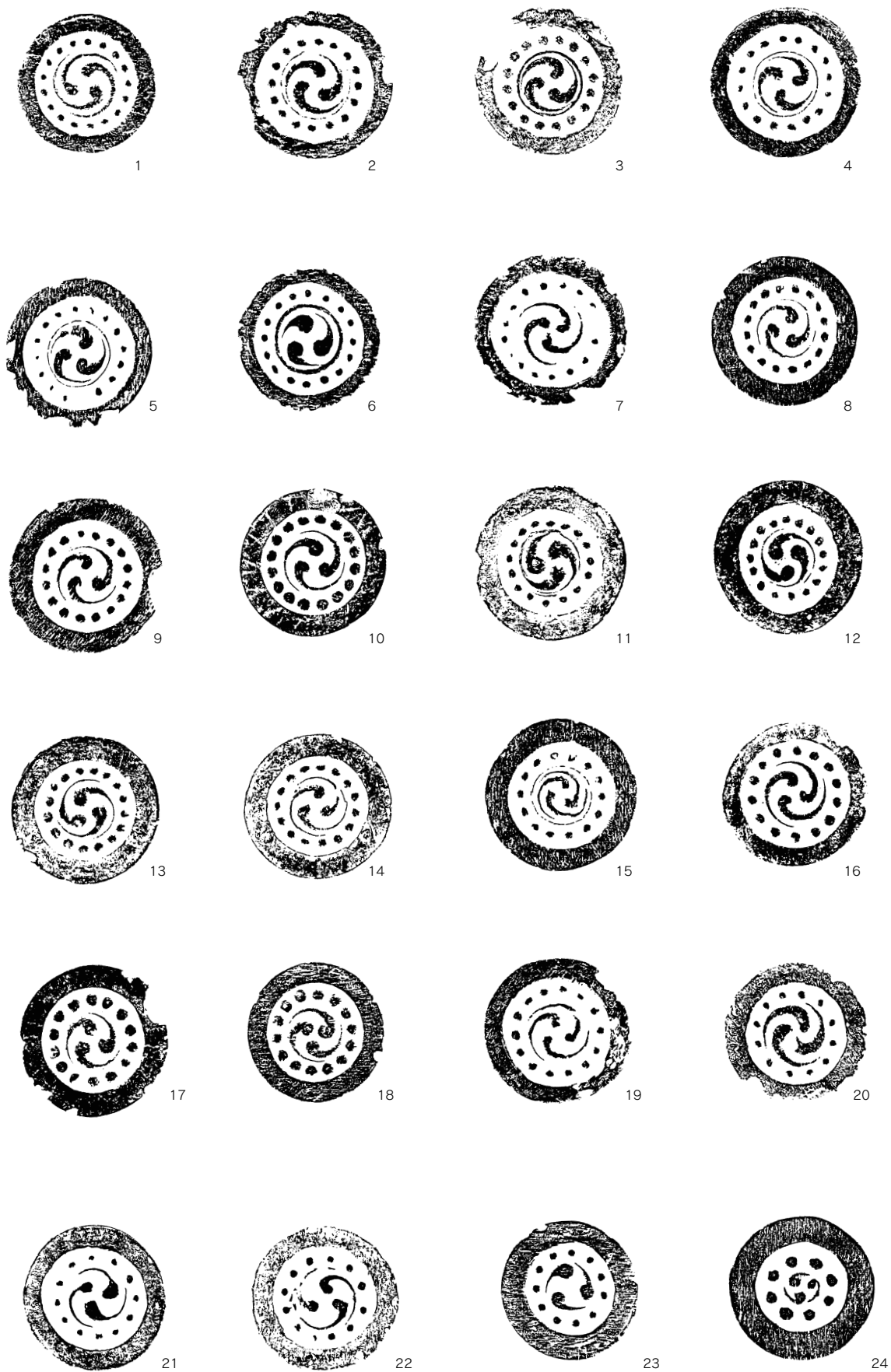
2000年の発掘調査で出土した瓦で、出土場所から見て東櫓か鐘楼に使用されていた瓦と思われる。鐘楼は東櫓と同じく1620(元和6)年に建てられたと伝えられている建物で、明治初期の古写真に東櫓とともに写っていることから塀よりも後まで存在していたことが判る。1883(明治16)年3月に鐘が市内大手町の等覚寺に払い下げられた記録があるので、解体されたとすればこの頃であろう。

ハ. 二ノ丸出土瓦（第38図-3・4）

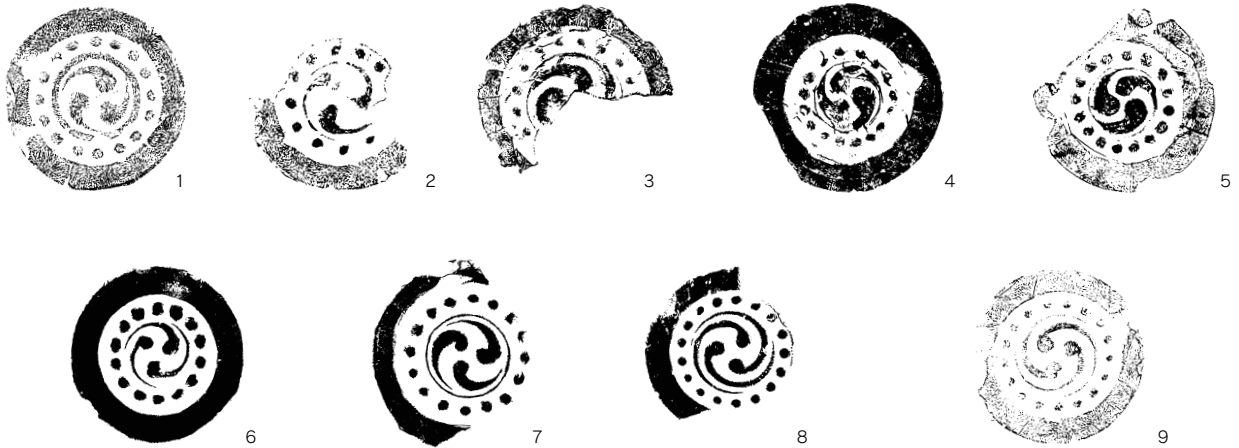
1998・99年の電線埋設工事に伴い出土した瓦である。二ノ丸の仕切門で使用された瓦であろうか。仕切門は現在の公園内の小高くなった築山状の部分の下にあった門である。門は1603(慶長8)年に建てられたと伝えられ、関家『秘公満律』には「3間ニ8尺5寸 梁門口9尺 高さ冠木迄9尺」と門の規模が記されている。門は1873(明治6)年の絵図には表現されているが、まもなく撤去されたと思われる写真などは残されていない。また二ノ丸の瓦葺き建物としては米蔵(糯蔵)もあるが、場所が出土位置からやや遠いことや、長島家文書『御城内外御定法書』に米蔵は1781(天明元)年に棧瓦葺きになったことが記されているため、軒丸瓦を使用する量は少ないと考えられる。

ニ. 西櫓出土瓦（第38図-5）

1999年の電線埋設工事に伴い出土した瓦である。西櫓は東櫓と同じく1620(元和6)年に建てられたと伝えられている櫓で、1718(享保3)年・1810(文化7)年などに修理の記録がある。1950(昭和25)年に解体。



第37図 槽門使用軒丸瓦 (S = 1 / 6)



第38図 土浦城跡出土軒丸瓦 (S = 1 / 6)

ホ. 外丸出土瓦 (第38図-6~9)

1993年及び2001年の外丸御殿の発掘調査によって出土した瓦である。外丸御殿は一説には1684(貞享元)年につくられたといわれているが、定かではない。1816(文化13)年の火災で焼失したのがその後再築されたようで、1863(文久3)年には大改装されたときの図面や棟札が残されている。1872(明治5)年新治郡裁判所庁舎として使用されたが、1905(明治38)年に焼失した。

この他にも1985(昭和60)年に行われた本丸・二ノ丸の発掘調査などでも軒丸瓦が出土している。

(2) 土浦城跡瓦の分類

これらの瓦を、櫓門の瓦を分類した時と同じく珠文数(8~17)・巴の向き(左・右)・圏線の有無を基準に分類してみると、第10表のとおり12種類に分類することができる。出土瓦は概ね櫓門使用瓦と同じ区分で大別することができるが、外丸出土資料の(6)の珠文17個巴左巻きの資料は櫓門にはなかったため、櫓門分類時より1種類増加した。出土瓦の分類については6がA類、9がB類、1・7はC類、3はD類、4・5はE類、8がH類、2がI類に属すると考えられる。この出土瓦うちいくつかについては櫓門使用瓦と共通する特徴があり、同汎の可能性もあるがとりあえず今回は同文異汎として扱った。なお、提示した西櫓出土資料はE類であるが、本報文中の2003年表採資料はC類である。また1985年調査時の二ノ丸出土資料中にはL類と考えられる資料が確認できる。

(3) 軒丸瓦の傾向

① 珠文数

現在確認されている珠文数は8・11・12・14~17個であるが、このうち8・11個の資料は焼成などから見て現代の補修瓦であると見られる。確認されている種文数の中では16個の個体が最も多く、櫓門使用瓦のうち50%(12/24)、出土瓦のうち約56%(5/9)が珠文16個である。次に多いのは珠文14個で、櫓門使用瓦の約21%(5/24)を占める。

② 巴の向き

全体として左巻きが多く、櫓門使用瓦のうち75%(18/24)、出土瓦も約67%(6/9)が左向きである。

③ 圏線の有無

圏線は巴文の長く延びた尾が変化した図柄と考えられている。櫓門使用瓦のうち25%(6/24)、出土瓦の22%(2/9)に圏線が認められる。特に櫓門使用瓦のうち珠文16個左巻きでは約56%

第10表 土浦城跡使用・出土軒丸瓦一覧表

名称	図番号	出土地	珠文数	方向	圏線	巴長(°)	備考
A	第38図-8	1993 外丸	17	左	なし	265	
B-1	第37図-1	1987 櫓門使用	17	右	なし	220	
B-2	第38図-9	2001 外丸Ⅱ	17	右	なし	240	
C-1	第37図-2	1987 櫓門使用	16	左	あり	163	
C-2	第37図-3	1987 櫓門使用	16	左	あり	163	
C-3	第37図-4	1987 櫓門使用	16	左	あり	137	
C-4	第37図-5	1987 櫓門使用	16	左	あり	142	
C-5	第37図-6	1987 櫓門使用	16	左	あり	120	
C-6	第38図-2	2003 東櫓東	16	左	あり	138	(1884年以前)
C-7	第38図-7	1993 外丸	16	左	あり	150	
D-1	第37図-7	1987 櫓門使用	16	左	なし	177	
D-2	第37図-8	1987 櫓門使用	16	左	なし	190	
D-3	第37図-9	1987 櫓門使用	16	左	なし	172	
D-4	第37図-10	1987 櫓門使用	16	左	なし	185	
D-5	第38図-3	1998 二ノ丸	16	左	なし	160	珠文数は推定値
E-1	第37図-11	1987 櫓門使用	16	右	なし	163	
E-2	第37図-12	1987 櫓門使用	16	右	なし	213	
E-3	第37図-13	1987 櫓門使用	16	右	なし	208	
E-4	第38図-5	1999 西櫓南	16	右	なし	210	
E-5	第38図-4	1999 二ノ丸	16	右	なし	188	
F	第37図-14	1987 櫓門使用	15	左	なし	215	
G	第37図-15	1987 櫓門使用	14	左	あり	215	
H-1	第37図-16	1987 櫓門使用	14	左	なし	180	
H-2	第37図-17	1987 櫓門使用	14	左	なし	160	
H-3	第37図-18	1987 櫓門使用	14	左	なし	172	
H-4	第37図-19	1987 櫓門使用	14	左	なし	175	
H-5	第38図-6	1993 外丸	14	左	なし	182	
I-1	第37図-20	1987 櫓門使用	12	左	なし	185	
I-2	第37図-21	1987 櫓門使用	12	左	なし	158	
I-3	第38図-2	2000 東側土塁	12	左	なし	165	珠文数は推定値
J	第37図-22	1987 櫓門使用	12	右	なし	173	
K	第37図-23	1987 櫓門使用	11	左	なし	110	
L	第37図-24	1987 櫓門使用	8	右	なし	103	

(5/9)に圏線があり、また第3次調査出土資料にも全て圏線が認められる。ただし第2次調査時の資料では全て圏線が存在しない。

④巴の角度

巴は渦巻きが図象化されたものともいわれ、新しくなるに従い頭の肥大化と短尾化が進む傾向があるといわれている。今回軒丸瓦の瓦当文様の中心を求め、その点を基準として巴の頭の先端から尻尾の先端までの角度を計測したものを巴長として比較を実施した(計測数値は3つの巴の平均値・計測方法は凡例図を参照)。これをみると、櫓門使用瓦及び出土瓦ともに、巴の角度は概ね(イ)200度以上(ロ)180度前後〔190~170度〕(ハ)150度前後〔160~140度〕(ニ)100度前後に分布傾向があるように見える。これらの中では(ロ)に全体の3割(11/33)が集中し、(ハ)及び周囲に約36%(12/33)が分布している。

(4) 土浦城跡の軒丸瓦を考える

上記の特徴をもとに、土浦城跡の軒丸瓦について考えてみたい。その中でも特に注意したいのが巴の角度とその他の関係である。上記④の特徴のとおり、巴の角度にはばらつきはあるものの大きく4段階の分類が可能である。そこで巴の角度をもとに表を並べ替えてみると第11表のようになる。この表を見ると

- ①A・B類は全て(イ)200度以上に分布している。
- ②C類は概ね(ハ)150度前後[160～140度]に分布している。
- ③D類は(ロ)180度前後[190～170度]・(ハ)150度前後[160～140度]に渡って広く分布している。
- ④E類の分布の中心は(イ)200度以上である。
- ④F類・G類も(イ)200度以上に分布している。
- ⑤H類・I類は(ロ)180度前後[190～170度]・(ハ)150度前後[160～140度]に渡って広く分布している。
- ⑥(ニ)100度前後に分布しているのはK・L類のみである。
- ⑦右巻きの大半は(イ)200度以上及びその周辺に分布している。

などのことがわかった。まず、このうち各類によって巴の角度毎の分布状況が異なるのではないかと考えられる点について、C・D・E・H・I類の巴の角度の平均を計算してみると、C類が144.7度、D類が176.8度、E類が196.4度、H類が173.9度、I類が169.3度となった。このことから見ても、非常に大まかに言えば巴の角度はE類→D類→C類の順に短いということが確認できる。ここで、最も短い(ニ)に分布しているK・L類の両者がいずれも製作技法からみて現代瓦であると考えられることから見て、もし巴の角度は年代が新しくなるに従い角度が短い傾向に遷移したものであれば、同様に年代についてもE類→D類→C類に新しくなる可能性も想定される。なお右巻き巴の大半が(イ)に分布することについても、同様の傾向で考えられるのであれば、右巻きから左巻きに移行していったと考えることもできる。

(5) 土浦城跡軒丸瓦の年代

軒丸瓦については軒平瓦と比べて特徴が少なく、そのため編年研究も軒平瓦よりも遅れている。特に近世の軒丸瓦については明らかになっている点が非常に少ない。今回、土浦城跡の軒丸瓦についてE類→D類→C類の遷移が想定されたことをもとにして、これらの瓦の年代を考えてみると、まず、K・L類については現代瓦であると考えられることから、この2種類は近世瓦からは除外できる。次にその他の瓦について考えてみると、非常に実年代を考える資料に乏しいが、唯一第3次調査の第3トレンチ出土の瓦については、出土状況より1884(明治17)年の東櫓焼失以前の瓦であると考えられることができるため、この点をもとにすればC-6類については明治前期以前と考えられる。同様に、類似傾向のあるC類の年代も大まかにこの辺に設定することが可能かと考えられ、D類、E類の順に古くなるのではないかと考えられる。ただし、これらの実年代については土浦城に瓦が使用される17世紀以降であることは間違いないと思われるが、現状ではこれ以上の年代を明らかにできない。

(6) 今後の課題

今回の分類は非常に大まかなものであり、まだまだ検討の余地が多い。特に巴の形状や瓦の調整技法については、本来検討を進めなければ編年研究の資料とすることはできない。これらの点については今後の課題としたい。

第11表 土浦城跡使用・出土軒丸瓦の傾向

名称	珠文数	方向	圈線	巴角(°)	領域	備考
A	17	左	なし	265	E	
B-2	17	右	なし	240		
B-1	17	右	なし	220		
F	15	左	なし	215		
G	14	左	あり	215		
E-2	16	右	なし	213		
E-4	16	右	なし	210		
E-3	16	右	なし	208		
D-2	16	左	なし	190		
E-5	16	右	なし	188		
D-4	16	左	なし	185		
I-1	12	左	なし	185		
H-5	14	左	なし	182		
H-1	14	左	なし	180		
D-1	16	左	なし	177		
H-4	14	左	なし	175		
J	12	右	なし	173		
D-3	16	左	なし	172	H	
H-3	14	左	なし	172		
I-3	12	左	なし	165		
C-1	16	左	あり	163		
C-2	16	左	あり	163		
E-1	16	右	なし	163		
D-5	16	左	なし	160		
H-2	14	左	なし	160		
I-2	12	左	なし	158		
C-7	16	左	あり	150		
C-4	16	左	あり	142		
C-6	16	左	あり	138		
C-3	16	左	あり	137		
C-5	16	左	あり	120		
K	11	左	なし	110		
L	8	右	なし	103		

2. 軒平瓦について

土浦城跡の軒平瓦については、1988年刊行の『土浦城址櫓門保存修理報告書』において櫓門使用瓦が報告され、1989年の『土浦城址発掘調査報告書』において分類・検討が行われている。また1999年に生産・流通の概略を発表しているが、近年の出土資料を交えて改めて土浦城跡の軒平瓦についても整理してみたい。

(1) 土浦城跡において確認されている軒丸瓦

①櫓門使用瓦（第39図）

1986・87年の櫓門修理時に確認された瓦である。『土浦城址櫓門保存修理報告書』において東憲章氏が軒平瓦11種類、軒棧瓦3種類(平瓦の代用として使用)の合計14種類に分類したものをもとに、加藤晃氏が『土浦城址発掘調査報告書』において検討を行い、6種類の江戸式瓦(1～8)と3種類の江戸式類似瓦(9～11)、2種類の土浦城跡独自瓦(13・14)〔1999年発表時に「三葉文系」と呼称〕に分類している。また使用瓦に『前澤』銘瓦が(4)、櫓門発掘調査時出土瓦に『柴安』銘瓦が確認されている。

②土浦城跡出土瓦（第40図）

イ. 東櫓出土瓦

2003年の発掘調査では、第4トレンチより櫓門で確認されている三葉文系の軒平瓦の破片が出土している。(詳細は本文第5章参照)また1998年の工事立会い時にも三葉文系の瓦が出土している。

ロ. 本丸土塁出土瓦（第40図－1）

2000年の発掘調査で出土した瓦である。出土場所からみて東櫓か鐘楼に使用されていた瓦と思われる。この他に三葉文系の瓦も確認されている。

ハ. 外丸出土瓦（第40図－2～6）

1993年及び2001年の外丸御殿の発掘調査で出土した瓦である。全体出土量は棧瓦が多く、これらの資料の中にも軒平瓦だけでなく、軒棧瓦が混入していると考えられる。また『柴安』銘瓦が確認されている(6)。

ニ. 本丸出土瓦（第40図－7・8）

1985年の本丸発掘調査で出土した瓦である。軒平瓦のほか滴水(垂面)瓦(7)も確認されている。

ホ. 二ノ丸出土瓦（第40図－9）

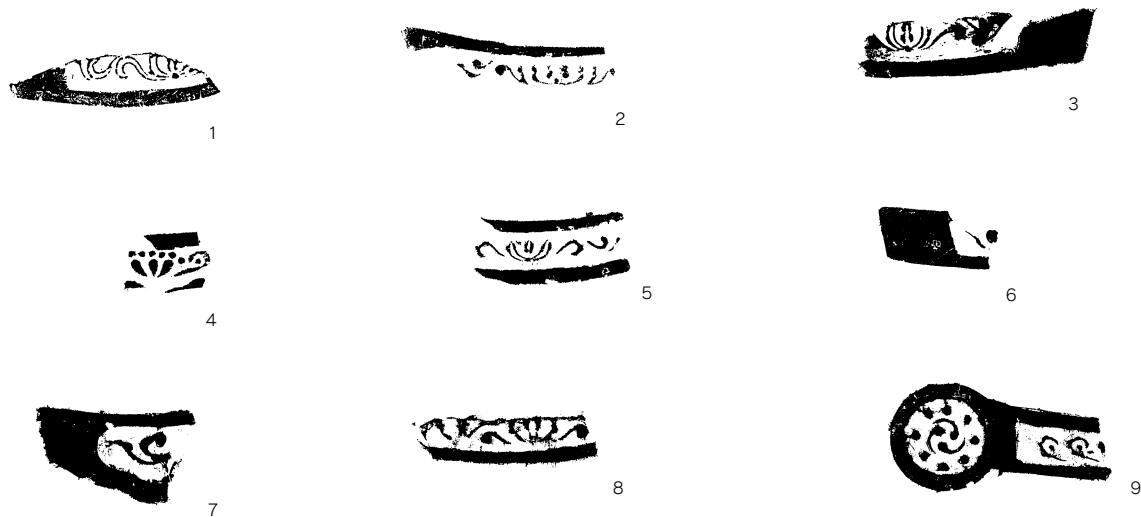
1985年の現土浦市立博物館建設に伴う調査で出土したもので、報告されたものは全て軒棧瓦である。

(2) 軒平瓦の傾向

1989年に加藤氏が江戸式及び江戸類似式と土浦独自式に大別している。それ以後の出土瓦などを見ると東海式の瓦沓の特徴を持つもの(第39図12・第40図4)が確認できるため、現在発表されている資料からは江戸式・江戸類似式・土浦独自式・東海式の4種類が確認されていることになる。ただし確認されている瓦には近代以降の瓦(第39図10)も含まれている。また未発表資料ではあるが、1987年に解体修理が行われた藩校郁文館の正門では江戸式・大坂式折衷の瓦沓に類似した資料も確認されている(註2)。



第39圖 櫓門使用軒平瓦 (S=1/5)



第40図 土浦城跡出土軒平瓦 (S=1/5)

(3) 土浦城跡の軒平瓦の特徴

土浦城は第2章の歴史的環境にも記したとおり中世からの城ではあるが、建物などの城内施設は江戸時代に整備されたものと考えられるため、これらの瓦が近世以降の瓦であることは間違いない。加藤氏及び金子智氏による江戸遺跡から出土した近世瓦研究の結果、17世紀後半以降の江戸出土瓦の変遷は概ね明らかになっていることから、それらの資料と土浦城の瓦を対比してみたい。

①土浦独自瓦の位置付け

中心飾りに3枚の葉状のものを配し、左右の下向き唐草を二重線で描く土浦城跡独自形式を三葉文系と呼称している。この文様形態は江戸式には見られないものではあるが、文様を二重線で描く手法は江戸式の初源期のものと共通点がある。山崎信二氏が2003年に纏めた「近世瓦の技法と編年」を見ると、中心飾りに三葉を用いる形式の瓦は16世紀末から17世紀前半に見られることから、土浦城跡の三葉文系の瓦は江戸式瓦が広範囲に展開する以前に製作された瓦で、いわば土浦城の創建瓦ではないかと考えられる。

またこの形式の瓦について2002年に胎土分析を行った(註3)ところ、胎土に土浦周辺の地質には確認されていない結晶片岩が含まれていることから、瓦の製作地は土浦城近隣ではなく、遠隔地からの搬入品であった可能性が指摘されている。ただし同様の瓦汎を持つものは現在のところ土浦城以外では確認されていないため、製作地は不明である(註4)。

②江戸式瓦と江戸類似式瓦

加藤氏は1989年に櫓門使用瓦のうち江戸式と判断した資料について、幕末から明治期のものと位置付けている。その後に発見された資料を見ると、外丸出土資料(第40図5)には18世紀中葉頃、本丸土塁出土資料(第40図1)にも17世紀後半頃の江戸式に該当する資料を確認することができる。このことから、土浦城では幕末だけではなく17世紀後半頃には瓦が江戸式瓦の生産地より搬入され、使用されていたものと考えられる。このことは前述の三葉文系の瓦が地元生産品ではなく搬入品の可能性が考えられることとも併せれば、土浦城では、瓦需用の出現期から継続して搬入瓦が使われていたことを示すものと考えられる。これらの瓦の生産地を考える手がかりとして『柴安』銘瓦(註5)があり、葛飾など江戸近郊地域が想定される。

次に江戸類似式と分類した資料のうち近代瓦を除いたものについては、全体的な構成は江戸式瓦に似ることから、江戸式瓦の影響を受けた地元製作の瓦である可能性が想定される。また江戸式瓦と分類した資料の中にも地元の瓦商である『前澤』の銘をもつものもあることから、土浦近郊でも江戸式瓦が生産されていたことが判る。なお、在地の瓦生産地としては、現在までに下大島(つくば市)、藤沢新田(新治村)などの銘が確認されている。

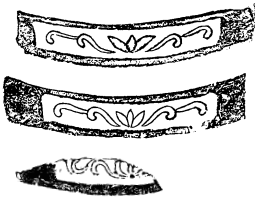
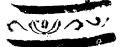




なお東海式と分類した資料についても、東海地方で生産されたものではなく、江戸近郊などで生産されたものである可能性も考えられる(註6)。

(4) 土浦城跡の軒平瓦の編年と展開

①土浦城跡軒平瓦の編年(案)

土浦城跡で確認されている瓦を、加藤氏・金子氏などの編年をもとに考えてみたい。とりあえず現在確認されている資料としては、上記の通り江戸式成立前の資料と考えられる土浦独自式の三葉文系の瓦が最も古いものと考えられる。年代は定かではないが、江戸式が17世紀後半に成立すると考えられることから、それ以前のものではないだろうか。ただし、金子氏が「江戸における近世瓦の様相」において17世紀初頭のものとして紹介している資料と比べれば土浦城跡の三葉文系瓦は明らかに新しい様相であることから、文献史料による東西櫓の創建時期である17世紀初頭まで遡るかどうかについては疑問が残る。

その後の土浦城跡の瓦については江戸式瓦が数多く確認できるため、概ね江戸式瓦の編年を準用することが可能かと考えられる。ただしどうやら江戸中期の資料は少なく、確認できる資料の多くは江戸後期から幕末・近代のものではないかと考えられる。なお土浦城における棧瓦の出現は明らかではないが、1781(天明元)年に米蔵が、1783(天明3)年に糶蔵が棧瓦葺きに改修された記録がある(註7)ため、18世紀末頃より棧瓦の導入が進められたと考えられる(註8)。

年 代	搬入品と考えられる瓦	在地生産と考えられる瓦
17C		
18C		
19C (幕末・近代)	  (『柴安』)	 (『前澤』)

第41図 土浦城跡出土軒平瓦の編年(案)

その他の地元生産の江戸類似式についても、形式的には江戸式の特徴に類似するため概ね江戸式の編年観が参考になると思われ、江戸式の編年観と同じかやや遅れた状態で推移したのではないかと思われる。ただし宝珠・唐草などが江戸式とはかけ離れた資料（第39図9）については位置付けが難しいが、胎土に長石・雲母などの不純物が多く製作技法的には稚拙と思われることや、確認されている瓦は軒平瓦で軒棧瓦ではないことから、地元で瓦生産が始められた初期の製品ではないかと想定した。

②土浦周辺の瓦生産

土浦城跡の瓦に確認されている『前澤』の銘は、土浦藩の瓦師であった前澤家を示していると考えられる。前澤家は近代まで瓦商を営んでいた家であるが、江戸時代は土屋氏転封以前から土浦に居住していたと思われる土着の藩士で、土浦藩では大工や庭師など技術者的な様相を持つ職に多く就いている。そのうち前澤惣兵衛が1808(文化5)年に、惣兵衛没後子の前澤源治が1840(天保11)年に「瓦師」を拝命しており、前澤氏が土浦城の瓦と緊密な関係を持っていたことは間違いない。この『前澤』銘瓦については前回胎土分析を行っているが、組成はこの地域の粘土と合致していることが確認されたため、地元生産の瓦であることが確認されている(註9)。また1851(嘉永4)年には高岡村(現：新治村高岡)において瓦の生産が百姓より代官宛てに願い出されており(註10)、江戸後期から幕末には土浦周辺の地域でも瓦の生産が始まったと考えても良さそうである。

③土浦城跡の瓦から見た近世瓦の流通

上記のことから、土浦城において瓦の需用が発生した17世紀においては、使用された瓦には在地生産のものではなく、全て搬入品であったと考えられる。このことは瓦が使用されたのが城内の限定された建物であった(註11)こともあり、生産技術が確立していない地元において瓦を生産するよりも、生産地として確立していた他の地域から瓦を搬入したほうが有利であったためと想定され、『柴安』銘瓦をはじめとした江戸及び近郊生産の瓦が幕末～近代初頭まで土浦に搬入され使用されていたと考えられる。このように瓦が江戸地廻り経済圏の1つの流通品として広域に流通していたことは従来あまり省みられることは少なかったが、利根川沿いの河岸の荷物にも瓦が存在していることが史料からも確認できる(註12)ため、江戸及び江戸近郊で生産された瓦が利根川・霞ヶ浦沿岸地域において広範囲に消費されていたことは間違いない(註13)。

その後江戸後期以降土浦城内における瓦葺き建物の増加及び城内の商家などにも瓦葺きが普及する(註14)など瓦需用が増加したことに伴い、他地域からの技術導入を含めて地元における瓦生産が始まったものと考えられる。ただし近代になっても地元生産の瓦の出来は芳しいものではなかった(註15)ようではあるが、値段が比較的安かったため地元の瓦需用を搬入品とともに充たしていたと考えられる。また同様に霞ヶ浦沿岸地域においては、下大島や藤沢新田など土浦近郊の瓦が江戸近郊からの搬入瓦よりも安価な瓦として広域的に流通していた可能性も(註16)考えられる。

(5) 今後の課題

今回の考察では製作技法などについての検討については行えなかったため、今後も資料の検討を進める必要がある。また土浦城跡の近世瓦について1つの考え方を示してみたが、残念ながら近世瓦についての研究はまだ少なく、特に茨城県内などでは近世瓦の報告例自身も少ないために瓦の流通などについては非常に限定的で推定の多いものとなってしまった。周辺地域の調査が進めば明らかになることも多いと思われるので、今後の調査に期待したい。

- (註1) 平成3年に竣工した西櫓では、屋根からの雨落ちによって北西側（濠側）の土壇上部が崩れたため土嚢を積上げて補修したことがある。現在は斜面に草が生えたため補修箇所は目立たなくなっている。
- (註2) ただし、軒棧瓦の平瓦部に使用されたもので近代のものと考えられる。
- (註3) 詳細は『史跡 土浦城跡』2002参照。
- (註4) 江戸近隣で結晶片岩を含む粘土を産出する地域としては荒川流域があるが、断定はできない。
- (註5) 『柴安』瓦については『江戸・東京のやきもの』葛飾区郷土と天文の博物館2001に纏められている。
- (註6) 1999年江戸遺跡研究会発表時に金子氏より教示。なお江戸東京博物館調査報告書第4集『今戸焼』に集録された葛飾区青戸の染谷氏埴巢製瓦関係資料の瓦沓は東海式であり、江戸及び近郊でも東海式の瓦沓が使われていたことが判る。
- (註7) 長島家文書『御城内外御定法書』より。
- (註8) 江戸時代の土浦の教育者であった沼尻墨僊（安永4：1775～安政3：1856）が記した『墨僊漫筆之稿』の中に「算瓦屋根ハならや甚兵衛本町に家作して算瓦ふき出来たり此時分珍しきやうに覚ゆ」の記載があり、土浦市中においても棧瓦の導入は18世紀末から19世紀前半頃であったと考えられる。
- (註9) 詳細は『史跡 土浦城跡』2002参照。
- (註10) 「嘉永四年 高岡村地内にて瓦焼立願」『新治村史史料集』第4編 1985より
- (註11) 土浦城の古絵図を見ると、土浦城内の瓦葺の建物は江戸後期まで東・西櫓、櫓門、大手門、搦手門などの主要建物に限定されている。
- (註12) 江戸後期の「蔵舗庭銭覚」（五木田家文書）には水海道河岸を經由し鬼怒川上流に運ばれた荷物の中に瓦が見られる（『利根川ハイウエー』千葉県立関宿城博物館1996 より）。また『柴安』瓦も葛飾区内や旧江戸御府内、流山・野田及び土浦まで流通が確認されている（前出註4より）。
- (註13) 千葉県佐倉市佐倉城跡出土瓦にも外丸御殿出土瓦（第40図5）と類似した資料があり、遺物の面からも18世紀中葉以降には江戸及び江戸近郊生産の瓦が内陸河川交通を利用して関東の広範囲に移動していたことも想定される。
- (註14) 土浦城内外の瓦葺建物の普及は1816（文化13）年の大火が契機になったと考えられている。神戸信俊氏より教示。
- (註15) 佐賀純一著『田舎町の肖像』1993には土浦の瓦職人であった砂田孝一氏（1904年生）の談話が載せられているが、それに拠れば地元の瓦は、固さ・重さ・大きさにばらつきがありいわば「中の下」の代物で、三州瓦と比べれば大人と子供の製品位の違いがあったと話している。
- (註16) 前出の砂田氏は八郷町をはじめ江戸崎・木原（現美浦村）までを仕事の範囲としており、この範囲においては同様に瓦が使用されていた状況であったものと思われる。なお、砂田氏が近代の地元の窯元所在地として挙げている地名は下大島及び沢辺（現新治村）・田戸辺（現新治村）の藤沢新田の近隣地域である。

第7章 付 編

土浦城跡・本丸東側土塁地中レーダー探査の概要

発掘調査終了後の2004年3月15日、テラ・インフォメーション・エンジニアリングの協力のもと、土浦城跡本丸土塁・東櫓周辺の地中レーダー探査を行った。

1. 調査場所

①東櫓北側斜面、②東櫓東側斜面、③土塁東側斜面、④土塁南側斜面・天場、⑤櫓門東側土塁の5ヶ所に測線を設定し、レーダー探査を行った。

2. 調査の方法

A. 調査者：渡辺広勝（テラ・インフォメーション・エンジニアリング）

B. 使用機材：KSD-8KODEN

C. 調査方法：斜面上及び土塁上平坦面について人力でアンテナを移動し、地中の反応を観察した。

3. 調査の概要

①東櫓北側斜面

第3次調査第4トレンチの東側である。調査では東櫓櫓台の上部において、土塁部分と反応が異なることが観察され、斜面に葦石が存在する可能性が考えられる。ただし、反応的には表面的だけではなく、土壇の盛土層として存在する可能性も想定される。

②東櫓東側斜面

第3次調査第3トレンチの両側である。調査では北側斜面と同様の反応が確認された。

③土塁東側斜面

第1次調査北区の北端である。土塁天場においては石敷遺構の反応を確認することができたが、斜面が急峻なため斜面部の調査は出来なかった。

④土塁南側斜面・天場

第1次調査の北区と南区の間及び第3次調査の第1・2トレンチ周辺である。調査では攪乱状の反応が拡がっており、遺構らしい反応は検出されなかった。

⑤櫓門東側土塁

第3次調査第5トレンチの東側である。調査の結果、土塁の盛土層に3回程度の土質の違いがある反応が見られた。また塀基礎遺構かと推定される反応が観察された。

4. 調査のまとめ

今回の調査は1日という限定された調査ではあったが（1）東櫓北側においても葦石が存在する可能性がある。（2）土塁南側には攪乱部分が拡がっている（3）櫓門東側には塀基礎が遺存している可能性があることなどが指摘された。特に東櫓の周囲に土壇・葦石が存在する可能性が高まったことは大きな発見であるが、葦石ではなく、石を含む基壇である可能性も指摘されたため、解釈には今後の検討が必要であろう。

第8章 調査のまとめ

今回報告した2回の発掘調査は、2000年の第1次発掘調査を受けた補足調査として計画されたもので、合計調査面積約50.5㎡、期間も合計で約2ヶ月程度と規模の小さな調査ではあるが、第1次調査で明らかにできなかったいくつかの点について確認することができた。

まず塀の取り付き方については、第2次調査で東櫓の南東角に塀が取り付くことが判明したほか、第3次調査では櫓門袖から直線的に土塁上に延びていることが確認された。また葺石状遺構についても東櫓東側でも確認できたことから、本丸土塁の濠側についてある程度の規模で施工されたものである可能性が高くなった。特に第3次調査第3トレンチにおいては、検出された葺石状遺構の直上を被覆する土層から明治17年東櫓廃棄時のものと思われる瓦の集積が確認されたため、江戸時代には葺石状遺構がまだ機能していた可能性が高いことが明らかとなった(註1)。このことは、土浦城の江戸時代の景観を考える上でも大きい発見である。また砂利敷遺構など東櫓に伴う遺構が今回の調査で新たに発見されたことも主な成果として挙げられる。

ただし、土塁南東角部における塀基礎遺構や土塁南側(櫓門側)の葺石状遺構については今回の調査でも確認することができず、不明な点として残ってしまった。また砂利敷遺構の推定施工範囲が東櫓の屋根伏せと合わない点についても、今後に新たな疑問を提示する結果となってしまった。

土浦城跡の発掘調査については、1985年の二ノ丸・本丸調査以来今回までに都合8回行われてきたことになる。その間に収集された土浦城跡関係の資料の集積は調査の始まった約20年前と比べれば比較にならないほど多くなり、新しい土浦の歴史の1頁を紐解いた部分も数多く存在している。また櫓門の解体修理に始まった土浦城址整備事業も、郁文館の正門修理、西櫓・東櫓の復元などの成果を挙げている。

これらの先人が残してくれた資料を未来にどのように伝え、どのように活用していくか、現代の私たちはこの問題について今後とも真摯に考えていかなければならない。

(註1) 第1次調査時に葺石状遺構を被っていた「濠側土層」については堆積年代が不明であったが、今回議会史料を調査したところ、戦後に濠浚漂を行った際に浚漂土を土塁に廃棄していたことが分かった(第3表参照)ため、この時に積み上げた土である可能性が考えられる。濠側土層からはビニールなどの化学製品は発見されないが、第3次調査第1トレンチではコンクリートが発見されている。このような土層の混入物の特徴については戦後の堆積土であれば納得できる。

—参考文献—

- 国学院大学穴塚調査団
 土浦市史編さん委員会
 坪井利弘
 佐倉城本丸址発掘調査団
 茨城大学史学第6研究室
 坪井利弘
 塩谷 修ほか

 石川功・岡林孝作・滝沢誠・東憲章

 加藤 晃

 小川和博ほか
 吉田恵二ほか
 土浦市教育委員会
 小川和博ほか
 土浦市文化財愛護の会
 土浦市議会議会史編さん特別委員会
 黒澤春彦
 テラ・インフォメーション・エンジニアリング
 加藤 晃
 榎 陽介

 土浦市遺跡調査会
 土浦市立博物館
 雨谷 昭
 石川 功

 小森正明

 (財)茨城県教育財団

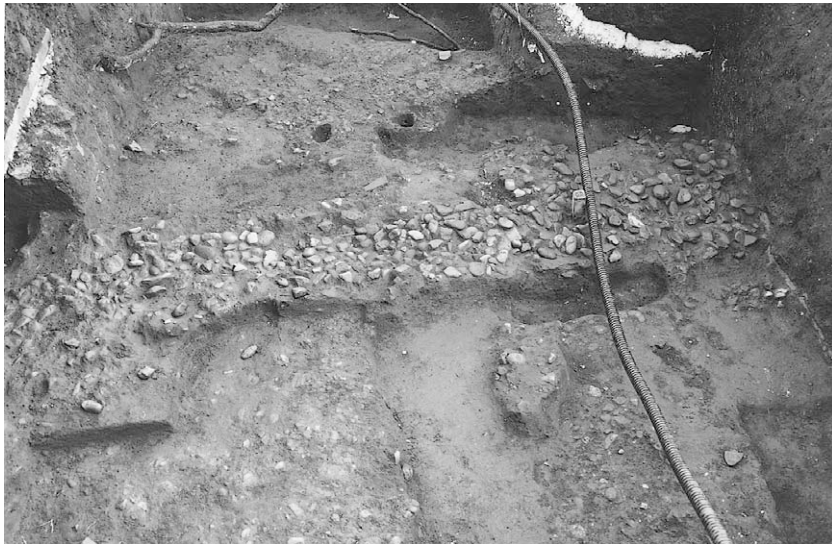
 佐藤孝雄・大内千年ほか
 土浦市教育委員会
 永川 強
 金子 智

 木下 良 編
 肥田順一
 大淵淳志・吉田恵二ほか
 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 石川県立埋蔵文化財センター
 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
 土浦市立博物館
 西ヶ谷恭弘
 石川 功

 石川 功
 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
 三浦正幸
 森 宏之

 江戸遺跡研究会
 香川元太郎
 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
 神戸信俊・石川功 ほか
 土浦市立博物館
 谷口 榮
 加藤理文ほか
 石川 功ほか
 関口 満

 山崎信二
 金子 智
- 1971 『常陸穴塚』
 1975 『土浦市史』
 1976 『日本の瓦屋根』 理工学社
 1982 『総州佐倉城—佐倉城本丸址発掘調査概報—』
 1983 『土浦の遺跡』 土浦市教育委員会
 1986 『図鑑 瓦屋根(改訂版)』 理工学社
 1987 『般若寺遺跡(西屋敷地内)・竜王山古墳 般若寺遺跡(穴塚小学校地内)発掘調査概報』 土浦市教育委員会
 1988 「第5章地下遺構の調査」
 『茨城県指定文化財 土浦城址内櫓門保存修理工事報告書』 土浦教育委員会
 1989 「江戸時代の瓦における江戸式の展開」
 『史学研究収録』第14号 国学院大学日本史学専攻大学院会
 1989 『木田余台』 土浦市教育委員会
 1989 『茨城県指定史跡 土浦城址発掘調査報告書』 土浦市教育委員会
 1989 『寺嶋誠斎 土浦史備考 第1巻』
 1990 『木田余台I』 土浦市教育委員会
 1990 『土浦市議会50年のあゆみ』
 1990 『むかしの写真土浦』
 1991 『土浦市八幡下遺跡発掘調査報告書』 土浦市教育委員会
 1991 『県指定史跡 土浦城址地中レーダー探査報告書』
 1992 「江戸瓦の変遷」『国学院雑誌』第93巻12号
 1992 沼尻墨徳「墨徳漫筆之稿」について—土浦の町の民俗のために—『土浦市立博物館紀要』第4号
 1992 『田村・沖宿地区遺跡調査現地説明会資料』
 1992 『絵図の世界』
 1993 『常陸史の研究』 筑波書林
 1993 「西櫓地下遺構の調査」
 『茨城県指定史跡 土浦城址内 土浦城西櫓復元工事報告書』 土浦市教育委員会
 1993 「常陸国富有人注文の基礎的研究」
 『茨城県史研究』第71号
 1994 『(仮称)上高津団地建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書 寄居遺跡、うぐいす平遺跡』
 1994 『上高津貝塚A地点』 土浦市教育委員会
 1994 『寺嶋誠斎 土浦史備考 第3巻』
 1995 『国宝・重要文化財日本の城』別冊歴史読本7 新人物往来社
 「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒椀瓦の地方色」
 『古代』第101号 早稲田大学考古学会
 1996 『古代を考える 古代道路』吉川弘文館
 1996 『六十原A遺跡』 土浦市教育委員会
 1996 『土浦城(外丸御殿跡)発掘調査報告書』 土浦市教育委員会
 1997 『清洲城下町遺跡Ⅶ』
 1997 『金沢城石川門前土橋(通称石川橋)発掘調査報告書I』
 1997 『埋蔵銭の物語』
 1997 『中世の霞ヶ浦と律宗』
 1998 『土浦城二の丸・本丸試掘調査 発掘調査報告書』 土浦市教育委員会
 1999 「土浦城の近世瓦—土浦城出土・使用の軒平瓦を中心として—」
 『江戸遺跡研究会報』No.72
 1999 「土浦市内で発見された中世埋蔵銭の新資料」『菟玖波』第3号
 1999 『常名台の古代のむら』
 1999 『焼き物にみる中世の世界』
 1999 『城の鑑賞基礎知識』至文堂
 1999 「城を復元するく備中松山城本丸」『最新研究日本の城世界の城』別冊歴史読本03 新人物往来社
 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』 柏書房
 2001 「よくわかる築城学入門」第9回『歴史書群像』No.45 学習研究社
 2001 『土浦の旧石器』
 2001 『茨城県指定史跡 土浦城跡内 土浦城東櫓復元工事報告書』 土浦市教育委員会
 2001 『土浦古地図の散歩道』
 2001 『江戸・東京のやきもの—葛飾の今戸焼—』葛飾区郷土と天文の博物館
 2002 『城の見方歩き方』別冊歴史読本16 新人物往来社
 2003 『史跡 土浦城跡』 土浦市教育委員会
 2003 「土浦城跡(二ノ丸)」「土浦城跡(外丸御殿)第2次調査」
 『上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報』8号
 2003 「近世瓦の技法と編年」『関西近世考古学研究Ⅹ』関西近世考古学研究会
 2003 「江戸における近世瓦の様相」『関西近世考古学研究Ⅹ』関西近世考古学研究会



第 2 次調査
塀跡 (SAH) 検出状況
(北西より)



塀跡 (SAH) 検出状況
(北東より)



砂利敷遺構検出状況
(南西より)

図版 2



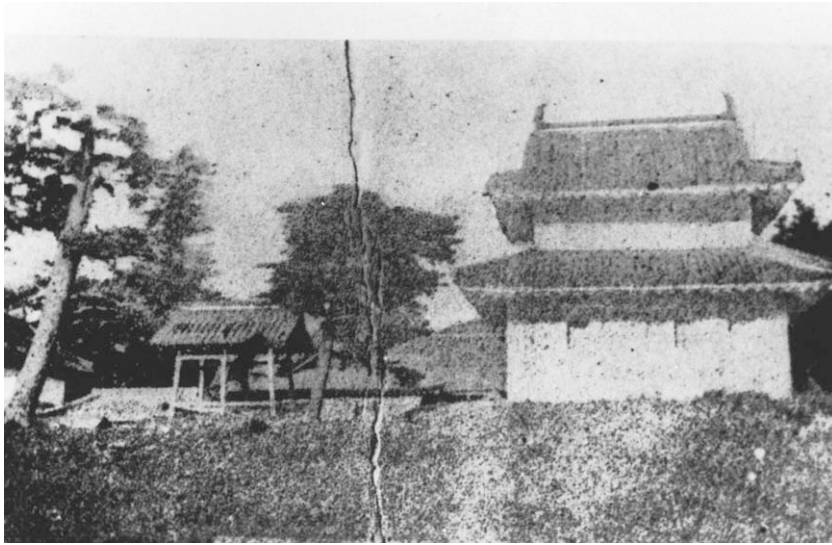
堀跡 (SAH) 近接
(南西より)



堀跡 (SAH) 土層断面
(南西より)



瓦廃棄土坑 検出状況
(南東より)



東櫓周辺古写真
(撮影：1884(明治16)年以前)
(南東より)



第3次調査 第1トレンチ
調査前現況
(南より)



第1トレンチ
遺物出土状況
(南より)

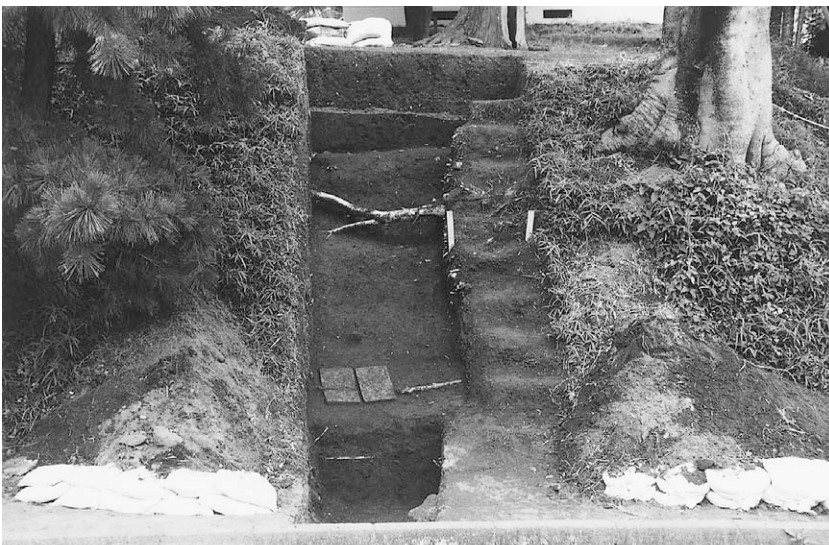
図版 4



第1トレンチ
土層断面（上部）
（東より）



第1トレンチ
土層断面（下部）
（東より）



第1トレンチ
全景
（南より）



第3次調査 第2トレンチ
調査前現況
(南東より)



第2トレンチ
土層断面
(北東より)



第2トレンチ
全景
(南東より)

図版 6



第3次調査 第3トレンチ
調査前現況
(南東より)



第3トレンチ
遺物及び葺石状遺構
検出状況
(北東より)



第3トレンチ
遺物及び葺石状遺構
検出状況
(北西より)



第3トレンチ
遺物出土状況
(北東より)



第3トレンチ
葺石状遺構
検出状況
(北より)



第3トレンチ
葺石状遺構
検出状況
(北西より)

図版 8



里蔵文化財発掘調査中
こつき立ち入らないで
下さい。

第3次調査 第4トレンチ
調査前現況
(北西より)



第4トレンチ
遺物出土状況
(南より)



第4トレンチ
全景
(南より)



第4トレンチ
地業跡
検出状況
(西南より)



第4トレンチ
土層断面
(南より)



第4トレンチ
全景
(北より)

図版10



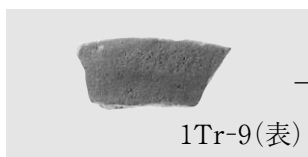
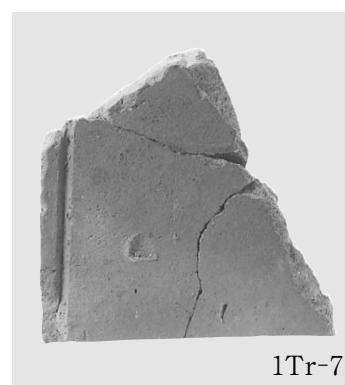
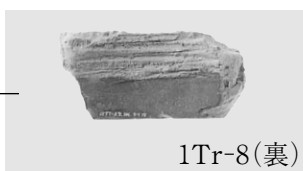
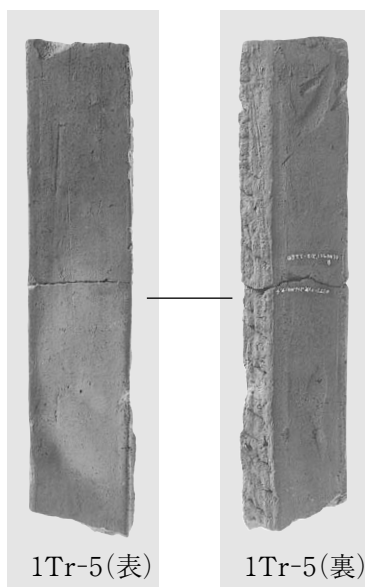
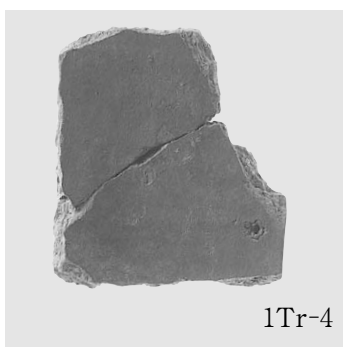
第3次調査 第5トレンチ
調査前現況
(南西より)



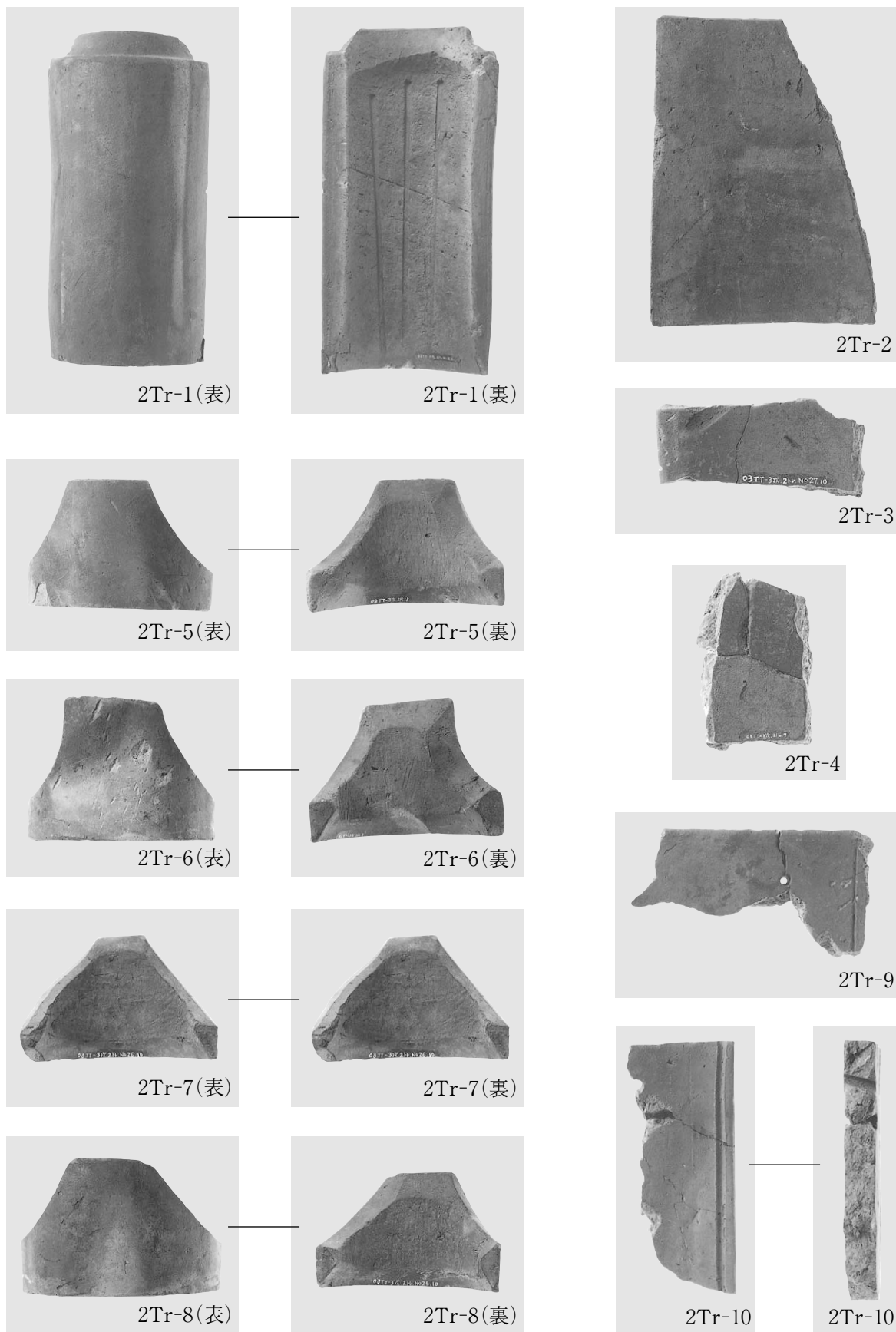
第5トレンチ
塀跡 (SAH) 検出状況
(東より)



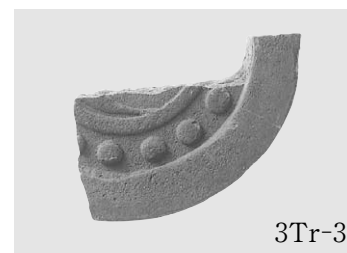
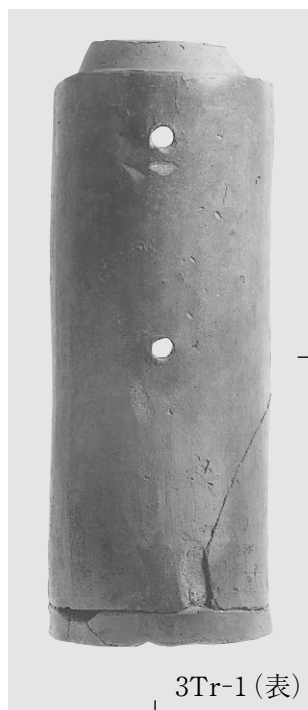
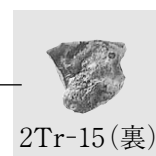
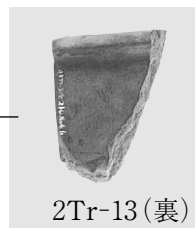
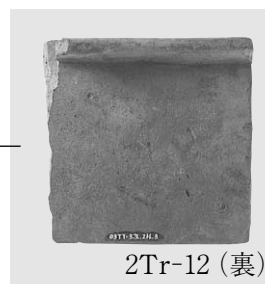
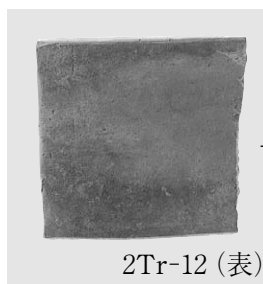
第5トレンチ
全景
(南より)



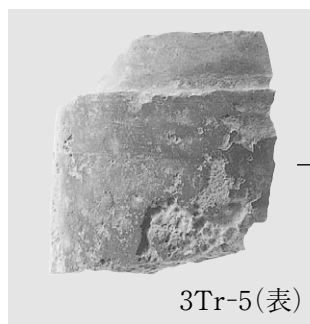
図版12



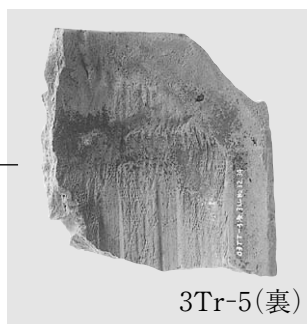
第3次調査 第2トレンチ出土遺物



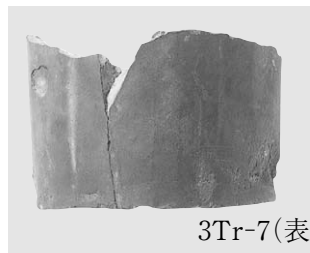
図版14



3Tr-5(表)



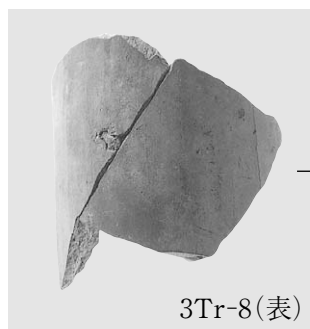
3Tr-5(裏)



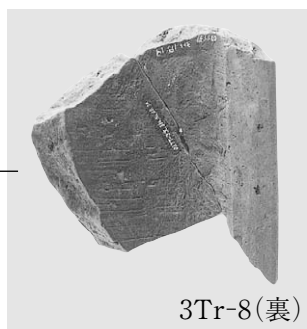
3Tr-7(表)



3Tr-7(裏)



3Tr-8(表)



3Tr-8(裏)



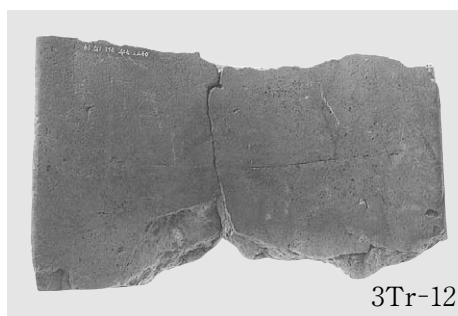
3Tr-6



3Tr-9



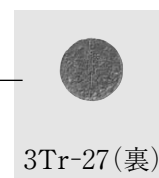
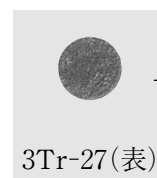
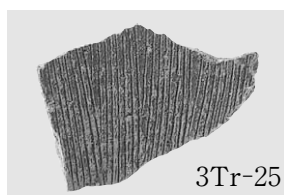
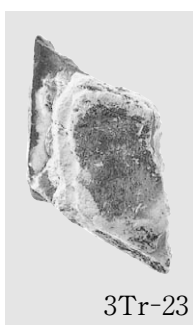
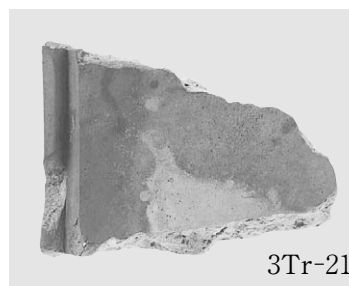
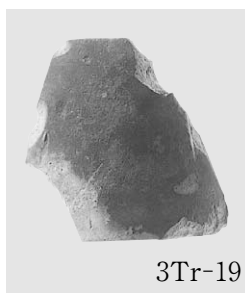
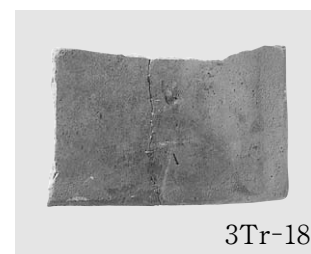
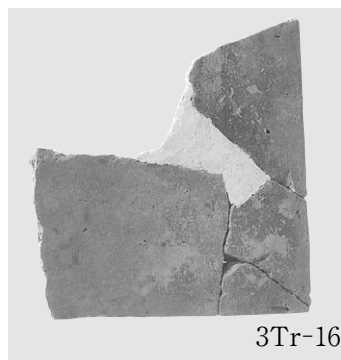
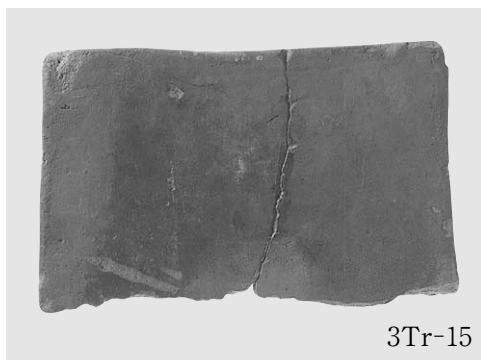
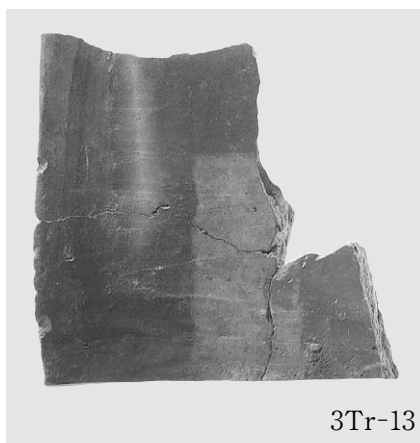
3Tr-10



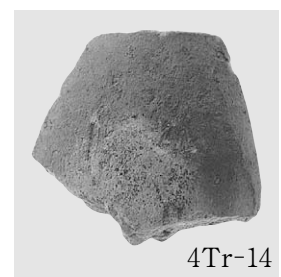
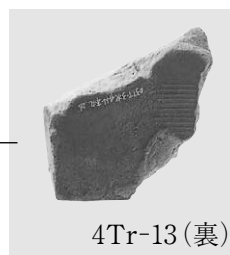
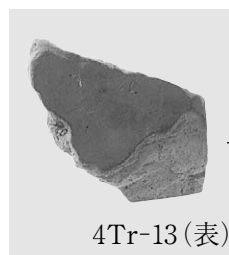
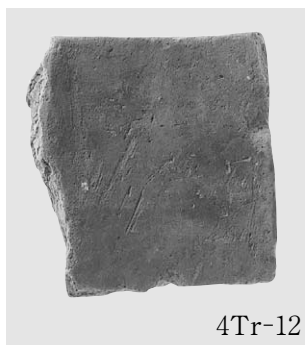
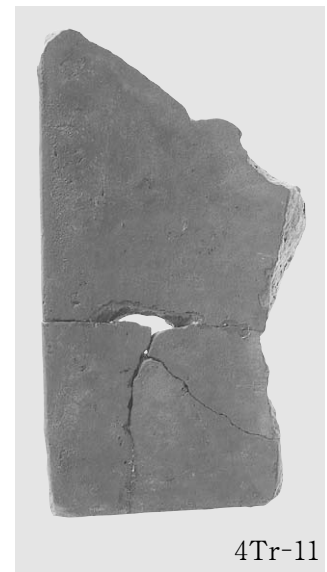
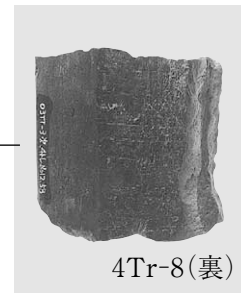
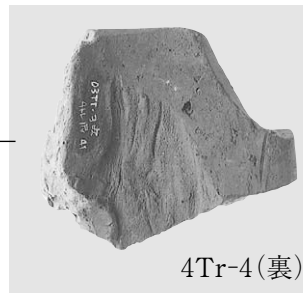
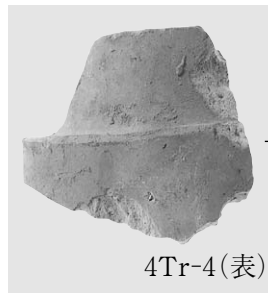
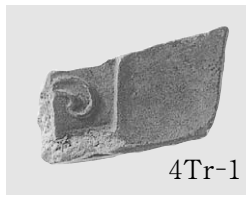
3Tr-12

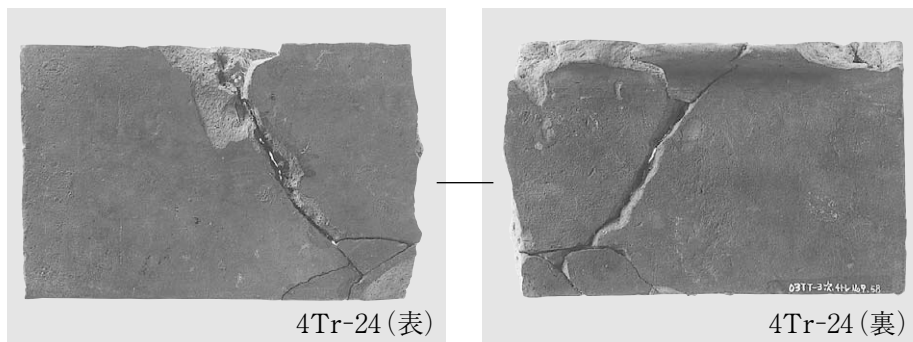
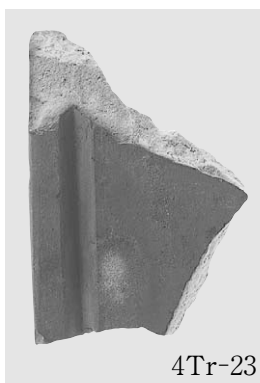
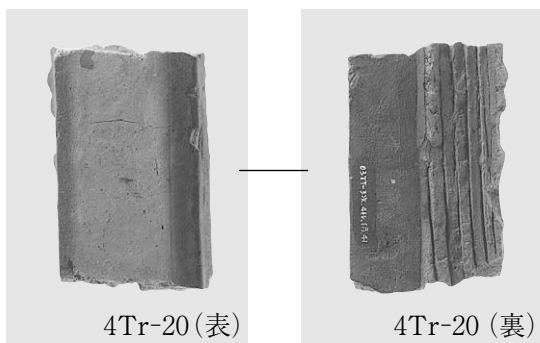
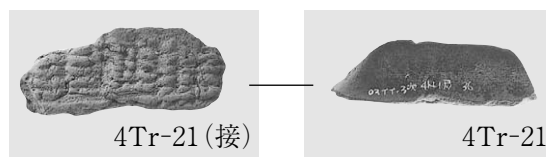
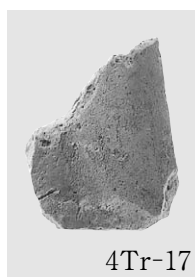
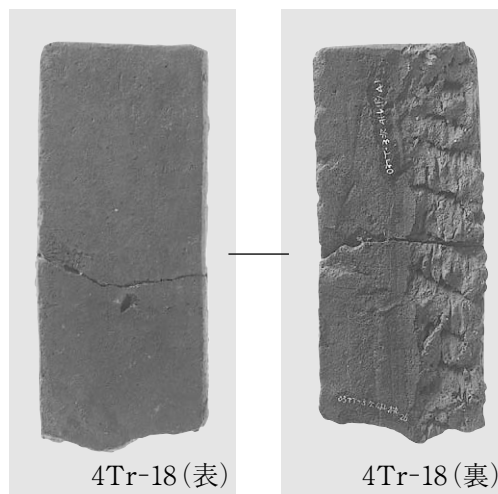


3Tr-11

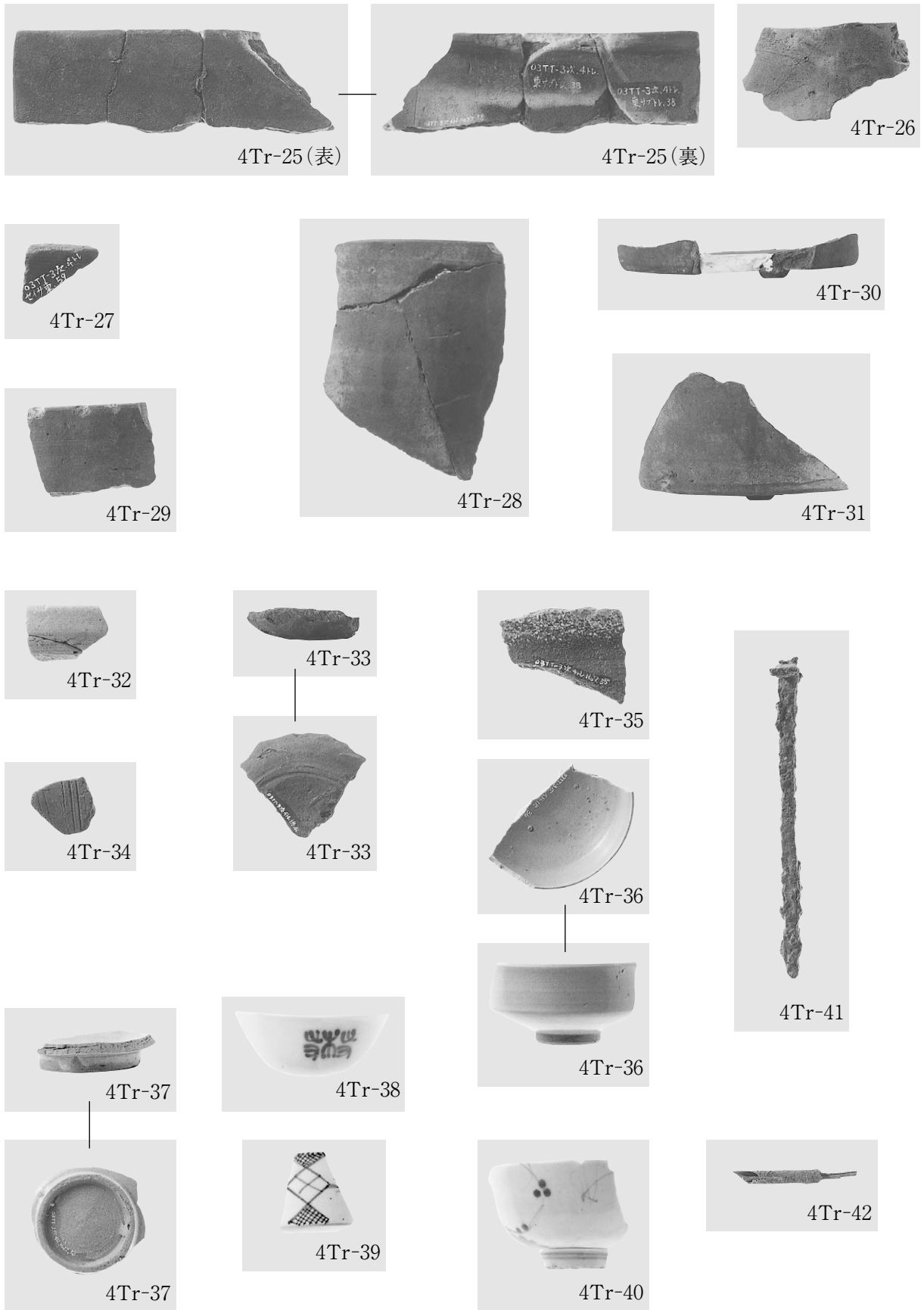


図版16

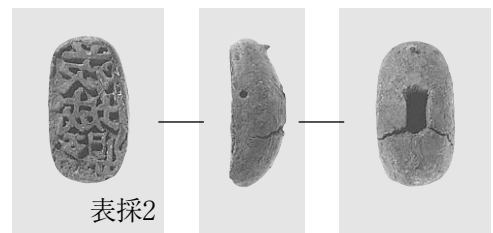
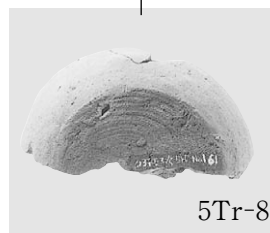
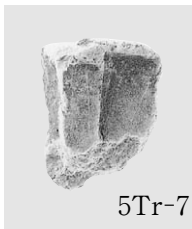
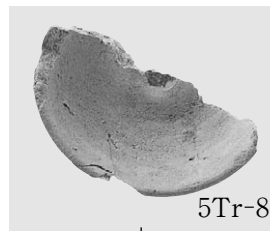
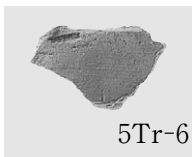
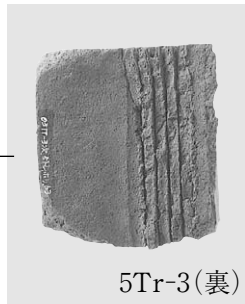
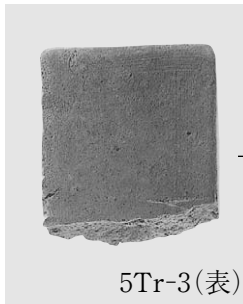
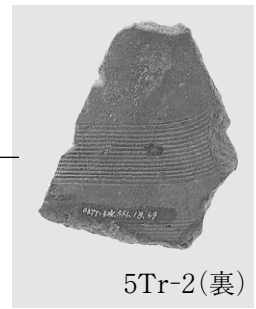
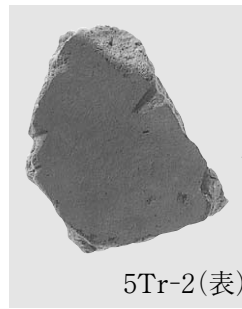
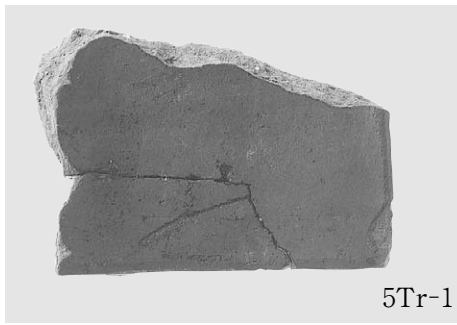




図版18



第3次調査 第4トレンチ出土遺物



第3次調査 第5トレンチ出土遺物、表採資料

報告書抄録

ふりがな	しせき つちうらじょうあと に							
書名	史跡 土浦城跡Ⅱ							
副書名	茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う埋蔵文化財第2次・第3次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	石川 功	著者名	石川 功 窪田恵一					
編集機関	土浦城跡第三次調査会							
所在地	〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内 TEL 029 (826) 7111							
発行年月日	2004年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つちうらじょうあと 土浦城跡	つちうらし 土浦市 ちゅうおういっちようめ 中央一丁目	08203	266	36° 4' 55"	140° 12' 10"	第2次調査 2003(平成 15)年 1月28日～ 2月7日 第3次調査 2003(平成 15)年 7月29日～ 8月30日	約12m ² 約38.5m ²	土浦城跡の整備 にともなう資料 収集
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
土浦城跡 (第2次・第 3次調査)	城館跡	江戸時代	土塁 1条 (葺石状遺構) 塀跡 1条 櫓台 1基 その他地業跡など	瓦類(軒丸・軒平・ 平・丸・板塀その他) 土器・陶器・磁器・ 金属製品(鉄釘・ 銅印) など		・塀の設置状況を確認 ・土塁斜面に葺石状遺構を 確認 ・東櫓櫓台に砂利敷を確認 ・東櫓脇で明治17年の東櫓廃 棄に伴う瓦の集積を確認		

史跡 土浦城跡Ⅱ

－茨城県指定史跡土浦城跡の整備に伴う
埋蔵文化財第2次・第3次発掘調査報告書－

発行日 2004年3月15日
編集 土浦城跡第三次調査会
発行 土浦市教育委員会
問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811
茨城県土浦市上高津1843
TEL 029 (826) 7111
印刷 株式会社 横山印刷

